女子文壇

第二巻第八號

明治三十九年六月一日發行（毎月一回）
明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可



毎號 皇太子妃殿下賜上覽

女子文壇

第二卷第八號目次



本號 石版極彩色口繪―三宅克己先生 水彩畫（水村の初夏）◎鏑木清方先生繪はがき（紫陽花姫）

國語漢文界之二大寶典

文學士內海弘藏著

讀書作文辭典

本書は主として世の學生諸子が讀書と作文とに資せむが爲に著されたる特殊の辭書にして實用的ならむことを期するとともに又よくその根本的ならむことをつとめられたりすなはちその語彙は主としてこれを現時の學校にて讀まれつゝある讀本の上より拾ひ來りしかしてこれをその意義の上よりその意趣の上より丁寧に適切に解釋せられたり難語熟語成語故事有職に關する語より地名人名書名格言俚諺術語の類に至るまであまねく皆これに網羅せらる殊に本書がその特色として誇るべきは一語の下にあまねくその同意語反意語類語をあはせのせて以て學生諸子にその比較攷究の便を與へたるにあり稿を起してよりこゝに四年有半著者の苦心以て見るべきなり本書一たび出てゝ庶幾くば世の學生諸子をしてその意識的なる國語の智識を身に體するの實を完うせしむることを得むか

兩書 內容見本 御入用の向は 御一報次第送呈

洋布製新式薄表紙美本四六判形舶來紙印刷
語數貳萬有餘●紙數一千三百頁索引附
定價金壹圓五拾錢
小包料金拾五錢

特價金壹圓貳拾錢 壹萬部限 要送料

文學博士三島中洲監修 池田蘆洲輯著

故事熟語辭典

洋布製新式薄表紙美本四六判形舶來紙印刷
語數壹萬有餘●紙數一千三百頁索引三種附
定價金壹圓五拾錢
小包料金拾五錢

特價金壹圓貳拾錢 壹萬部限 要送料

兩書共 滿數後 斷然復價

本書 **一** 普通の故事熟語の外に官職制度文體詩體書體書法詩句俚諺名數佛語俗語略字古字類字等を掲げ材料は極めて多方面に渉り **二** 毎項意義出處の二欄を置きて之を說明し更に考異使用殊疑探原轉用誤用餘論の各欄ありて之を詳說せり **三** 十三經二十四史諸子百家の書凡五百餘種の解題と其の參考書とを載せて讀書者の燈明臺となる **四** 文字を以て說述し難き點は圖書又は表を掲げ百聞は一見に若かざるの感あらしむ **五** 解釋は平易を旨とし何人にも一讀の下瞭然たることを得せしむ **六** 最も索引に意を用ひ字音索引字書索引國語索引の三種を附したれば如何なる方面よりも容易に引き出すことを得 **七** 如上の外特色極めて多し讀書作文に志せる士は必ず一本を座右に置きて應急搜索の用に供せられよ

兩書 共製本既成

發行元 寶文館
東京市日本橋區本石町三丁目
大阪市東區備後町四丁目

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

見よ●親切無二の獨修書を●見よ

法學博士和田垣謙三賛助　中學英語研究會編纂

質問
隨意

最新最詳 英語獨修初歩

上製全一册(答解共)
四六判形寫眞版挿入
定價金六拾錢
郵税金八錢

●本書の特色●

冠して最新といふこれ最新の研究法を採りたるに依る冠して又最詳といふ說明最詳細を極めたるに依る(一)獨修者の最困難を感ずる發音の說明に最力を用ゐ巧緻なる挿畫約三十枚直接師に就きて學ぶと大差なからしめんことを期す(二)綴字文法上の說明は平易なる口語文を用ゐ最詳細にして最親切ならんことを期す(三)此書一册よく初步英語全科(讀方譯解作文會話文法綴字習字)を遺憾なく修得せしめんことを期す殊に習字帖を一定し書方を詳說し且つ其添削を請ふことを許したり(製本既成)

質問
隨意

增訂 新式英語獨修書

上製全一册(答解共)
四六判形挿畫入
定價金壹圓
小包料金拾錢

此書客年第一版を公にするや諸新聞紙上●最新なる編纂法になれるもの●學科的系統を追ひて讀方譯解會話作文文法習字等英語の全科を敎ふるの●理想的最新最詳の英語獨修書●校に在り師に就ける者の好參考書家に於て自修する者唯一の獨修書等の好評を得たるもの今回新に◎書簡文の書方◎其他須重なる◎新材料を增補し◎增訂第二改版を發賣す幸に倍舊の愛讀を給へ

右兩書共編者會員責任を以て讀者の質問に答へ作文習字の添削に應ず蓋方今無類最親切なる責任を重んずる唯一獨修書也

中學英語研究會編 ●對譯詳註 **英語一口噺** 定價金廿錢 郵税金貳錢

中學英語研究會編 **和文英譯獨練習** 定價金廿錢 郵税金貳錢

中學英語研究會編 **英文和譯獨練習** 定價金廿錢 郵税金貳錢

文學士坂本健一編 ●增訂 **外國地名人名辭典** 價壹圓廿錢 小包料十錢

法學士田邊慶彌編 **法律經濟辭典** 定價金壹圓 小包料拾錢

文學士朝永三十郎 ●增訂 **哲學辭典** 定價金貳圓卅錢 小包料拾五錢

(製本既成)

●最近改正出版圖書目錄御入用の向は往復端書にて御申込あれ無代進呈す

發兌元　東京市日本橋區本石町三丁目　大阪市東區備後町四丁目　寶文館

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ



舶來薄絹

嶄新材料

シホン

ホワイトリープス

郵劵五錢御送附相成候はゞ見本送呈可仕候

各女學校御用

附屬品並に造花器械類一式

天野卯兵衛

東京市日本橋區横山町一丁目十六番地

電話【長】浪花一六四三番

營業目錄御入用なれば此切取を添へ御申越被下度候

……切取線……

縣　郡　町村

（女子文壇）

女子家庭の新讀物

活きたる眼を開いて活きたる書物を讀めとは、古人も曰ひましたが、**本書の如きは活きたる詩人の生命です。**一字一句にも作者の胸に觸れた感興の響があつて、本書の何頁を開いても、感興の活動して居ない處はありません。作者が純潔なる理想を、淸らかな美文と、優しい詩とに表はしたもので、もと〲女性の讀み物として編輯したものですから、美文や詩に志ある女子には、**此上新しい模範はなく、**單に**家庭の讀み物としても、外に類はありません。新躰詩三十二篇、美文三十四篇**を收めて、躰裁は本綴、**最新式の意匠を用ゐ、**諸孃の机上に飾られても、決してはづかしくない文學書です。

河井醉茗君著
山中古洞君畫

（製本出來＝着全即日送本す）

（表紙書及アート紙原色寫眞密刷口繪）

詩と美文 玉蟲

全一冊 中形上等紙印刷
本綴クロス金字入上製美本

正價六拾錢（直接申込に限り郵料不要）

目次

發兌元 東京京橋大鋸町十、十一 **女子文壇社** 電話本局＝六〇七番

△特約賣捌＝東京堂、北隆館、東海堂、上田屋、良明堂、各店

文士奇譚

文學士久保天隨君編（再版）

口繪入 慶澤雪夜屋に上りて赤穗義士の討入を窺ふ
蜀山提灯に描きて下男の貧を救ふ
（不折蕭伯筆石版五色摺）

文士印譜（二遍刷）▲附錄：（名著序文集）

▲全一冊大判百三十頁　正價拾錢　郵税一錢

立志訓

文學士　大町桂月先生序
長谷川天溪君校閱
立野天風君編

▲正價金貳拾錢　郵税二錢　全一冊袖珍

（諸新聞雜誌の好評）第三版

歐洲學生の生活

文學博士建部遯吾君述
原田道寬編

全一冊袖珍　正價二拾錢　郵税四錢

學生必讀 旅行の友

全一冊美裝　實價拾六錢　郵税二錢

皇太子殿下每號御上覽

六卷第拾二號（六月一日發行）

秀才文壇

自宅習文唯一

懸賞 小說、美文論文、新體詩、和歌、俳句、川柳、五行文學、日用文滿載

筆戰雜誌中王（大判百廿頁 寫眞口畫入）

定價　一冊拾錢　六冊金五十七錢　十二冊一圓八錢　送無料

父母と子供

慶應義塾々長鎌田榮吉君題辭
慶應義塾教授菅　綠蔭君譯（再版）

目次

○總論●新誕生兒に就て●第一期の教育●幼兒の言葉に就て●餘計なる心配は無用なり●子供は愛す可きものなり●子供は奴隷にあらず又暴君にあらず●理論は餘り早く教ふ可からず●虛言及び模範の勉力に就て●體育に就て●衣服に就て●睡眠に就て●五官の修養●觸官に就て●視官に就て●畫學に就て●聽官に就て●音聲に就て●味官に就て●勉强の時代●好奇心に就て●實物教育に就て●學問と趣味●實驗物理學●實學に就て●「ロビンソン、クルーソー」●結果―十四五歳頃の子供

全一冊中判　洋裝美本　正價參拾錢　郵税四錢

此軍艦帖は紀元節をトし東京市四谷第一、二、三尋常高等小學校を始め全國重なる各學校にてつまらぬ菓子抔を廢し數萬部御買上の命を忝ふせり殊に「紀念品としては上乘の者なり」との讚辭をさへ賜はりしは無上の光榮といふべし

▲美術寫眞銅版三色刷▲

軍艦寫眞帖

第七版

附錄大捷軍歌集

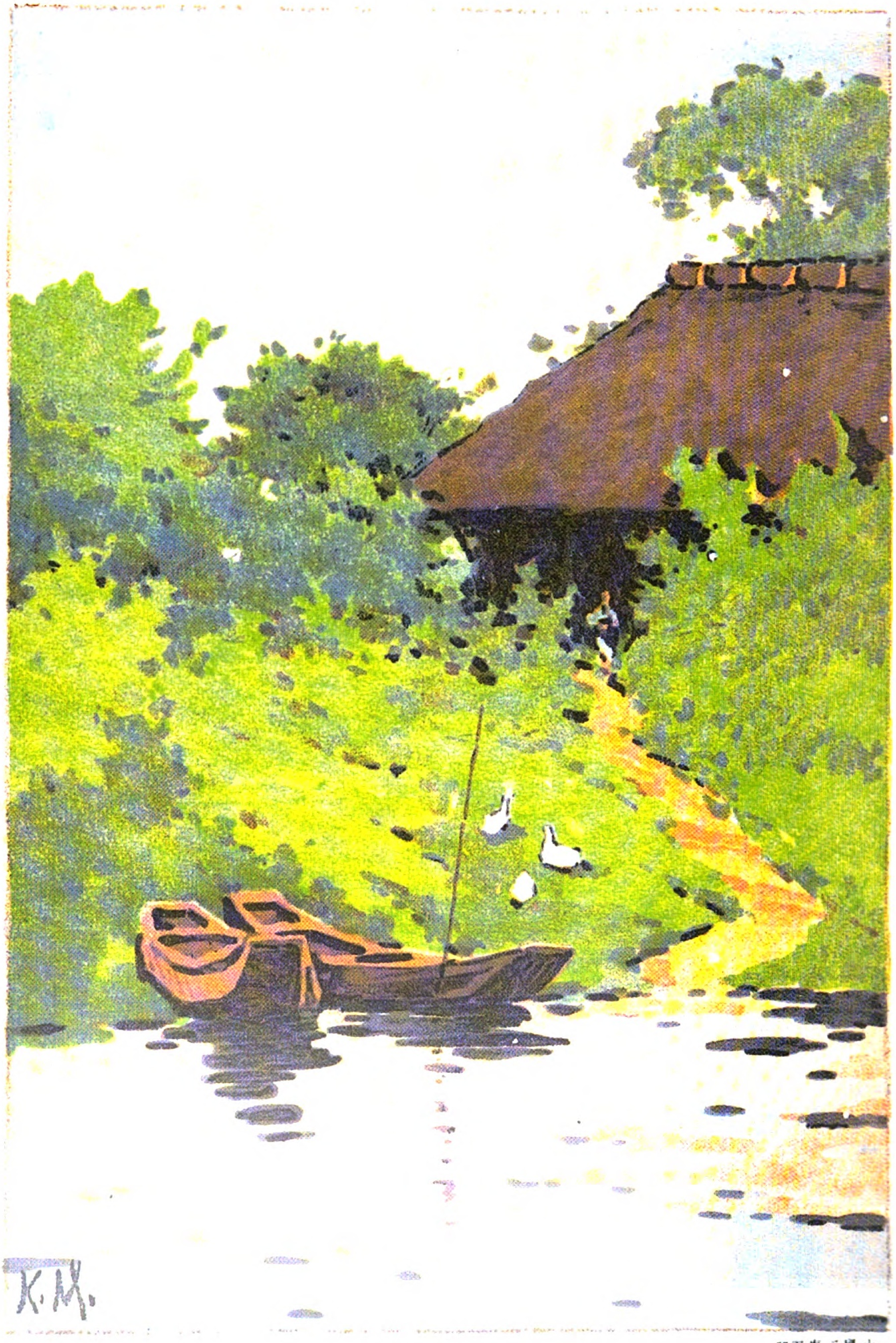
全壹冊袖珍美裝價金七錢

（送料　二冊でも三冊でも　二錢）

勅語……上等洋紙　鮮麗金刷

出版元　東京神田旅籠町壹丁目廿三番地　文光堂　賣捌 東京堂 全國外書店

水村初夏



小島工藝石印

三宅克己先生筆

大日本女學會

●本會が十年來女學の通信教授に盡せる事畏くも　皇后宮の懿聞に達し特に御歌下賜の恩命を蒙りたり●本會は伏見若宮妃殿下を名譽總裁に奉戴し鍋島侯爵夫人會長として會務を監督す●今度新學期を開き會員を募集す會則希望者は葉書又は電話にて請求あれ

●高等科（學期二個年）　月謝四拾錢束修四拾錢

○倫理（下田次郎）○禮法（佐方鎮子）○教育（安井哲子）○國文（坂正臣）○文法（岡田正美）○作文（今泉定介）○作歌（大口鯛二）○美辭學（島村抱月）○漢文（菊池晩香）○○日本歴史（大森金五郎）○萬國歴史（喜田貞吉）○名媛傳（下田歌子）○日本地理（喜田貞吉）○萬國地理（同上）○地文（脇水鐵五郎）○數學（藤野了祐）○植物（松村博士）○○動物（石川博士）○鑛物（脇水鐵五郎）○理化（同上）○生理衛生（三宅博士）○家事衛生（同上）○小兒衛生（三島博士）○家事教育（三輪田眞佐子）○家事經濟（後閑菊野子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○圖畫（武村千佐子）○美學（島村抱月）○音樂（東儀季治）○挿花（戸川正得）○點茶（松浦伯爵）○園藝（池田伴親）○法制經濟（岡戸諭介）○附録機關雜誌なてして

●簡易科（學期二個年）　月謝貳拾錢束修貳拾錢

○修身（後閑菊野子）○禮法（佐方鎮子）○國文（同上）○作文（今泉定介）○漢文（菊池晩香）○歴史（大森金五郎）○地理（喜田貞吉）○數學（藤野了祐）○博物（脇水鐵五郎）○理化（同上）○生理衛生（三宅博士）○家事綱要（後閑菊野子）○家庭教育（三輪田眞佐子）○割烹（石井泰次郎）○裁縫（渡邊辰五郎）○習字（坂正臣）○圖畫（武村千佐子）○史傳（下田歌子）○お伽譚○詞藻○質問應答○雜録○雜報

目下入會の好時機

東京市麹町區下二番町三七　**大日本女學會**　電話番町一三三〇

（中付の一）

數年難治の慢性胃病を根治し消化機能を強壯健全になす靈藥

胃病根治劑

從來世に胃病藥頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑・(即ち重曹、マグチシヤ、苦味劑の如き一時おさゑムチスカシ的皆式賣藥)のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固な**慢性胃病**にても根本より**誓つて根治**し胃腸を健全にし消化機能を強壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絕し無病强健の大幸を得られよ 輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

(藥價) 壹劑四拾貳錢 貳劑八拾錢 參劑壹圓拾錢 郵券代用貳割增し

新輸入 肉體美容 色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黑き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢 特別製分壹圓七拾錢

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房**

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり 本劑參劑分を用ゆれば二三ケ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治**惡血毒血**し多年滯りの古血及を一掃することを確證す但し本劑は其奏効極めて**峻烈顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

(注意)本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効なる**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんことを乞ふ



わきが 腋臭

根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脫せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增の事

以上貳藥 **專賣元** 東京市神田五軒町拾九番地 **日新館藥房** (電話下谷五四一六番)

女子の新讀物

鈴木秋風君著
太田三郎君畫

小説美文 朝晴

（製本出來――着金即日送本す）

全一册 本表紙金刷綴 石版彩色書四葉入 洋装美本

正價 四拾五錢 （直接申込は郵送料不要）

目次

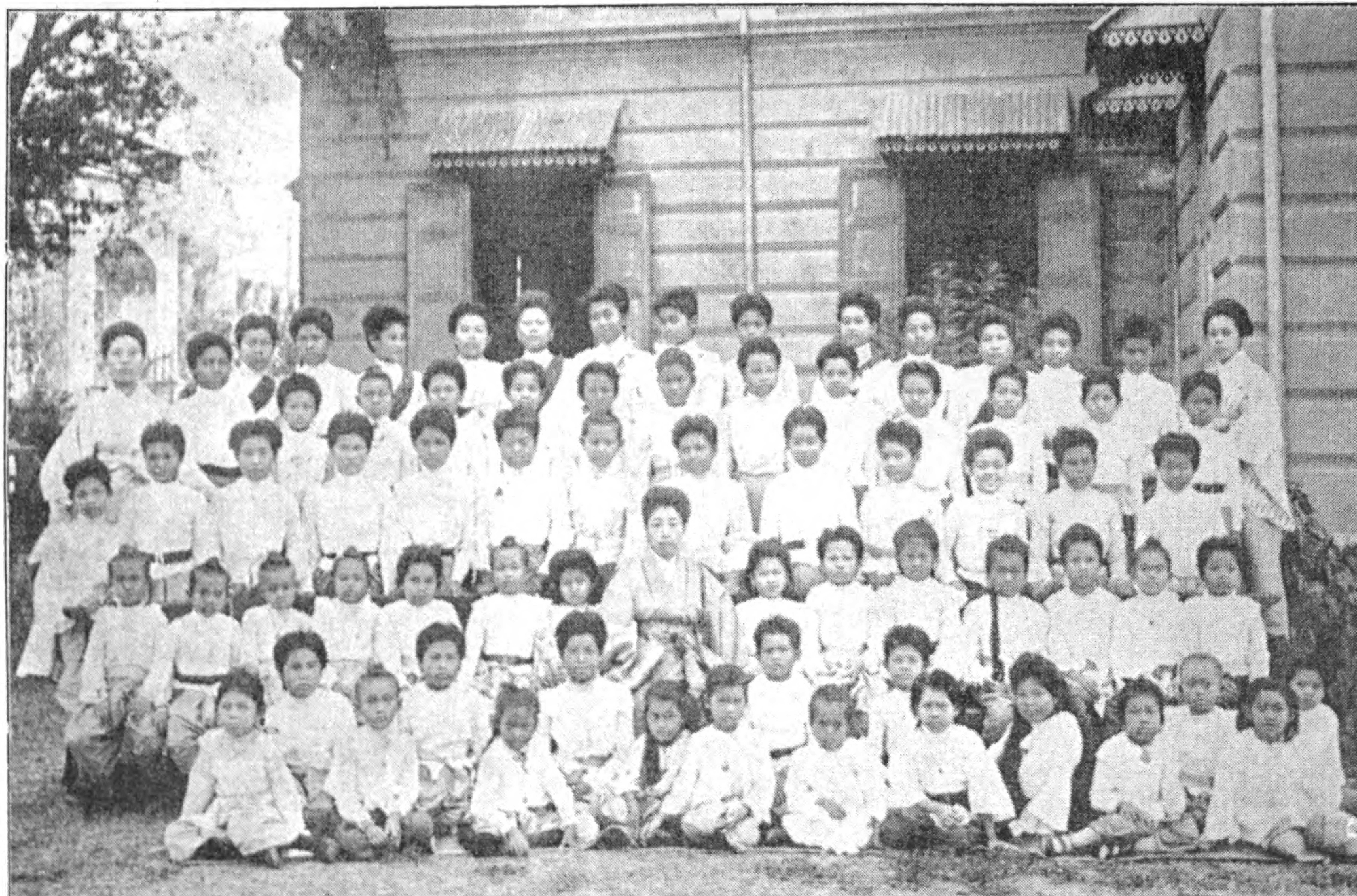
彩色挿畫

『朝晴』は年若い作家が眞面目な勞苦より得たる述作である。此清新、此温情、此穩健、此典雅、これは年若い此作家の生命である。集中、長篇小説『箒木』『遠潮』を始め、短い他の諸篇とも、多くは主人公を女性に取つて。婦人の優しさ、美しさ、もろさを解剖せむとして居る。淑子の悲みは何が爲めか、百合子の涙は何が爲めか、高潔な人情の葛藤を抽いた美しい讀みものはこれ。

發兌元 東京京橋區大鋸町十、十一 （電話本局 六〇七番） 女子文壇社

▲賣捌＝東京堂、北隆館 東海堂、上田屋、良明堂

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ



（向て中央は安井哲子君、右中島富子君、左河野清子君なり）

暹羅國バンコック府に於ける安井哲子女史とクインスクール生徒（最近撮影）



（所在　小石川區高田老松町）

日本女子大學校卒業生及職員　（明治三十九年）

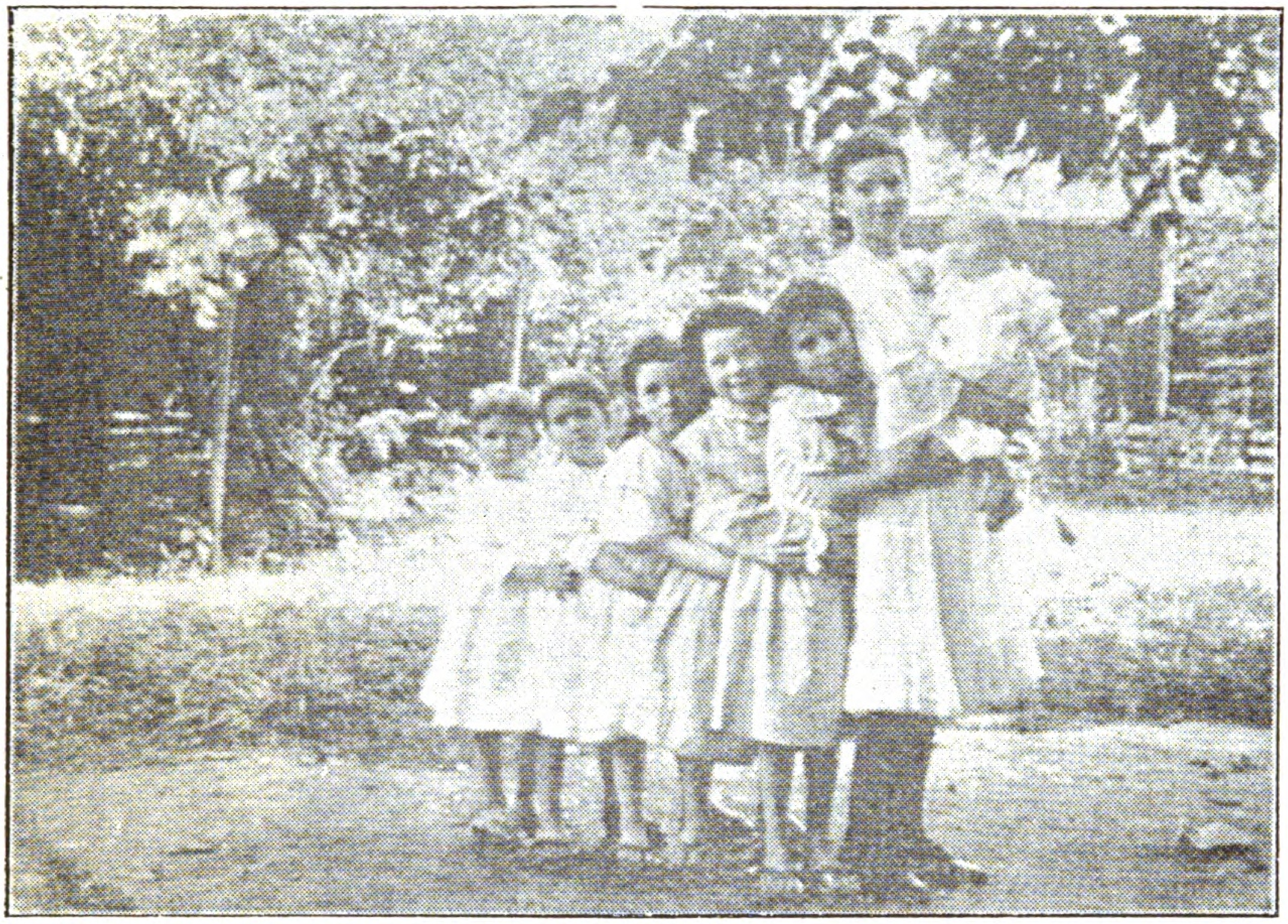


(竹柏會寄贈)

華族會館に於ける竹柏會春期(四月)大會(女子部)

(前より二列中央左の方は主幹佐々木信綱君右の方仝夫人雪子君)

無邪氣（在名古屋米國宣教師マカルヒン氏の令嬢）



（東京 小野綠子君寄贈）

活人畫（白虎隊十六勇士）



神戸高等裁縫女學校同窓會紀念會餘興（小谷辻子君寄贈）

（左より）
前列 森神はつ子、堀江たへ子、井上しづ枝、森岡いと子、江見ゆき子
中列 宮西よね子、坪田八重子、廣瀬花子、茶谷さひ子、野島よし子
後列 山村某、栗林しづ子、富井縫子、川口高子、三留節子、植田もん子

女子文壇の廣告により御注文の節は其旨御書添を乞ふ

三宅克己先生筆

水彩寫生畫帖

第壹輯（夏の富士 冬の夕暮） 正價金貳拾錢 郵稅金四錢
第貳輯（甲州川口の湖 郊外） 正價金貳拾貳錢 郵稅金四錢
第參輯（國府津附近の秋 江の島） 正價金貳拾貳錢 郵稅金四錢

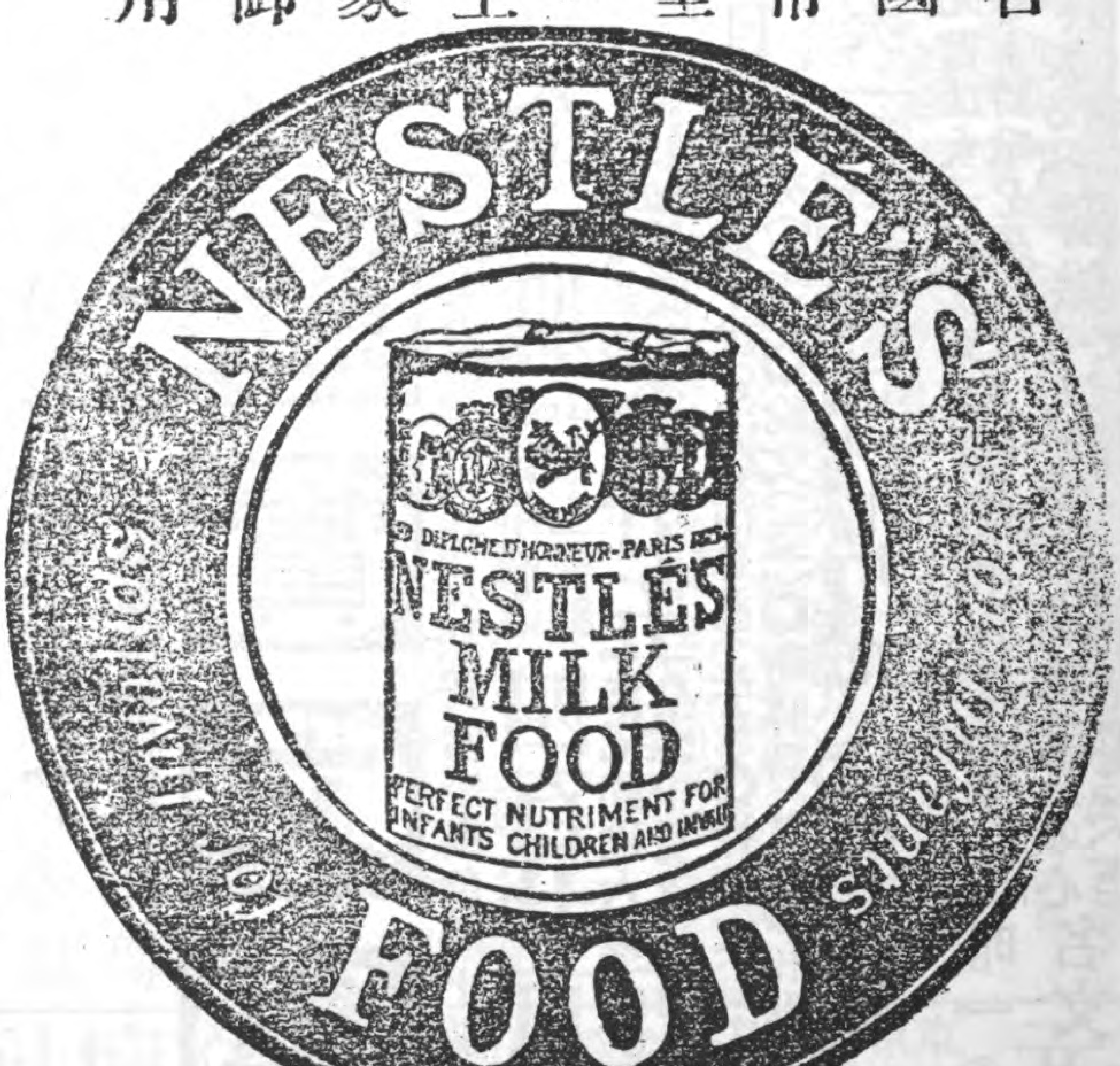
春の若潮に夢のごとく浮び出たる江の島、夏雲に裾まどはせて、芹紫に匂ふあえかなる富士の立姿、龍田姫がみけしの裾にとや、錦かざれる國府津の秋の小田、あるは雪降り止みし夕空瑠璃の如くすみ渡れる郊外のいさゝ小川なんどのうるはしき自然の姿は名たゝる先生の御筆に入りて始めて靈あるものとなりぬ。いひがたき筆の韻と、たとしへなき其の氣品とは人をしてすゞろ幽緲の境地に誘はずんば止まざらんとす。餘す所はたゞ賢明なる諸兄姉の清鑒に俟つのみ。

東京本郷區湯島切通坂町三十九
發行所 櫻井香雲堂

特約發賣所
東京神田區表神保町 東京堂
東京日本橋通三丁目 金櫻堂
東京神田錦町二丁目 勉強堂
東京本郷區本富士町 日本堂
東京淺草區三好町 大川屋
東京本郷弓町二丁目 文錦堂
東京本郷區妻戀町 便利堂
東京本郷四丁目 青年堂

各國帝室及王家御用

ネッスレス ミルクフウド



歐洲諸國及ビ本邦名醫ノ讃辭ヲ辱フセル者ナリ
小兒病者又タ平素不消化ニ苦ム者ニ適當ノ最良食物ナリ
◯最モ盛カンニ藥舖洋酒食料品店ニ販賣ス





文章の一轉機

人の談話ぶりとか、文章の書き振とか謂ふものは、さう眼前に於て際立つた變りやうをするものではありませんが、大きく世間全躰を擧げて移つて行きますから、之を五年前とか乃至は十年二十年前に比べて見ると、恐ろしく變つて來て居ます。新聞の文躰なども好い證據でせうけれど、それより諸孃の姉樣とか兄樣とか、兎に角小學校の初めの頃の敎育を受けた人に、作文の事などを聞いて御覽なさい。今日諸孃が學校で敎はる作文などゝは、大した相違があらうと思ひます。是を文藝の上に見ますと、明治の文運隆興の時期から二十七八年役迄を第一期とし、それから三十七八年の日露戰役迄を第二期として、今は第三期に移らうとして居る處です。第一期の文藝は最も江戸式の文藝が行はれ、第二期に到つて江戸式の上へ新しい西洋の分子が加はるやうになり、最も文章の絢爛を極めましたが、今や第三期に入りて、眞個の融和した明治の文章が成立たうと言ふのです。字義の詮索より言ひ表はし方に氣を附るやうになり、面倒な漢字は追々に廢滅れて、口語と文章とが接近し來り、思想の複雜は、却つて文章を率直ならしめ、迂遠い字の使ひやうなどは許されなくなりました、諸孃も能く注意して新しい文章を御覽なさい。

巷の女

美くしき哉巷の女、女は何時も斯く美くしいものでありませうか、否女ほど美くしく見えたり醜く見えたりするものはありますまい。女が多く人に愛せられるのは此美くしく見える時で、多くの人に嘲けられるのは、美くしからず見える時でせう。何時も愛せられるものと思へば間違ひてす、間違ひてなくも、何時も愛せられる者のやうに思ふて居ると、間違ひが起ります。愛せられるに附上ると、必ず愛を失ふ時が來ます、變らず持ちたいのは精神の美くしさて、是ばかりは醜く見える時はありません。

所謂良妻賢母

妻としては善良なれ、母としては賢婦人なれとは當然の事で、良妻賢母の字義に異論はないのてすが、良妻賢母論とか主義とかになると、人て見る所を異にし、大分やかましい説も起るやうてす。畢竟は女子の人格にあるので、是を高めると云ふ事は差當り心得るべき事と思ひます人格を高くすると云ふのは威張ることてはありません、つゝましやかであつて、常識のある婦人になれば宜しいのてす。

男女交際論

此問題も未だ論だけて實行の時期には入つて居りません、目下は寧ろ男女非交際の時て、別に際立つて男女交際と云ふ事が行はれて居らず、男女別ありの方が事實に於て表はれて居る處てすが、此れも論題に止まらず、今に實行の時期が來るてせう、如何にして交際すべきかは大問題てすから、先輩の意見を未だ〳〵聽く必要があらうと思ひますし、又各自に思考るべき事でせう。

誤れり

△紀念繪葉書は紀念として保存して置いてこそ、價値はあるのてす、直ぐ高い値に賣買するのは間違うて居ます△女學生は決して墮落しませぬ、袴を穿き書籍包を持つて歩く女學生を粧ふ者が墮落して居るのてす女學生の墮落と一概に言ふのは誤りてす△自分の名を人に知らせたい爲に投書するのは間違ひてす、自分の作物を人に見て貰う爲に投書するのてす△他の作物を盗んで投書する人は人間の道を踏外して居るのてす△年齢を取るのを心配して爲たい學問を勉めないのは間違ひてす志摩の人蝶子は五十七才て女學校に通うて居ります。

譬喩法（二）

文學士　吉岡向陽

暗喩とは直喩のやうに「如し」「似たり」「同じ」又は「譬へば」「あたかも」といふやうな言葉を入れず、譬喩を言葉の中に隠していふのである。例へば「楚人は沐猴にして冠する耳」（史記）の類で、普通ならば楚人は心人に類せず、恰も沐猴の冠せるが如し」などゝいふべきのを、比較する二物を打混じて、かう言つてしまふのである。即ち暗喩は直喩を引約めていつた形である。尚ほ次の例を見よ。

イ、李義甫は容貌溫恭人と語れば必ず嬉怡として微笑す。而も狡險忌克なり。時の人義甫を笑中刀有りといふ。（事類全書）

ロ、山路もとより雨多くして、空翠つねに衣を濕ほす。見上ぐれば萬仭の青壁刀に削り、見下せば千丈の碧潭藍に染めり。（太平記）

ハ、刀すらりと金藤治、勝負は見えた觀念と、閃めくいなづま姉妹、首は前にと落ちにける。（玉藻前旭袂）

ニ、白露に風の吹きしく秋の野は貫きとめぬ玉ぞ散りける。（康秀）

ホ、頭から蒲團かぶればなまこかな。（蕪村）

ヘ、瓜ざねを見せて南瓜ととりかへる。

暗喩は文の勢力を増し、興味を與へる點において、はるかに直喩に優つて居る。此事に就いては諸家皆一致して居るけれども、其理由に就いては古來いろ／＼な説があつて、或は暗喩が極めて經濟的であるためであるといひ、或は物事の類似した點を他人から指し示されるよりも、自分で之を發見して滿足するのが人心の自然であるからであるといつて居る。自分は後の方の説が當つて居るやうに考へる。俳句川柳のやうな短

い形式のものが却つて和歌狂歌のやうなものよりも興味を與へる點が多いといふのも、つまりこの心の活動を要するためなのである。

暗喩は直喩を引約めたものであるから、直喩の章下に述べた六箇條の注意は此暗喩にも應用される、併し此外にも注意しなければならぬことがある。

一、暗喩は極めて明瞭でなければならぬ。前にもいふ通り、暗喩は心の活動を要するために、勢力を増し、興味を與へるのであるけれども、其活動は極めて容易でなければならぬ。さうでなければ注意がこれに停滯して他を忘れる處がある。それで暗喩にしては解し難いであらうと思はれる場合にはいつそ直喩を用ひたがよい。

二、一句一節の中に或暗喩を用ひて、忽ち實義を用ひ、又は他の暗喩を用ひるやうなことがあつてはならぬ。例へば「眞淵は、國學の祖にして。定信の子なり」などゝいひ、「革新の潮流は大手を振りつゝ寄せ來れり」などゝいつてはならぬ類である。次の例を味へ。

イ、さう云はしては置けません。いくらお前はお前でも、親は親ですよ。フン、お前たちのやうな當世娘はほんとにブリッキのお辨當箱だよ。學校磨れに磨れて居て、さうして惡く四角に出たがる！。だが根が薄つぺらだ。おつかさんが今叩き潰してあげるよ。まあ下にすわつて私のいふことをお聞き！。（露伴、其俤今様八犬傳）

ロ、煩惱の犬は打てども門を去らず。（竹齋物語）

ハ、馬鹿を釣る餌に蚯蚓をのたくらせ。

三、暗喩は煩瑣に過ぎてはならぬ。瑣末な點までにもこれを用ひようとするときには、文意が繁雜になり、理の透らぬことになるものである。

直喩と暗喩とは時としてこれを混合することがある。さうして同じ混合するにも、先づ直喩を用ゐて類似した點を明かに示しておいて、暗喩を續けるものもあり、この順序をさかさまにしたのもある。いづれの場合にも文の明亮を加へ、勢力を増すことが多い。

イ、其主人と住所と無常を爭ひ去るさま言はゞ朝顏の露に異ならず。或は露落ちて花殘れり。殘るといへども朝日にかれぬ。或は花凋みて露なほ消えず、消えずといへども、夕を待つことなし。(方丈記)

ロ、總體貴樣のやうな内にばかり居る者を井戸の鮒ぢやといふ譬がござる。聞いて置かしやれ。彼の鮒めが僅か三尺か四尺の井の内を天にも地にも無いやうに思うて、不斷外を見ることが無い。ところにあの井戸がへに釣瓶に附いて上ります。夫を川へ放してやると、何が内にばかり居る奴ぢやによつて、喜んで途を失ひ、橋杭で鼻をうつて即座にひり〳〵〳〵と死にます。貴樣も鮒とおなじこと。ハヽ〳〵。(假名手本忠臣藏)

ハ、しやくつて引けば保昌は振り放さんと振り引く。止まれ〳〵のうなり聲。叶はじものと怒る聲。磯の松風、岩打つ波。兩頭の大蛇が丈山の腰きり〳〵と卷きしめて、頭を並べ引き合ふも是にはいかで違ふべき。(傾城酒呑童子)

暗喩の一種に活喩といふのがある。又擬人法ともいふ。活喩又は擬人法とは無生物を生物として取扱ひ、又は或生物を他の高等な生物として取扱ふのをいふのである。例へば「歲月人を待たず」「老鶯春の逝くを悲しむ」などといふのは「過客の人を待たざるが如く歲月も猶豫なく經過す」「老鶯春の逝くを悲むが如く鳴けり」などゝいふのを引き約めたので、共に暗喩であるけれども、歲月といふ抽象的事物を生物として取扱ひ、老鶯に人の性質を附與した點に於て別に活喩と名づけて區別するのである。

活喩は感情の激昂して殆ど理性を失ふに到つたやうな場合に、知らず識らず用ひるのがもとで、子供が石に躓いてたふれたとき、石が故意に自分をたふしたかのやうに、叱つたり、蹴つたりするのが、すなはちそれてある。それて冷やかに考へて見れば、餘程幼稚て笑ふべきものゝやうに見えるけれども、巧みにつかひ

こなすときには、人の嗜好を樂しませ、感情を高度に高める効のあるものである。次の例を見よ。

イ、芙渠は花の中の王ともいふべくや。おのづから具はれる位高く、德秀でたり。（露伴、百花譜）

ロ、崖はそも／＼波といふものゝ世を打ちはじめた昔から、がつきと鐵の楯を支いて、幾億尋とも限り知られぬ潮の陣を防ぎ留めて、崩れかゝる雪の如く鎬をけづるたのもしさ。砂山に生へ交る茅芒はやがて散り、はた年ごとに枯れ果てゝも、千代萬代の末かけて、巖は松の綠にして、霜にも色はかへないのである。（鏡花、海異記）

ハ、聲絕えず鳴けや鶯、ひとゝせに再びとだに來べき春かは。（おき風）

ニ、手をついて歌申し上ぐる蛙かな。（宗鑑）

ホ、山を通ればいばらがとめる。いばら離しやれ日が暮れる。

へ、見かへれば意見か、柳顏を打ち。

活喩を用ひるには、次の二つに注意しなければならぬ。

一、活喩は前にも云ふが如く、感情の激昂したときに生ずるのであるから、其場合によつて用ひなければならぬ。之に反くときには、文章は却つて巧緻に過ぎることになる。殊に抽象的の物事を活喩することは初學者には甚だ危險であるから、之を用ひることを愼しむがよい。

二、活喩はなるべく簡單ながよい、餘りに長くなると、人をして厭惡の念を起させるものである。

右の外舌切雀、猿蟹合戰のやうに、或意味を表はすために、他の事物の態貌を假りていふもの（風喩）、「人間萬事塞翁の馬（人の禍福の變轉して定まらぬにいふ）」、「千羊の皮も一狐腋に如かず（衆愚は一賢に如かぬにいふ）」などのやうに、意味を深長に表はすもの（警語）なども譬喩の一種といへばいへるのであるけれども、さまではと思はれるからして、一先づこれて筆を擱くことにする。

（完）

篦投棄てゝ

横瀬夜雨

故ありて去られたる妹の、子らが像をつくりかけたるを見て

剃す習ひの産毛だに
惜みし子等がいたいけの
型を彫ると篦執りて
半成りたる像に
對へば落る涙かな

（立てしばかりの眉毛こそ
今は薄らに延びにけめ
七つに少き中の子の
妙子は色の白くして
猛き父には肖ざるもの

綾江は數て九つの
今年の春は髪も結ひ
帶も自と結ぶらむ

敎へし母は人故に
馬立の里に逐れて

毛嫌する末の子の
乳母の乳房に親むまで
遣じとせしも擇られては
朱房くけたる長枕
一人寢るに廣うして）

髪の端だに似るやとて
削れば落つる土屑の
膝に亂れて似もせぬに
手を過ちて眼を突けば
うらみや瞳傷きぬ

たとひ吾子の顏は
物にうつして置かずとも
胸の奥に記して
千代も忘れじなまじひに
見れば泣くべき像なり

篩投げすてゝ圓窓に
頬杖つけばそゝけ髮
野に緑なる草を見る
「都は西に八重櫻
吾子も花となりぬらむ」

たまたま人の憫みて
母はと問へば死たりと
對へて足をかへすと聞く
眞か、母は一人居て
死にもせぬものはらからよ

國文評釋

文學士　中内蝶二

土佐日記（三）

○

十六日、けふの夕つかた京へのぼるついでに見れば、

山崎のたなゝる、小櫃の繪も、まがりのほらのかたも、かはらざりけり。賣る人の心をぞ知らぬとぞ云ふなる。かくて、京へいくに、島坂にて、人あるじしたり。かならずしもあるまじきわざなり。たちて行きし時より、くる時ぞ、人はとかくありける。これにも、それにも、かへりごとす。

（釋義）　夕つかた云々　日の暮方に京へ向つて上りたりとなり○山崎のたなゝる云々　たなとは店の義、小櫃とは櫻、藤の繪など書きたる小さき櫃、まがりとは、糫餅の略稱にて、麥、米などの粉に、飴を加へて作りたる餅菓子、其大意は、山崎と云ふ里の家々、其店に在る小櫃の繪も、まがりと云ふ餅菓子の法螺貝の形したるも、昔のまゝに變らねどとなり○賣る人の心ぞ知らぬ　それを賣る人の心は、如何に變れるか、計り知られずとなり○京へいくに　京へ行くにと云ふに同じ○島坂　山城國乙訓郡、石塔寺の南に在り、京へは最早近づきたり○人あるじしたり　迎へに出てたる人が饗應をしたる

となり○かならずしも云々　さしたる縁故もなき人々なれば、かく饗應などせずとも、よかるべき人なりとなり○たちて行きし時より云々　都を出立して行く時よりも、斯く歸り來る時が、人々は、自分の利を思ひて、とや角と諂ひ迎ふるものなるとの義○これにもそれにも　饗應を受けたる人々へ對し、此人にも、彼の人にも、それ〲返禮をしたりとなり。

（評論）山崎の里は、最早都へ近ければ、自然都の事も胸に浮ぶを、先づ打ち見たる店の小櫃、糫餅などを引合いに、暗に京人の心の輕薄にして變り易きを示し置き、さて島坂に至り、迎ひの人々の縁故深からざるものまでが、樣々と饗應して媚び諂ふさまを、明らさまに罵倒す。用意周到なりと云ふべし。『賣る人の心をぞ知らぬ』『かならずもあるまじきわざなり』『くる時ぞ人はとかくありける』一語は一語より痛快に、寸鐵人を刺すとは即ち是れ。

夜になして、京には入らんと思へば、いそぎしもせぬほどに、月いでぬ。桂川の月のあかきにぞ、わたる人人のいはく、この川飛鳥川にあらねば、淵瀬さらにかはらざりけり、と云ひて、ある人のよめる歌、

　ひさかたの月におひたる桂川
　　そこなる影もかはらざりけり

また、ある人のいへる、

　あま雲のはるかなりつる桂川
　　袖をひてゝもわたりぬるかな

また、ある人のよめる、

　かつら川わが心にもかよはねど
　　おなじ深さに流るべらなり

京の嬉しきあまりに、歌もあまりぞ多かる。夜ふけて來れば、ところ〲も見えず。京に入りたちてうれし。

（釋義）夜になして云々　夜に入りて京へ入らんと思へる故、わざと緩々として、急ぎもせざるほどに、やがて夜となりて、十六夜の月出でたりとなり○桂川の月の云々　桂川に映る月の、昔のまゝに淸きが故にとなり○この川飛鳥川にあらねば云々

大和國の飛鳥川は、水淺くして淵瀨定まりなく、淵となるかと思へば、また瀨となり、瀨となるかと思へば、また淵となる、變り易き川なれど、此桂川は、飛鳥川とは違ふ故に、淵瀨は昔の儘に、少しも變らずとなり○ひさかたの月に云々　ひさかたとは、月と云はんが爲の枕辭、おひたるは生へたると云ふ義と、名に負ひたると云ふ義と、二つに懸れり。即ち此歌の大意は、久方の月の中に生へて居ると云ふ桂の川は、名に負ひたる川なれば、空の月と同じく、底に映る影も變らずに見ゆとなり○あま雲の云々　あま雲のとは、はるかと云はんが爲の枕辭、ひでとは、ひぢてと云ふに同じく、浸して、即ち濡らしての義。此歌の大意は、天を飛ぶ雲の如くに、土佐國よりは遙かに隔りし此桂川を、今日は、袖を濡らすまでに近づきて、渡る事を得る嬉しさよとなり○かつら川わが心にも云々　此歌の大意は、桂川の心が、わが心に通じて居ると云ふにはあらねど、わが今京へ歸る喜びの深さと、同じ深さに流るゝさまなりとなり○京の嬉しき云々　京に着きたる嬉しさの餘りに、歌の數も、かく澤山に出來たりとなり○夜ふけて云々　夜が更け行きたれば、所々の樣子も見えずとなり○京に入りたちて云々　京に入りたる事が、實に嬉しとなり。

（評論）夜になしての一句、よく輕薄なる人々の、仰々しき出迎へを厭ふ樣を寫せり。土佐の國を出づる時は、山海萬里を隔てけんやうに、いと遙けくも思ひつる桂川を、幸ひに今日事なく渡りて、懷かしき京に入る事とはなりぬ。貫之が胸中の喜悅はいかばかりぞや。『京にいりたちてうれし』の一句、さながら無邪氣なる小兒の如し

（つゞく）

畫家の細君（上）

かつみ

今月は水繪の友（名家訪問）を掲げる筈であつた處、一寸息繼に休ませて頂きたいから、其代りに畫家の細君と云のを載せ

ました。これは某畫家の談話を聞た儘、諸嬢に受賣を致すので、詰り私が一本の細い怪しき電話線となつたに過ぎない譯であります。

妾がこの家に參りまして今年で恰度九年になりますが、早いもので何時の間にか三人のお母さんになつて了ひました。今では唯もう朝から晩まで小供等の世話と、臺所の差圖とに世話敷日を送つて居る、普通の世話女房になつて了ひましたが。これでも九年前の事を考へますと、理想とか希望とか申すものもありまして、夫れはなか〳〵美しき夢を見て居つたもので御座いました。

然しね、世の中の事は皆理想と實際とは全く違ふものでして、如何程高い理想があらうが、段々と實際に引籠られて、もう貴方終には我知らず降參致して了ふのて御座いますよ。今日は恰度二人の小供は近所へ遊びに參つて居りませんし、幼いのは奥に寢付いて居りますから、妾が結婚の當時から今日迄の概畧を、搔摘むて御話致しませしやう。マー貴方、御笑に爲つては厭ですよ。

さうですね、妾が結婚爲たのは恰度十九の秋でした。未だ妾は學校を出たばかり、世の中の物事が何んでも美しく畫か詩の樣に見えたのです。夫れで妾は幼い時から奈何云ふものか繪が大變に好きで、一時は兩親に迫つて美術家と爲つて天下に名を殘さうなど〻、マー貴方そんな野心を持つたこともありました。然し未だ日本では中々女子の身で獨立爲て美術家が徹せるものでもありませんから、夫れてはせめて美術家に嫁したいと云ふ希望を持ちました。ですから未だ學校に居りますうちから、色々と美術家の生活の摸樣などを想像致しまして、他日は屹度美術家の妻に爲り、夫を助けながら自分も共に藝術の樂しい園に遊ばうなど〻、夫れは氣も心も飛ばむ許りに嬉しく思ふて居つたので御座いました。

ですから學校の歸途など、汚れた衣服を着た穢い畫の書生が、油彩具の箱や三脚椅子などを持つて淋しさうに通る姿を見掛けますと、彼が未來の自分の夫と迄は行かなくても、屹度吾夫の友達の一人であらうなど〻、

如何程懐敷思つたか知れは致しませんは。先其時心中に描いた理想を一寸御話致せば恁うなのです。住む家は全く俗氣を離れた何所か淋しい茅葺の田舎家か何にかで、自分の家には世人の珍重する價貴き道具とか立派な着物は何も無いのですがね、部屋中は夫の畫懸のカムバス(畫布)とか、繪具に汚れた書架であるとか、又は油の染みた古い洋服や外套とか、マー一々世の俗人の家庭とは違いますねえ。其所で妾はその理想的美術家の家庭の裡で、晝は暇があれば夫と共に畫も描き美術も話し、又夜に這入つては音樂でも學むで、晝疲れた夫の身心を慰藉するとか、先づ總てがこんな風に理想的美術家の家庭を是非造りたいと、色々に氣を揉みました。時には昔の大家名匠の傳記にも能くある樣にてすね。それは生活と闘ふ場合もありましやう。然しそこは未來の成功を信じて、夫妻共々にその艱苦缺乏に忍び合ふのですね。する内に愈々其日々々の糊口にも窮して、明日は如何うならうと云ふその一刹那に夫が多年苦心經營した傑作が世に出て、一時に、夫の名聲が揚り、妻たる自分の功蹟迄が世間に顯れると云ふ譯なのでしやう。勿論夫れも多年艱苦の末のことですから、その時夫妻の歡喜は譬へ樣も無い程でありましやう。兎に角斯樣な生涯は、美術家でなければ迚も經驗することは出來やしないなど丶思ふて居ました。妾は嘘言では御座いませむ、其時代は本統に這麼な空想に耽つて居つたので御座います。ですから自分の友達などがヤレ學士の許に嫁すとか、又は金滿家へ輿入するとか申しまして、自慢半分吹聽致すのを耳に致しましても、其人の考の低いのを寧ろ憐れに存じたので御座いました。さうして妾の當時の理想は、特別美術家の妻とも言はれる者は、普通の人々とは違ひまして、唯衣食の世話や小供の養育の事を專務とする、體の好い下女か乳母の樣なもので滿足爲て居つては、決してならぬと存じて居つたので御座います。

奈何しても精神的に夫を慰め夫が藝術の上に顯れる作物の上にも直接間接に助力を注がねばならぬと、先づ這麼な考を持て居りました。て妾は兩親からも勸めら

れ又他の親戚からも色々意見されて、嫁に行くなら何んでも生活に困らぬ又社會に相當の位置ある人、或は是等の希望のある人に行く樣にと、懇々と説諭されたので御座いました。然し妾は前申々上た通りの考でありましたから、中々その樣な忠告などは耳に這入は致しませむて、前にも御話した自分の希望と考を、夫れ夫れ話したので御座いました。すると妾の考も幾分か解つたと見えまして、夫れなれば先づ當人の望もあることゝ終に自分の希望通り美術家に參ることになりました。今から考へると可笑樣ですが、その許を得た時の喜悦は、實に夢に夢見る心地が致しました。夫れから恰度今の夫と縁があつて一緒にもなり、最初の目的通り美術家のマー妻すホヽヽ、先づそんな譯に爲つたので御座います。然しね此處迄は美しき理想の夢を辿つて參りましたが、偖て實際に這入つて見ますと、夫れは中々美術家の家庭などゝ申すものは、春の夜の夢の樣なものでは御座いません。

貴方參つてから未だ半歳經つか經たぬに、苦き實際の經驗は、夫迄の希望も理想も皆崩して了ひました。未だ夫れから先きを御聞かせ申したいので御座いますから、貴方別に御用が無ければ御迷惑でも御聞き遊して頂戴な。

愛讀諸孃に望む

小森松風

現今の女子教育界を通觀するに、四五年前に比して、文學に技藝に長足の進歩をいたしました。殊に日露の和局以來、頓に女子文學の隆興を見るに至つたのは、明治文學界のため、實に喜ばしき現象であると思ひます。此時に際して「女子文壇」の愛讀諸孃に望ましきは、かつて征露當時の如く、今尚ほ堅忍不拔の志を保たれ、以て層、一層明治文學界の爲めに奮勉せられたい事であります。

夫れ上下殆んど千有餘年を通じ、今なほ日本文學史上に燦然として其光輝を失はぬ二大美玉は、抑も何でありませう。我國女流文學の發達は、實に此二大美玉の

光波によつて今日に及んだのではありませんか。かの平安朝に於て、春の花の優艶なる、秋の月の清麗なる、それにも優りし、絶妙絶美の文字ある事は、既に諸孃の知らるゝ所でありませう。

諸孃よ、彼の平安朝時代に於ける文學の花は如何に？而して當時代の文學を代表せる源氏物語の名文は如何に？。はた枕草紙の筆鋒は如何に？、これを是れ平安朝の二大文學と云ひ、之れを我國女流文學の花壇と云ひ、これを大日本文學の清華と云ふを憚らぬてはありませんか!!!。當時源語、枕の著者たる紫清二才女の前には、男子また顏色なく、實に此美玉の光に對しては、すべての文學者が爲めに目も眩きばかりてありました。而して此美玉たるや、一は黄金の如く、一は白銀の如く、一は山吹の如く、一は白菊の如く、我國文學史上、千歳不朽の至寶として、世人に愛讀せられて居るのであります。思ふに明治の日本文學が、優に泰西文學と對峙して、一歩も讓らないのは、全くこの二大美玉の光があるからであります。實に源氏と枕とは、各其特色を放ちて、姉たり難く、妹たり難く、萬古の傑作、絶代の名文であると信じます。而して此二才女の生れた時代は如何と云ふに、文化未だ開けず、風俗頽敗して、文人墨客は空しく安逸に耽り、淫靡云ふに忍びざる時勢でありました。此間に於て大著述を出せる紫式部、清少納言の功は、實に賞してなほ餘りありと云はねばなりませぬ。

これに引かへて、明治の聖代に生れ逢ひたる諸孃よ。今や山間僻地と雖も、讀書の聲を聞かざる所なく、文學美術の進歩も亦平安時代の比にあらず、習學の便悉く備はり、繙讀の書物を求むるに容易なる事は、今更云ふ迄もありません。故に勉めて怠らずんば、紫清二女を凌駕すべきこと、亦決して難くはなからふと思ひます。

文想湧出する妙齡の諸孃よ!!!、彼の二才女よりも一層大なる異彩を放ち給はん事、吾人の切望して止まないところであります。

食後夜話集（二）

矢田挿雲

三、神の力と王樣の力

亞留布烈士大王から百年餘り後の王樣に加奴士と申す

人が有りました、加奴土は丁抹人でしたが其頃の丁抹人は以前の樣に殘忍な性質は消えて大分文明に赴いて居りました、加奴土王も仲々賢い王樣でしたから其の家來達は我劣らじと加奴土王の事を褒め讃しました、

「王樣よ、貴方は是迄世界中に在つた事の無い程偉いお方です」

と一人が云ひますと、他の一人は

「オー王樣よ、貴方の如く大權力を持つて居る者は一人も御座いません」

と申します、スルト又他の一人は

「加奴土大王よ、全世界に於て王樣の命令に服從せぬものも有りますまい」

と申します、王樣はモウ斯んな馬鹿げた囈語を聞くのも厭に成りました。

或る日、王樣は是等の馬鹿者と共に磯邊に居られました、馬鹿者等は相も變らずペチャ〱と饒舌て王樣に諂諛を申して居ます、王樣は是等の馬鹿者を一つ諷誨て遣らうと思はれまして態と波打ち際の處へ自分の椅子を出させて、

「全世界に於て余は最も偉人なるべきか」

と尋ねられますと、家來共は負けずと

「王樣よ、貴方の如く權力ある者一人だに候はず」

とお答を致しました、王樣は又

「凡ての物、我が命令に服すべきか」

と尋ねられますと

「大王の命にまつろはぬ者などで此の世に在り得ん、全世界は大王の御前に額づきて只大王の光榮を稱へ奉れり」

「海も亦我に從ふべきか」

斯く申されて加奴土王は脚下の浪が砂を舐める樣に打寄するのを御覽に成りました。流石の馬鹿者等も此の問には困りましたがソコが馬鹿者ですから「否」とお答する勇氣が御座いません、

「命じ玉へ我が君よ、然らば海も從はん」

と一人が云ひました。

王樣は片手に劒の欛を握り片手を擧げて海に向ひ

「余は命ず、海よ、是より此方に來る勿れ、浪よ、其歩みを止めよ、我が足に觸るゝ事勿れ」

と命じましたけれど潮は常の如くドン〱滿ちて參り浪は夫に連れて段々高く打つて參ります、王樣の足のみか椅子も着物も濡れて終ひました、家來達は王樣が若しや狂人に成られたのでは有まいかと思ふて驚き怪

しむ許りです。其の時、加奴土王は王冠を取て砂地に抛ち「余は再び是を着けざるべし、人々よ今見る所に依りて一つの教訓を學びたるならん、茲に唯一人の萬能の王者こそあれ、彼は海を支配し掌の上に大洋を保持せり、眞に賞讃すべきは此の王なるぞ」と申されました、此の唯一人の王樣と申すのは神樣の事を指されたので有ります。

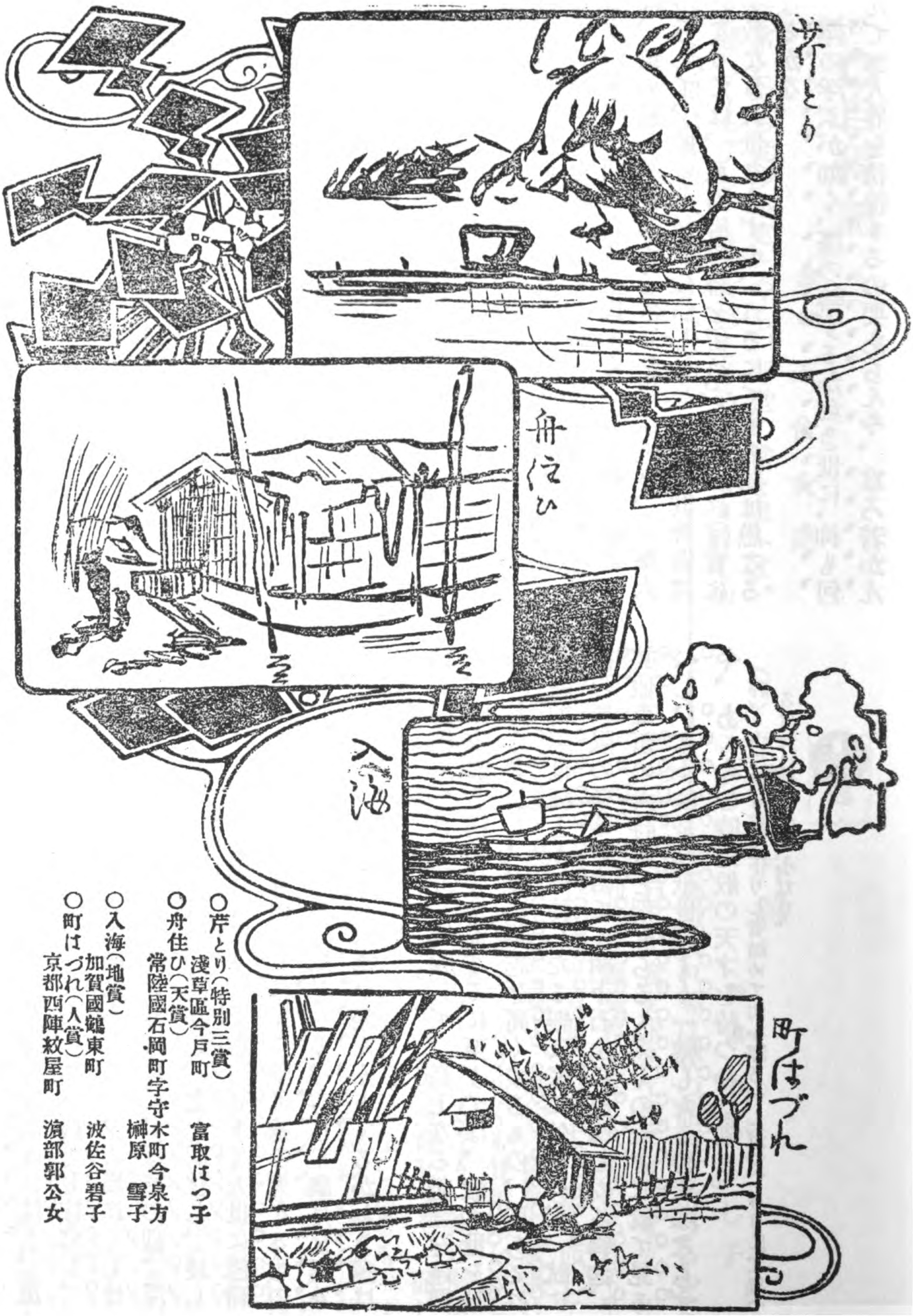
女の名

小紘生

女の名に花子とか、綾子とか子の字をつける事は、明治年間では下田歌子、鳩山春子などが元祖の方であらう。明治以前にも子の字を好んで附けた事があると見え、徳川時代の國學者、藤井高尙の『松の落葉』に斯う云ふ事がある「女の名、歌よむ人は、なに子と云ふをみやびたりと心得て、たれもくなに子くれ子とぞ云ふなる。古にこそ左樣の名は見ゆれ、今の世のなべてのふりにあらねば、わろきこと、なに彥くれ麻呂の如し。しかのみならず、大同弘仁の頃よりは、皇后、内親王、女王の御名、なに子くれ子と云ふに定まれるやうになりぬれば、下ざまの人は心して然る名はつくまじき事ぞかし。さて賤しき女は昔は、なに女と云へる多し、但し此頃のに同じきもあり、思ひ出づるまゝに一つ二つ言はん。續日本紀に八重、古今和歌集にまち、後撰集にそて、大和物語にむつ、などなり。斯く古に例あれば、斯樣の名つくとて、何のさとびたることかあらん」と憤慨して居る、併し天下の大勢は如何ともする能はず、昨今女の名は、なに子くれ子でなければ通らないやうになつた、例へば男の何彥某雄と云ふやうに、皆子の字を附ける、最も是は右の藤井高尙の説の如く、高貴の御名を慕ひまつる餘りに附けるやうになつたのかも知れない。今の廂髪と云ものも、元來は貴族式の髮を眞似たもので、是等は凡て女が自ら尊敬せらるべき事を覺知して來た證左とも見られる。自重心、畢竟從來あまり女が隨從しすぎた反動を表はしたものか知れない、なに子くれ子と附けて差支ないと思ふ。



古洞先生選　懸賞圖畫　（其六）



○芹とり（特別三賞）　淺草區今戸町　富取はつ子
○舟住ひ（天賞）　常陸國石岡町字守木町今泉方　榊原雪子
○入海（地賞）　加賀國鶴東町　波佐谷碧子
○町はづれ（人賞）　京都西陣紋屋町　濱部郭公女

文學士 沼波瓊音先生選

論文

地

○偶感

彥根四九 藤田福子

色は匂へど散りぬるものを、我世何處にか常あらんや、天は永遠に蒼々の姿を示し、地は無窮に漠々の形を現はせども、絶えせぬ變化は歇々の中に勢力を振うて、あらゆる變遷活動は刻一刻だに休まず、げにや世は淀みに浮ぶうたかたの寄るべなき一瞬の夢にして、花を賞づるも一時、月を稱ふるも一時、彼の位人臣を極め地は日本の大半を領したる平氏すら、春の夜の夢の醒めては、壇の浦の落武者たらざるを得ざりき、一擧六國を併呑して、威は八紘に振ひし始皇さへ、其身黄泉の客となりては、又阿房の跡を留めず、觀ずれば實にこれ果敢なき人世ならずや、さるにても人間は愚なる肉塊なるかな。

あゝ、萍の浮ぶが如く、蓬の轉ずるが如き世に、抑も何を苦んでか人界を彷徨するの要あらんや、寧ろ若かんや、飄乎として絶美の仙境に草庵を結ばんにはと、風月を友として煙霞を餐し、泉石に飲み白雲を往來し、麋鹿と悠遊し、曉の雨にゆあみして、夕の風にくしけづり、天地の間、幽邃の美を審にして、寂寞の裡、深玄の道を窮め、遂に自然と冥合し、之と同化し、發しては詩賦となり哲理となり、千載に亘りて人世に慰藉と教訓とを與ふるもの、これ實に厭世家の大なるものなり、彼の徒に厭世家を氣どりて、空しく歳月を冥々の中に過し、或は自ら天壽を絶たんとするが如き輩は大に鑑みざるべからず。

抑も、厭ふべき人界を蟬脫して、高上なる哲理を達觀し、幽玄なる清境に逍遙するに至りては、敢て世を厭ふにあらずして、方に其志を高くするもの、即ちこれ悲觀的厭世狂より一轉したる樂天家に外ならず、試に彼の無限の榮華を捨てゝ樹下石上に座禪したる釋迦其他東西の大詩人と稱せらるゝ多くの天才に就て見るべし、多くは是れ厭世極より一轉したる樂天家ならずや、あゝ今の時這般の天才を待つや切なり。

（評）山に登り更に下りし者始めて山を語るべし登つたきりにて果つろは大に似て却て小なり。

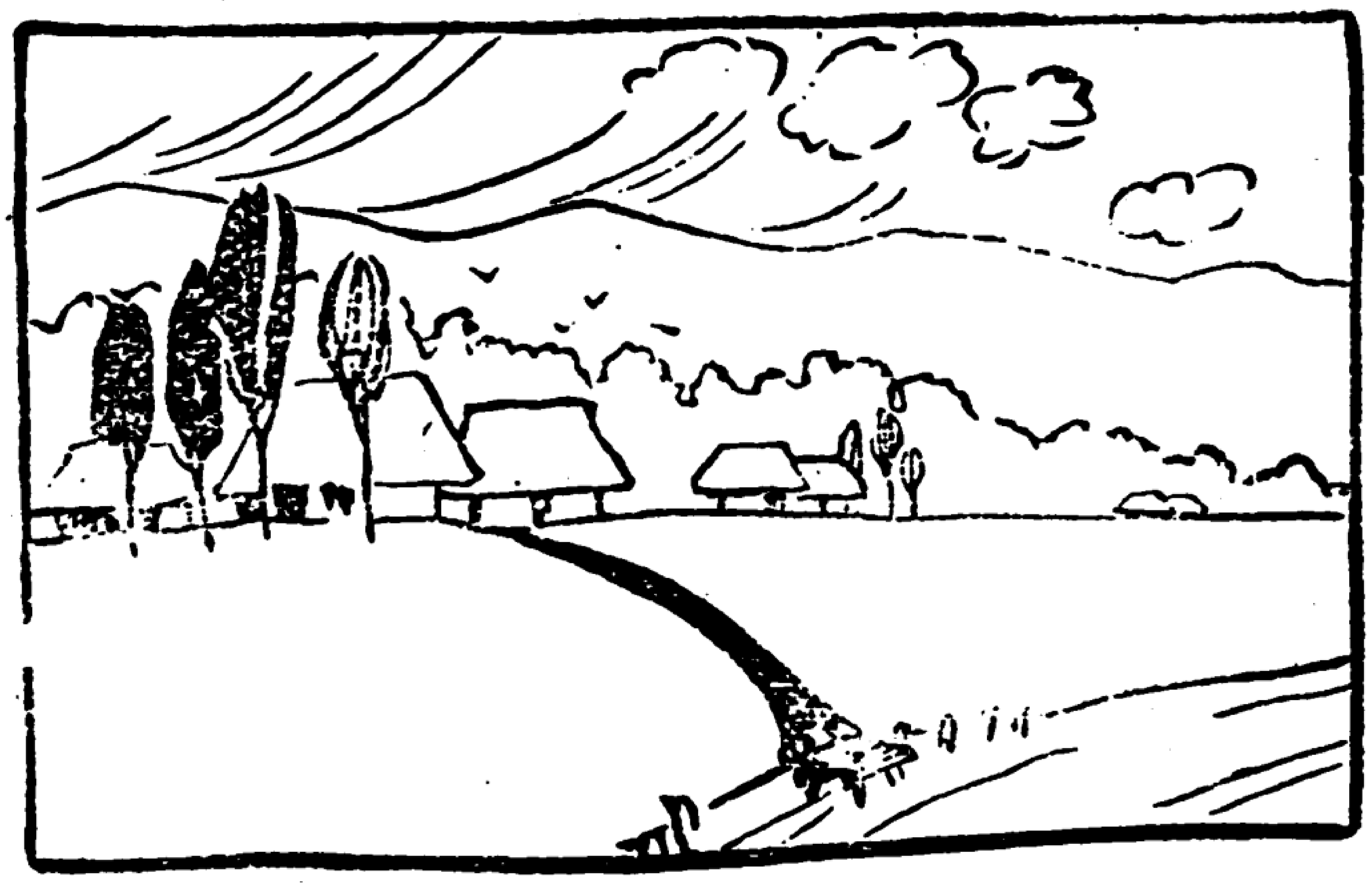
人

○自得記

讃岐 玉舍女史

諸行無常とやら老少不定とやら、浮世の常と思へば、さほど悲しくもなし、有始有終とさる人の申されし如く人とこの世に生れて來たからには、いづれ一度死ぬるはわかりし事、人一生の浮沈それは浪のやうなもの山のやうに立つたり六つの花のやうに飛んでも、すぐまた元の水、跡も形もない、それを泣いたり笑つたりする氣がしれぬ、迷、迷、迷で滿されて居る人の心しかし我は其れを笑はぬ、迷で持てゝる世の中であるから、然れど我は世の外のもの、苦も悲も知らず覺えず、月にむら雲、血に啼くとやら云ふ杜鵑、秋の夕も雪の日も、散りゆく花も流るる水も、おもしろう感ぜぬものはない、我は悟つたのであらうか、悟つたのであつたにしろ、悟らぬ先が悟りと言へば、やつぱり迷ひだらうか。

（評）最も悟りたるは赤子なり、大人の眞の悟は赤子の直覺に返ることなり。



春色（賞外） 京都市室町 會澤恒子

秀逸

○斷片錄

美濃 中島よし子

○鳥獸彼れ等は親の胎內を出づるや否や自己に食を求めて生長するなり、中に親の保護養育を受くるものあるも是れ僅か數ヶ月間のみなり。然り而して翻て人間を見よ、萬物の靈長と威張れど生れ落ちてより少くも廿年間を衣食住の勞を親より受くるなり、此の間筆紙に盡されざる保護養育を受く、而して齒廿にして獨立自活なし得るものは立派な人間なり、廿を越ゆる十指に餘るも、倘何等一事業もなし得ず、人様の厄介にばかりなれる輩あり、夫れ等の輩よ鳥獸より劣れるを知らざるか。

○目的は各自好む處のものを選め、何業にてもよし、好み選みなば一意專心勉めよ、勵めよ、寐食を忘るゝまで熱中せよ、かくて初めて眞に愉快を感ずるなり、かくて初めて成功なし後世に芳名を殘し得るなり、往古己が住家の燒けゆく

を見て書法の秘訣を得たりと手を拍つて喜びし書家あるにあらずや、狂よ、白痴よと罵り嘲られつゝも平然として己が住家迄薪となして、釉薬を發明せしベルナドパリッシーあるにあらずや。噫！諸子よ己が目的に向つてはかく狂する迄熱中せよ。

○余は熱烈炎の如き情の人を愛すると倶に一方又冷靜白刃の如き人も愛す。熱狂して八百屋お七の如かれ、高山彦九郎の如かれ、冷靜にしては氷の如かれ、秋の月の如かれ、食うて寐て起てはこゝに、日々千偏一律同じことのみなし一生を終る人は何にが爲め生存せるや意義を解する能はず、同じ事を繰り返すならば寧ろ速に現世を去るに如かざるなり。

（評）然り大に積極的なるべし、何事をも爲ざるは寧ろ惡漢に劣ろ。

○駄舌

讃岐　紫菫女史

◎情性は自由を意味するものなり、理性は束縛を意味するものなり、理性をうち除け單に情性の向ふがまゝにするは、軌道を離れし車の如く、危險之より甚だしきはあらず。理性の束縛に一任して情性を萎縮せしむるは恰も縛り附けたる車の如く、安穩なる邪魔物のみ兩者共に愚なり。利用の道は理性の軌道を脱せざる限りに於て、情車の充分なる活動を爲すにあり。怒れよ、叫べよ、舞へよ、躍れよ、笑へよ、泣けよ、飛べよ、走れよ、汝にして其軌道を脱するなくんば、光明の隧道は開かれたり、忍耐の鐵橋は架せられたり、峨々たる峻嶺何かあらん、溶々たる長江何かあらん、森も、家も、沼も、池も、汝に何等の害をも與へざるなり。

◎美花は荊棘の中に香ひ、名月は黒雲の後に現はる、困苦は死を玉とし、安逸は黄金を土とす、あゝ荊棘なるかな、黒雲なる哉、困苦なる哉。浮世は荊棘の原野なり、人世は黒雲の暗夜なり、人よ此の暗夜荊棘中に困苦突進するに敢て逡巡する勿れ、大宇宙秘密の名花は、此の中にてこそ求めらるれ、人生幽窅の明月は、これに依てこそ闡明せらるれ。かの生れて金殿玉樓に起臥し、未だ原野の何物なるを知らず、暗夜の如何なるを見たる事なき長袖流が、大悟徹底したりなどゝ得意がれるが如きは、偶々道傍の草花を手折りて芝蘭なりと歡び、蒼天の星辰を認めて、明月を得たりと躁げるの愚に過ぎざるなり。

（評）前節愉快なり。

○名譽

陸中　菊池はせ子

名譽とは人が社會に於ける處の價値なり、宗教家は、現在を以て不完全なる者となし名譽なる者を塵芥の如く思ひ、頻りに俗界の表に立たんとす、余は其志の高

潔なるを賞賛すと雖、名譽を不完全、且つ價値なき者と思考するが如きは誤謬の甚だしき者と云ふべし。宗教家の信仰する天國、極樂は果して存在するやは疑問なり、若し是れ有りとするも現世に於て人生の正道を踏みたる人に非らざれば此域に達する事能はざるは彼等の共に首肯する處なるべし、既に此點に於て誤謬なしとせば吾人は現世に於て、人生の正道を踏むことの理ある事を知る、已に此理あらば如何にして吾人は正道を普く踏まざるべからざるか吾人は信ず、正道を踏む人は名譽を得、然らざる人は得ざる事を。方今、青年少女は名譽の爲めに良心を枉げ、良知を蔽ひ遂に救ふ能はざる魔穴に入る、是れ名譽の何たるを解せざればなり、名譽は人力を以て左右する能はざる者なり、之を猥りに得んと欲する者は水に寫れる月を掬せんとして溺死するが如し。名譽は月光の如し、天眞爛漫淸浄無垢玲瓏玉の如き人には招かずして名譽の光明は宿る。

（評）天國極樂と名譽との關係に筆の足らざるを惜む。



夜の書齋（賞外）　讃岐　香川みさを

○道樂

因幡　みどり子

道樂とは何ぞ、或人答へて曰く、酒に女に身を持ち壞し、果ては賭博よ、まゝ窃盗よと道ならぬ行爲のみする、所謂無頼漢即ち道樂者なりと、然れども我は斯言に首肯するを得ざる者なり。抑此の語の意義眞髓や如何。道樂とは道を樂むの意なり。されば己が樂しと思ふ道に向つて事をなす、凡て皆之れ道樂と云ひつべし。上戸の酒に浸るも道樂なるべく、投機を好む者の相場に、將た賭博に熱中するも道樂と云ふべし。骨董いぢりの老人も、茶道好みの風流人も、狩獵を嗜む若人も、星菫と憧るゝ雅女も、皆己が好む所を愛する人なれば、是も亦立派なる道樂なり。其他數へ來れば、繪書に植木に音樂に角力に芝居に寫眞に枚擧するに遑あらざるなり。

我は道はんと欲す、凡そ世に在りとある者は何れの道にか趣味を有せざるべからず。趣味ある者は名利を拾てゝ其の道を愛すべし。書を好む者は飽く迄讀め。慈善を好む者は飽く迄施せ。讀むで、施して、而して樂

め。利せんとて讀み、名を得んとて施すは未だ道樂に非ざるなり。自己の利害得失を離れて、只だ心樂しきがために爲すに至りてこそ、始めて眞の道樂と謂ふべきなれ。世人、須く熟考して道を好め。而して好む道に樂め、善美なる道樂は、煩悶多き人生の興奮劑なり。

（評）余は道樂者の減じ行くを悲む者なり。

〇女子の本務

佐渡　中山訓子

女は身躰の造りよりはじめてよろづにかよわき者なれば凡て物言ひ立ゐふるまひしづかに言葉少く何事もひかへめにすることこそよけれさるを今の女子はやゝもすれば唯だ僅かにても習ひ得たることをば人にほこりひかへめにせば物知らぬ者よと人に笑はれんとかへりてはづかしく思ひ道を行くにも所せげに歩むをよきことゝ心得をるぞ口惜しき亦た學校へ物まなびに行くは人にほこるためにはあらじ人の妻となり母となりて其の子を教ふるに何事も知らでは如何すべき己れよき心ばへにてもしらずあしき道にもいりたちなばよき子なりとも人に笑るべしよしや人より少し劣りたる者にても母の教へがらによりては能くもなるものぞかし家を治むるにも夫につかふるにも人に交るにも事にあたりてよしあしをわかちさだむるにも學問なくてはかなはずされば若き時より心にかけて師の教へに從ひよろづのことは何のために學ぶかと常に心にかへりみて己が智をみがき德を修め家にありては能く其の父母につかへ兄弟に親しみ後はよく其の夫をたすけ家を治めんこそ女の務なるべけれたま〳〵感じたるまゝ拙き筆をもて斯くは物しぬ。

（評）この論を嘲笑する時代は禍なり。

〇自然に愛せられよ

玉水女史

かげろふの命を賴みとする人の身ほどあはれなるはなし。天地の間廣しと雖も、蠢爾として迷ひあるく見れば、恰も蟻垤の小なるにしかざるなり、いとゞ些少なる規畫の內に塞がれ、彼をして躓き是をして躓き、あたら血氣の時を仇に過し、徒に光陰の電馳に驚かされ身血衰へ、手足用を爲さゞるに至りて始めて、無明の醉より醒めたるが如く、天を仰いで歎息す、嗚呼これ我人生なるか。果して斯の如くなりせば、偉人の大業も亦賴むべからず、英俊の倒影も亦望むべからず、我れ石を抱きて水に投ぜんのみ、されど眼を人生の光明ある一方に注ぎ、自ら享くる所の天職を省れば、いかてか自ら棄つるの愚を爲す事を得んや、固より人の身は哀はれなるべし、哀れなりとて何ぞ悲しむに足らむ、哀れなるが故に之を慰藉する所のものあるなり。彼の

荒漠たる野邊に咲く花よ、人の鍬もて之を和ぐるにもあらず、水もて之に注ぐにもあらず、彼は自ら生長し、自ら養ひて、遂に可憐なる花とはなれるなり、人之を賞せざるも悲しまず、人之を誹るも怒らず、周圍の刺戟に煩はされずして、獨り樂しむが如き色あるは何ぞや、彼は自然に育てられ、自然に愛せられつゝあるが故に喜色あるなり、人も亦然り、己の天職を忘れず、安んじて自然の寵兒とならば、よしや海鰕を侶とし、麋鹿を友とするも、胸中常に清風を以てみたされんか。

（評）これ最高の論理なり。

○名譽は求む可らず又棄つ可らざる事

福井　野坂雅子

人の此世にある、名譽ばかり貴きものはあらじ、芳ばしき名を得んには、實に一生をも要すべく、之を失ふは、只瞬く間にあり、しかして、芳名は千歳に埋るゝことなく、醜名は終生に滅することなし。されば、よき名こそ誰も／＼ねがひ望む所なめれ。さりとて吾から進みて奪ひても得まほしうするは、いと／＼見苦しうをこがましき業なり。かくして得たらむも、いかてながう保ち得らるべき。なか／＼に醜き名さへ伴ひ來らむ。これ面のみ美しうして、心の醜なるもの、いかにうとましからざらんや。かの梅の香ひ、鶯の聲、いづれめでたからざらむ。されど雪の中より匂ひ出づるも、人の譽れを得んが爲にあらず。妙なる色音、將、人の愛を求めんとにもあらざるべし。おのも／＼我職分を全うするにこそ。人も身をたて總を全うせんか人に知られん事を求めざるも、其譽れや千歳に朽ちざらむ。されば誠の名譽は始より、いたう求めんとあせるからに得らるべきものには非ずして、己が榮の、いみじう世に優れたらむには名譽は跡を追ひくるものぞかし。されば如何に物暗き中にも、よき行は其の輝かむこと雲間の月のごとく、おのづから人にも仰がれ、將こゝにかしこに、ほめたゝへらるゝに至らむ。かくてこそ其名聲は天の下にかくれなからめ又之に反きて名譽を棄てんか、身を修むる心もなく物學ばん事をも勉めず、恥をも忘れ儀をも失ひ、たゞ只我が思ふ儘に振舞ふより、よからぬ道に迷ひ入りて、はて／＼はわれから身を損ひ、家をも破り親はらからをも恥かしむるに至らむ。さればよく／＼此の際をあきらめ、此理をさとりて身を謹まむものと例の雜記にいさゝかかいつく。

○快樂

本所　田中霞筏女

妾に快樂を與ふるものは何ぞや。糸竹か非ず、皷か非ず、琴か非ず、妾が好む所のもの唯磯邊を洗ふ浪の音のみ、蒼浪の音のみ其の雷霆の如く轟々と響く時、轔々殷々として車馬の音の如き時、一陣の潮風をあびて獨り夕の磯に立つ、嗚呼快なるや。猛りて巖を嚙む男浪の響、柔かに磯の櫻貝を拾ひて躍る女浪の音、豈、筑箏の類ならんや。試に浪うつ岸に立て眼界の達する所を眺むれば、片帆眞帆眼中に入りて爽快、悒鬱去り、心氣靄然たり。妾は海を愛す海を愛す。一夜月朧なる時、鴻臺の古戰場をさまよひしに、何處よりか來りし琴の聲、里見氏の末路も偲ばれて悒鬱胸に迫りぬ、妾は爲す所を知らざりき。弓張月紺青の空にかゝりし夕、妾は門前を流す糸竹の音を聞きて榮ありし昔を思ひ人しれず袖ぬらしぬあはれそれより琴も糸竹も手に取らず獨り好むは自然の樂器とも云ふべき磯の浪吁妾は五十年の長き日月を、浪と共に暮さん哉。

新體詩

河井醉茗先生選

特別第二賞

○春蘭の歌

岩代國伊達郡立子山村　三浦たい子

三月、山の雪消えて、
うづもれ落葉暖く
和風麓めぐり來て、
春蘭此處に生命あり
土壤、暖く花ひらき、
風、ゆるやかに香の匂ふ
春を染めなす佐保姫の、
香に高くかざし見て
あゝ純潔の春蘭よ、
汝こそ山の插頭ぞと。

蘭の花は餘り日本の詩人に歌はれませんが、熱帶の植物として最も美くしい色と、淸らかな形を持つたものは蘭です。日本に咲くのは多く支那的て、餘り好くやうな花てはありませんが、試みに溫室へ行つて御覽なさい、南洋の蘭の花は何んなに立派てせう（醉茗）

特別第三賞

○放ち鳥

靑森縣鰺ケ澤七ツ石町貳番地　加藤美枝子

うづむべき柩の前の、
大なる鳥籠ひとつ、
慈悲の手に今開かれぬ。
喜びにみちたる風を、
力ある翼にうけて、
百の鳩いづちとびゆく。
里中のやしろの中か、
岡のべの林のおくか、
山かげのくち木のうろか。
むさぼれる鳥屋の主人、
恐ろしきえみをうかべて、
踊りくる小鳥をまてり。

詩人は宜しく斯う言ふ所に、眼を着ければなりません、後の二節は削りました、鳥屋の主人に無慈悲を責めた處が、理に落ちる許りて、そんな事は論文を書く人にお任せなさい、詩人は只、棺の前の白鳩を歌へば澤山てす（醉茗）

天

○袴に添へて

山城木津局菅井村三十二松田方　幸山くも子

參らする手縫の袴、
雛ぶりの茶宇卑くも
前紐の丈に餘りて、
厚き地に籠る厚心。
都女の指細さより、
いつまでも折目正しく
糸針の只一すじの、
妹にこその御文に恥ぢぬ。
『かゞり目』の距り遠く、
京と爰に分れ住むとも、

引き合はむ縁の糸の、
強からば春は相見む。
折り添へし櫻の咲かば、
業卒へて歸らますとや、
參らする袴の主の
日毎々々堤に待つに。

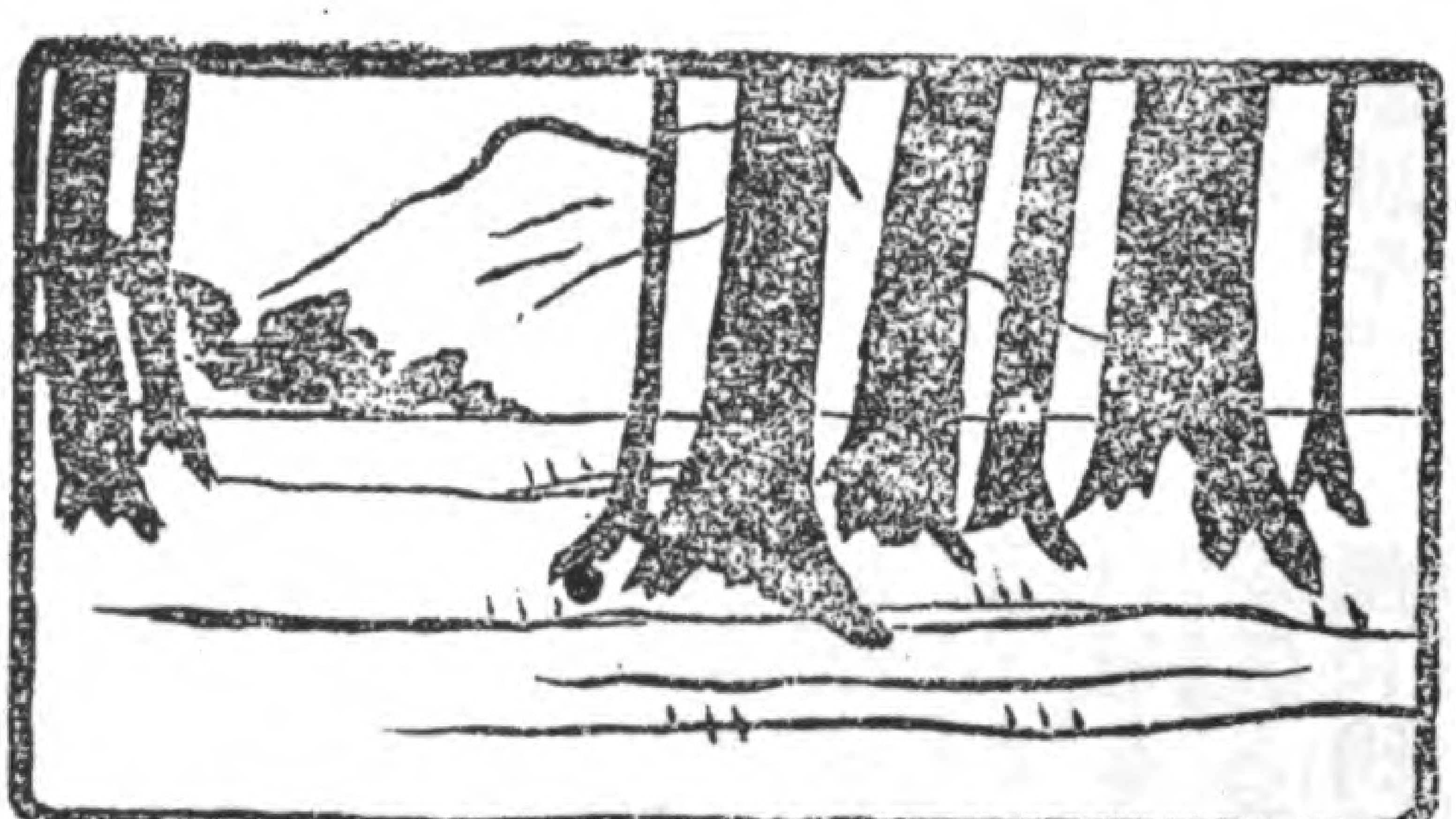
袴に添えた歌としては、好く出來て居ます、袴の仕立と孰れが上手か、其人にこそ聞かまほし（醉茗）

地

○夕

下野小山町神鳥谷　新井琴子

天の寶珠と七曜の、
星を飾れる金冠に、
天馬を御して女の神が、
平和を守る御姿か、
白雲ゆるう流れ來て、
七彩凝す夕榮の、
色も薄れぬ夢のごと、
神秘の色は深うして。
聖者靜けき默想か、
今はと號ぶ鐘の音、
一輪淸き月かげの、
自然を告ぐる法音か、
湖上和らに拭はれて、
古塔に懸る離れ島。


凉い木陰（賞外）上總波岡　田村瀧子

空の大海地に湛へ、
玆を永劫なる我領と、
水神住ふ湖や、
投げし五層の影ゆれて、
長蛇銀河に浮く如く、
崇高は塔の姿哉。

自分に塔影の作がありますから、好んで塔の作が贔屓目に見るやうに思はれても困りますが、公平に考へて此作は優れて居ると思ひます、諸孃の方々、如何てせう（醉茗）

人

○おかめいんご

下谷區上根岸百二十五　太田秋津子

玉を轉ばすよき聲に、
春の熟眠の曉知らぬ
夢を覺まして朝々を
起きよと呼ばふ窓の許
友もなき身の淋しさを
愛しき姿はしき聲
希望の歌に慰むる
優しき友よ名はいんご
朱塗の籠の狹けれど
翼も輕き舞ひ振や
何おもはゆき恥らひに
染めしも優し頰の紅

詩の筆取る小窓先　たべよと與ふ青若菜
人になれたる賢さの　ついばむ樣も愛らしき

いんごとは珍しい、飼ふ事は珍しくないにしても、詩に見るのは珍しい、此の詩は最も女らしい作てす(評者)

秀逸

○春興　淺草　朴蝶子

春姫歡樂の眉あげて、　靈華の皷高打つや、
一夜に春は天降り來て、　見よ地の世は花の盛裝。

たとへば鎧緋威を、　御具し參る武者に似し、
崇高を慕い野の花を、　一枝手折りて胸にかざすや。

大野の春の精を吾れ、　身に受けたりの感興に、
靈華の皷響き來て、　まどし華樂の興や默思や。

興に乘り過ぎて、興を失ひさうな樣子てすが、兎に角才人の筆てす(評者)

○蝶　松山　山脇幸子

菫の床に生れ來て、　たんぽの露に育ち來て
南の風そよ〳〵時、　金翅を高く翻し
里の童誘ひ集めては、　春姫が歌誦せしむ。

九十の春を若やぎの、　草に起きては花に伏し
塵の世遠くかげらふの、　燃ゆるが如きほのゑひに
人の得知らぬ香を嘗めて、　限りある世をくひもせず。

黃金の翅の二重ね、　靜にのして安らけく
蜜を抱いてゆくばかり、　夢のみ神のさゝやきに
詩歌になやむうた人が、　若き血汐をおどらしむ。

此蝶は鑠樂に殘る古代の蝶てはない、少くとも採集帖に挿まるゝ蝶てあらう(評者)

○水仙花　奈良　祗園女

小さなる神の使と、　水仙を觀てあるに、
かたちよき花瓶は、　銀の宮とも、
聖らかに耀やきぬ。
白冠ならばとも、　花片の白きかな、
翠裳と葉は眞青、　夢のごとさや〳〵と、
風に鳴るさゝやきや。
春寒を我に咲き、　夢ならぬ夢路より、
我喚ぶと香吐くらし、　よき春を讃へむに、
よき興の唄とわくなる。

水仙と銀の瓶とは好き配合てした(評者)

○西行法師　長野　安孫子美子

冦するあらば兩つに裂いて、　三尺無反の劍に血ぬらし

龍顏遠き階下に額づひて、　過る長袖を睥睨する
身はこれ北面の大丈夫。

春宵甲を叩いて散る花一ひら、　有聲無聲すべて意味
嗟大慈なる正覺の佛陀が、　凋落の啓示胸に泌むを
何ぞ我れ生死の謎を解き得ざる。

可憐の寢顏に面を背けて、　蕭々去る明滅の簗下
堪へじな小さき父呼ぶ聲―、　双脚に、つと蹴て廊に出れば
風落寞として雲大寂。

六合の物象我に於て「空」なるを、なんぞ發念の前に吾子あらむや
是より圓頂の一沙門、　行雲流水に人生を笑つて
「死なん哉花の下にて願くは」。

女史の秀才は之を知る、漢字を使うこともわるいとは言ひません、史詩を作ることも無論贊成ですが、是を以て能事了れりと思ふやうならいけません、餘りに散文的な句は避けるが宜しい（醉茗）

○夕暮　　奈良　增野とも子

夕ばえの雲ゆかしくも、　暮れ行く空に色染めて
雲雀なくらん大空に、　うばらの光添へてけり。
一日の名殘あゝ今よ、　春の夕ぐれ靜かにて、
まぼろしと飛ぶ花姫の、　あでの衣は水に散る。

流るゝ風に魂のせて、　蝴蝶の舞へる野邊行かば
天津通路香しき、　花のにほひに道とぢて。
霞こめたる山ぎはに、　聲は涼しく思ふどち
鳥は日暮の歌うたひ、　かくて暮れ行く空の色。

奇才、迸る光あり、未だ詩作には熟れない方のやうだが大いに造詣を祈る（醉茗）

○夜の女神　　新潟　中林秀子

天琴をさまりたそがれそめて、　餘韻なほある磯馴松が枝
東のみ空よ天降りまして、　薄き羽衣かろくをさめ
女神靜かに暗めしたまふ。

寥しき暗の子ことごと集ひ、　女神のさとしを皆眼ほうけて
こゝに天地を領しをはんぬ、　薄き羽衣ふたゝびのして
女神は行きぬ天の彼方へ。

稍、異れる女神の一つ（醉茗）

○花賣女　　秋田　平田波子

やよ少女子よ待ちねかし、　自然のかみのふところに
うち抱かれてきよらかに、　咲きいてたりし其花を
いづこの里にもちて行く。

神の心に打ちそむき、　なほき技さへ折りまげて
たくみに誇るつみの子の、　手にしぼみ行く花やさぞ
うらみのなみだ灑ぐらむ。

いつても投げ入れ流の自分などは、この歌を採用せずには居られません(醉茗)

○平和の色　大阪　白薔薇女

臙脂、紫とき色の　雲藍色にをさまりて
男神女神に通ひ行き　靜に暮るゝ海の上
をとなふ風の生暖く　豐に湛ふ海面を
平和の曲を高々と　夜の神のせて辷り行く
夕ばえ霞と消へ行けば　黄色の波にゆあみせし
鴎化粧も美しく　可怜小汀の末遠み
網引の聲もたそがれて　遥にかすむ波間より
小舟、釣船威勢よく　籠を滿して歸り來る
宵の明星まだ出てず　暗と潮の戀なりて
靑一刷毛の南洋は　濃き灰色を染めて行く
神秘の磯邊わが立てば　夜は薄鼠ほのかにて
夕浪白し沖の方　たゞ永遠を通ひ來ぬ。

作者の特色とも言ふべきものは、聊か見出しかねますが、才華煥發詩思の豐かな處は望みがあります(醉茗)

○夕暮　茨城　綿引早子

夕寂しく風死して、　靜かに花のひら〳〵と、
散る歟夕雲ゆる鐘に。
寂寞破るさゝ川も、　人の命をきざむ哉、
奇しき流れのせゝらぎや。
あゝ人の子の墓なさよ、　見よや愁ひの色こめし、
夕雲西に流るゝを――。

夕雲の愁ひを知り初めたのは、先づ詩境に入れる一段でせう(醉茗)

○春蘭　大阪　登秀子

谷間に蘭の花を摘む、　露よかをれよわが袂、
摘とるはなはやさしきに、　いかでか風の我に薫らぬ。

三浦環と同題で勝たれたのは殘念でした(醉茗)

○雲の歌　八王子　小池つね子

藻汐にけぶる浪華津の、　夕べ花散る浪の面
雲、金泥に流れては、　神秘の響深うして
戀に煩悶の人の子の、　瞳に浮かぶ希望あり。
水や空なる東の、　彩に榮ある曙の

帷くづれて大八島、雲に眞紅の映ゆるとき
寄せては返へす新潮の、靈の行衛は雲に馳す。
平和滿てる村里の、笛にくれ行く夕榮の
色美しき綾の雲、神の彩衣飾るごと
夕立晴れし柳川の、堤濟めぬ詩の領。

あゝ渾沌の其の昔、
溟滓薫る天地や
霧島山の白雲は、
神、天降り導きて
葦原なぎし逆鉾の
雫凝りてや匂ふなる。

必ずしも雄大の象ありと言はれませんが、一家の觀察として警拔なところがあります（醉茗）

○夕暮

京都　大澤白菫女史

日入果し西の空、雲七彩に美しう
靜に響く天籟や、秘密に出でゆ鐘の音
あゝ世の人よ夕暮の、幽けき歌を何と聞く。



貝ひろひ（賞外）讃岐　香川玉舍

淡き霞の幕出てゝ、啓示す燦たる新星よ
光も淸く萬象の、夢路を誘ひ愛をそふ
あゝ世の人よ夕暮の、美しき繪を何と見る。

其日の務身に終へて、自然の胸に安らえば
牧場より訪ふ草笛の、音より更けぬ夜の國
あゝ世の人よ夕暮の、聖けき幸を何と知る。

空には匂ふ愛の花、
地には眠れる暗の影
天地滿つる平和は、
げに夕暮のめぐみなり
あゝ世の人よ皆共に、
此樂園を樂めよ。

夕暮を愁ふる人あり、此處に夕暮を讃美する人あり、自然の胸は大いなるかな（醉茗）

○山上の曙

伊勢　平塚たみ子

ほの／＼白む東の、明けの光に暗とけて
人の世はやもうち開き、罪のかず／＼消えゆけば
百鳥森に聲を張り、谿間は狹霧にうづもれぬ。

月魂丘樹に靑ざめて、　さながら病嬬のそれの如
天の光に變りゆく、　み空の色彩に月消えて
沈み眠れる香睡に、　眞珠の露ぞかゝりける。

あゝ仰ぎ見よ山頂を、　はやこそ告れ照光を
對の山に先づ受くや、　後にぞ下りて吾々に
そが永劫を示さんと、　野邊にも新輝強く射る。

山上の曙としては歌ひ足らない、第一節だけは確かに題にふさひました(酔茗)

○まちてかへらむ

鶴城の麓　ゆき女

まちてかへらむ父ならば、　霜ふる秋のさむき夜を、
うらがれはてし、たまの緒の、　みだれ野萩のかげにして、
さびしき虫になかれつゝ、　かくての千夜をいとはじを。
鶴城の月白くして、　かなしきおもひこそへども、
いとしき父はかへり來て、　たゞさびしさの秋の風、
戀ゆゑならぬほつれ毛に、　人の袂に寒くも吹く哉。

父を戀ふ、情は迫れり、詩も親戀しい頃のうたひやう(酔茗)

○いさゝ川

香川　紫菫女

日ごとにぬるむ川水の、　ゆるく小草を洗ふ時、
裳裾かゝげてきしのべに、　根芹あさりし跡はこゝ、
やゝあたゝかき春かぜの、　かろくたもとを拂ふとき、
清げき手より笹舟を、　はなち流しゝ跡はこゝ、
摘みにし根芹籠にして、　家路をさして歸へる時、
我等はいつも連れ立ちて、　こゝなる橋を渡りにき、
影もさやけきいさゝ川の、　清き流れにうつる時、
ゑめる我等が面わには、　如何なる色か宿りけん、
あゝはや萠ゆる川の邊に、　遊びき野路のくるゝまで、
謳ひき野邊の樂しさを、　わがよの春のたけぬうち
あゝ其の夢もさめ果てゝ、　身は徒らに年ふりぬ
小がはの水よ語れかし、　昔の野邊の樂しさを。

悠揚として伸びた處はよろしい、伸び過ぎて平板になつた處はいけません(酔茗)

○梅と鶯

陸前　尾形千代子

姫神、春のこもり居に、　聟によき子と生みませる、
姫、黃鳥と名づけけり。
ひと日御遊の道すがら、　下界にひとりを生れませる、
王、白梅と申しぬる。
天にひとりの愛ぐし姫、　下界にひとりのまなし君、
姫諾ひつゝたづね來て、　こゝに嬉しき契をかたりぬ。

○庭

信濃　山越露子

馬醉木に眠きうす日和、　永き病ひにやせし身を、
妹が小肩に縋りつゝ、　おぼつかなげの庭歩行、

赤く芽ぐみし芍藥の、
地に根赤き二寸の芽、
世の人の子のそれにかも、
戀に悶ゆる若人の、
亂れがちなる眺めかな、
水のさゝやき銀鈴か、
妙なる琴のひゞきかと、
しばし佇む花のかげ、
小さき翅のなよ風に、
魂も飛ぶらん心地しぬ。
やがて希望の花ひらく、
胸に希望の玉抱く、
いたくも似たる姿かな、
思ひに似たる連翹の、
築地をめぐる遣り水の、
天津少女のすさびなる、
身のうきことも打忘れ、
舞ふや胡蝶の愛らしう、
鬢のほつれ毛そよ／＼と、
清き魂もて向ふらん
あゝ忘れじな今日の日を

○水仙花

呉市 玉枝

龍田の姫の跡戀ひて、
あこがれ出し雪姫が
舞ふやみ空に冬の樂、
興もそゞろに深き時
かざす羽袖にはしなくも、
かうべすべりて下界に落し
玉のみ春野に咲きて、
雪間に清し水仙花

○卒業

德島 木戸玉緒

重き望みを背に負ひて
勉めし甲斐あり今日の空
澄み渡りたる月影に
結ぶ夢地も心地よし
郷に居給ふ父母も
我身の幸を祝はれん
望みの綱をたどり來て
心安むる時きたる
學び舍遠き古里に
歸りて摘まむ若草も



夕空（賞外）　京都上京　堀川さく子

○雲の歌

下總　伊藤美智子

水より生れて水となり
下界（つち）より出でゝ下界（つち）に入る
千變萬化きはみなく
蒼穹（あをぞら）高くまふ神に
沐浴齋戒、筆とりて
讃美の詩を捧げずや。
霞か花かうら／＼と
日光（ひかり）も鈍き美（うま）し日を
雲雀かろらに舞出ては
新潮（うしほ）の鏡に影のせて
詩の調べや添へぬらむ
春の雲には譜あり。
男神の猛り強くして
草木も凋む朝夕を
青海原にたゞよひつ
豪宏無下に尊しと
嬌樂を祈る夏雲に
永久に啓示の響あり。
秘曲に富める森の上に
出ては悲哀を高鳴りつ
入りては歡喜をさゝめかす
あゝ秋雲の果敢なさは
運命詑しき人の世の
幸なき子らに似たらずや。
萬象寂寞に眠るとき
高きみ空を走りつゝ
西し東す其姿影（かげ）の
いと壯嚴に崇（たか）くして
戀うて慕ひて冬雲は
打てば金鼓の響あり。

○散り行く花

岐阜　田中悦子

掻り分け髪の昔より　共になれにし我友は
ころも彌生の半頃　かりそめならぬいたづきに
こゝろづくしの甲斐もなく　つぼみのまゝに散りましき
あゝなつかしやしかすがに　春や昔のしのばるゝ
春は花散る朝窓に　暮れ行く春の香をいたみ
夏は川邊の夕すゞみ　夜すがら興じむつれしを
さては淋しき秋風に　うつし合せし笛や琴
世がたりつきぬ小窓には　冬の寒さも忘れしを
あゝ思はじとおもへども　露か涙かひたすらに
胸のみひとりせまるなり　かたみにのこる筆のあと
せめて思を晴らさんと　とり出て見ればなほさらに
いやます思ひいかにせん　折りしも庭にさく花の
鐡のひゞきにさそはれて　散る花片の二つ三つ。

○香露

秋田の里　小笹千代子

春の日影のうるはしく、　すみれの花野分け行けば
香ゆかしきしらつゆの、　はらりと顔にかゝりけり
造物主(かみ)の力に花の香を、　こりかためたるものならん
草の葉末におきたるは、　化粧の料としませ春姫。

○星の夜に

山形　高梨とく子

天地漠たるたゞ中に　希望にやせし塵の子が
下界離ると野に立ちて　仰げば星は地に落ちぬ。
世は連綿と永劫に　夢より夢へ導かれ
例へば雲の遡るごと　晨ゆふべを測られぬ。
若き血汐もはた戀も　希望も同じ夢なれや
慈眼まばゆき神ありと　人を呪咀(のろ)ふぞうらめしき。
あゝ今にして吾は只　何か怨まむよしさらず
心は高く身は清く　み宮の星と輝(かゞや)かむ。

○蝶の一生

安房　三瓶はる子

霜に被はれうなだれて　枯れ果てんとせし草の根も
春の來るを待ちにけり　やがて霜より露となり
春の情に浴して　木の芽草の芽萌えいづる
見れば間もなく何處よりか　飛び舞ひ來り小蝶等の
菜の花櫻菫花　たどる小羽の忙はし
これも月日は待たずして、　はや秋風の立ちぬれば
何處へ行くか姿なく　哀れや蝶の一生よ。

○實成櫻

青山ゆを子

實成櫻と我聞きて、　日毎々々にいつくしむ、
その愛こそは汝知るや、　朝に夕べに訪なひて、
願ふは美しの花咲きて、　能き實を結ぶ事なるぞ。
さるを汝はいかにして、　我の願を入れざりし、
花は上なく美なれども、　其實は少さく味苦し、
我の失望を來ん年に、　元に返せよやよ愛子。

○春興

大阪　田中落椿

朝明髮(あさけがみ)、
とくにもたへぬ戀の子が、　曉夢に憧憬れて、
雲に見出し幻しを、　また趁ふ樣の瞳かな。
若(わか)かりし、
涙は甘き胸なるを、　何處の春と問ひますな、
忘れがたきも忘れては、　思ひ出もなき露の身よ。
やぶれだいこ
花なる人の戀しとて、　月に泣いたが夢ならば、
今宵と嫁ぐ若人(わかうど)の、　破衣よつゝめ涙顔。
汀の櫻散るよひを、　祝ぐと集(つど)ひし村人に、
まぢりて打つや破太鼓、　ならぬ響を知るや君。

文學士
沼波瓊音先生選



特別第一賞

○湖畔

豊橋　房枝子

板敷に額髪を當て、願ぎ事の數々をして、辨財天の境内を立出たのは、もの丶陰暗うなる逢魔が時。梅雨もよひの空には灰色の雲重げに、夕焼の紅も彩られず、星一つ洩れないで、暗澹として暮れゆく樣の、さらでもわびしき限なるのに、飛んで行く死の使のやうな烏が二三羽、啞々と血を吐く如く悲しき鳴聲は、あはれ誰が身の上ぞ。汀を半丁許り來て、顧ると、湖に臨んで後に山を負うた、かの祉は小く望まれ、其傍から行くてまで、ぐるりと水を圍んだ雜木林は、陰森として晝暗き迄茂つて、下蔭に何物の潛めるかと物凄い。秋晴の日瑠璃に澄み、暮春の夕茜を溶く、水は古鏡の沈める如く、今は鼠の帳を被いて、渾沌の世の樣も偲ばるゝばかり、寂として、恰も眠つて居るやうだが、向ひの山から颯と一颪、樹々の梢を顫はすれば、夕暗を破つて仄白く、小波がさら〳〵と、しめやかに岸を洗ふのである。

鬢の後れ毛はらりと靡いて、冷々風の身に泌むるに、と見ればきらりと寄する波、小皷の音には通はず、衣摺れの床しきに似て、いと靜かに小石に咽ぶあたりに、烏の片羽遺せしやうな、一摑みの黑いものがあつた。何ぞと訝かしく、立寄つて見ると、這は如何に、根よりぷつゝり切りしと覺ぼしき女の黑髮、波に運び去られむとする刹那であつた。

思はず身内戰かれて、よろ〳〵として退くと、身を開いて五六間走つたが、言ひ知らず恐ろしき中に、また何とはなしにうら懷かしく思はれる、振返ると、紺碧の波のまに〳〵、漂はされて見えなくなつた。

けれども……。

黑髮！亂れて長き恨を語るやうな彼の黑髮は、妾の胸に、彫り付けられた如くはつきりと殘つた、匂ひやかなあの髮をば、自ら切つたか、切られたか、事の起りは戀か意恨か、或ひは湖の主に魅られた哀れな女が供へた犧牲であつたか。さるにても係る夕ぐれ、係る處に一人見た、私と、黑髮とに、何に依つて如何なるえにしの糸が結ばれて居たのであらう。前の世に犯せし罪業の猶消えで、假に我が目にのみ黑髮と見えて、係

くは胸を刺すのであらうか。それともこれが我身の上に迫り來る運命で、其の儚の幻に見えたのではあるまいか。

心着くと私は裏口の折戸の前に立つて居た、眺れば、此秘密を呑んで長へに洩らさぬ湖は、暮靄を罩めて静かに暮れた、湖心のあたりに幽かな水音は、暗に獺の躍るのであらう。思へば先の黒髪も、早其口に咬へられて、水底深う棲む主の前に捧げられたかも知れぬ。月も星も照さぬ世に、事は皆恁くて、窮無き秘密の淵に沈み行くのを想うた時、妾は熱き涙のこぼるゝのを禁じ得なかつたのである。

それにしても滿願の歸るさに、緑の黒髪の沈むを見たは、如何になる怪しの兆か、身の上の願は吉か凶か、それもこれも、今宵の夢に知れるのであらうと、戸を押すと音なく開いて、怪し、物も觸れぬ髮櫛が、つと落ちて二つに折れた。

（評）讀み行く儘に物質を忘れ科學を忘れ身直ちに幽暗なる靈界に彷徨するの思あり、終に至るまで願の何たるを說かず黒髪のいはれをも明にせざる大によし、終末の櫛わざとらしからずして然らず、總べてこの文妙句送迎に遑あらず、三頭圏點四頭圏點などいふものも欲しと思へり。

○背戸の小川

和泉堺市大濱通四丁二八　竹叟文子

背戸の破れ扉を開くと直ぐ、小鈴の響のやうな水のせせらぎがきこえる、これは清い御苑にそゝいで居る流れの音である。底は一面の美くしい白砂で、靜かな波立たぬ日は玉の鏡のやうである。

妾は今やつれたる姿を、疵のないこの水鏡に寫して土橋の上に彳んだ。

風もないのに何の花か、小さい花片がバラ〳〵と落ちて、妾の姿を或は巾廣う、或は細長う、或は首だけ放したり片腕だけ放したり、それはいろ〳〵さま〳〵にそして只暫くの間に、崩れ變つたので思はず微笑んで見上げると、向ふ岸の古い椋の樹を這ひ上つて居る蔓草の花が落ちたのであつた、傍には一羽の鳥が熟と妾を見下ろして居るので、何だか恐ろしうなつて、叱ッと聲かけると、鳥は横向いて一度羽ばたきしたまゝ默つて西の方へ飛んで了つた。

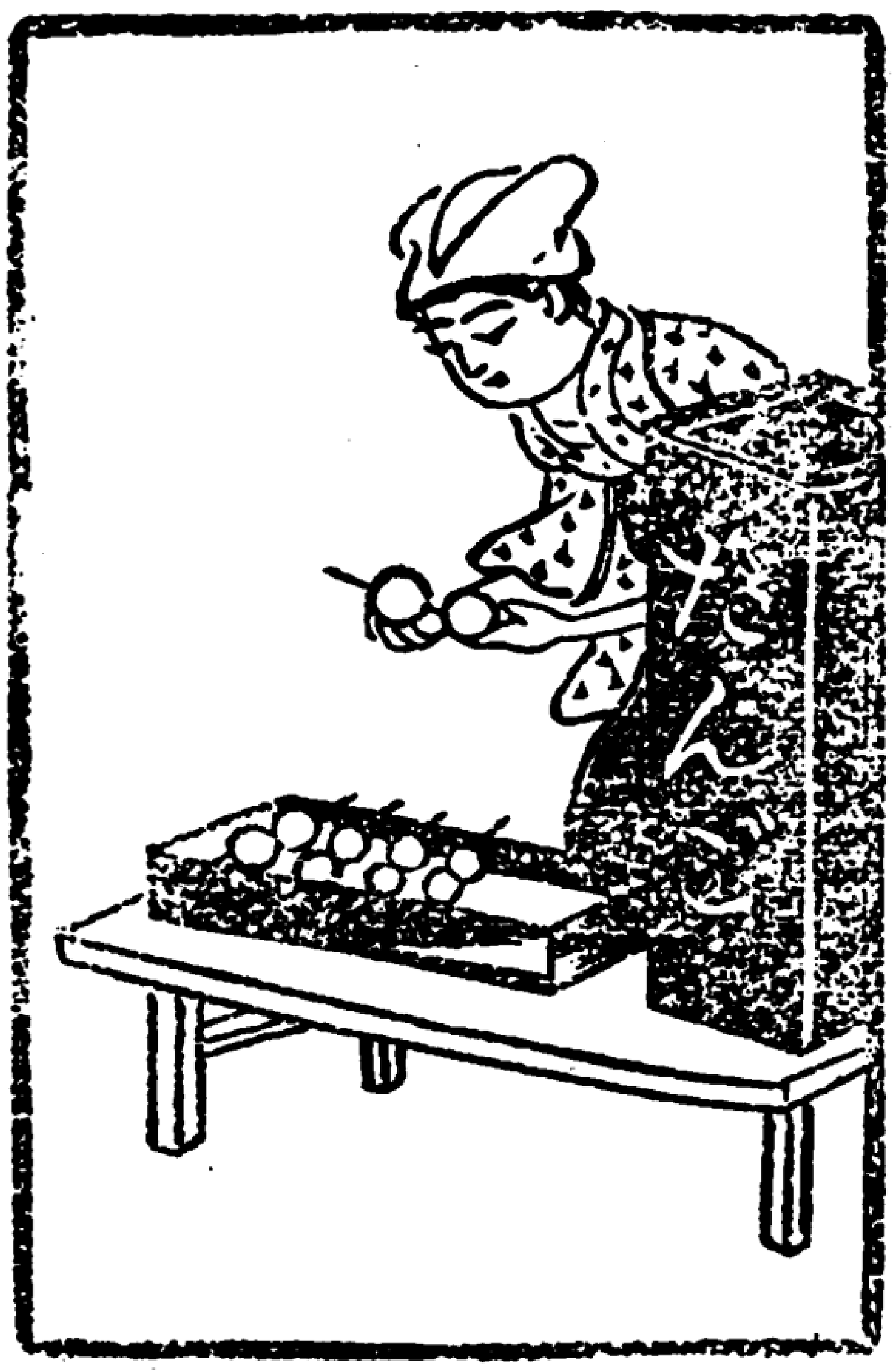
後の方で家鴨の聲がするので振り向くと、流れの曲り角へ大きなのが現はれた、それにつゞいて三羽二羽と

澤山に出て來て、藻をつゝいたり、魚をあさつたり、だん／＼と近寄つて來る、今土橋の下をくゞつて流れてくる色あせた菜の花を見送つて居ると、一羽の家鴨はそれを呑み込んだが、また吐き出した、花は幾つにも別れ亂れて見えずになつて了つた。

その後から小さい網を持つた、十位の男の子が二人蟹や小魚を取り乍ら來て、家鴨が怖いのか小石をその群に投げると、ガア／＼かしましう鳴いて逃げたが、少し離れるとまた餌をあさつて居る。

花やかに綠濃く萌えた柳は、數多岸に並んで居る、その下を牧場へ行くのか、赤に白のまだらある親牛と、小牛三匹强く鞭打たれて小走りに過ぎ去つたのが寫つた。

ふと空を仰ぎ見ると綿の樣な白雲が、ゆたりと動いて行くので寫つて居るかと、水面に向ふとまだ若葉せぬ椋の枯枝の間を縫うて、巨人の樣な兎の樣な鳥の樣なのが、同じ樣に川上へ流れて行く、と思へば何だかこの白雲の上に赤いものが見えるので眼を瞪ると蓮華草の一束が浮いて居るのである、誰かのつれ／＼の摘花かと思うて、先の方を見ると赤い鼻緒の草履が片足流れて來る、さてはあの蓮華草の主のであらうか、岸の花を摘まうとして知らず足すべらして草履が流れたので、あわてゝ追うたが折角の花束も落して、遂に二つながら拾ひ得なかつたのであらうか、おゝ可愛さうに家へ歸れば、母もあらうに、嘸叱られるであらう、妾も幼い時にはかうして下駄を流して了つた事もあるのに……などゝ昔を思ひ出して、この主は、この罪ない主の少女は、心配して居るであらう、とその子の姿も見たし、いぢらしうなつたのでつつと走り寄つてその草履を拾つた、そして妾は返してやらうと土橋を渡つて、野邊の方へ步を進めたが姿が見えなかつたので、また流れに捨てゝその後を追うて家に戻つた。


だんご店（賞外）　埼玉縣川越　大木歌子

（評）女性的の美しき感想全篇に溢る。
（又曰）意味なく流れ行く蓮華草草履を己れと綜合して不明なる對象に注ぐ同情の詩的なることよ。

天

○峠茶屋

周防熊毛郡淺江村　岡部笹舟

赤う色づいた澁柿が三つ許り、枯れ枝に殘つて、鳥でも飛んで行つたのか、風も無いのに梢がうごいて居る。

今遙か麓の白い煙がすうと棚引いた青黒い田の面を濕つた樣な鐘の音が、一つ二つと次第に深く自分の胸を抉ぐる樣に響くと、金色に强う輝いた夕雲も、いつしか靜かに靜かに流れて行つて、磨き上げた樣な西の空の紺色はいはゞ深い〳〵湖の澄み切つた樣、それに深紅の光線が殘つて、そめ返された山の頂が淋しい笑を漏らすかのごとぱつと輝いたが、それも今は消えて、冷う吹き來る北風と共に暗黑は次第に自分に迫つて來た。

あゝ、深山の落日、其景の如何に幽玄なることよ、自分はふと一夜をこゝに宿つて、計らずも二十年來一度接した事のない光景に憧憬るゝのであつた。

見よ屛風の樣な岩に北風を防いで、しんまりと建つて居る峠茶屋のその詩的なることを。

七十でもあらう、仙人の樣な白髮の老嫗が一束の薪を抱へて今更らしう寒さうには入ると、破れ障子がぼんやりと明るくなつて、折から烏が一羽鳴きもせずに飛んで行つた。

日はもうどんより暮れて、宛然一の大偉人が花々しかつた自分の過去を默想しながら、悠然とローマの廢墟に佇んで居るかの樣な大銀杏の、中程の枝には、恰度今はの際の優しい妹が、一旦閉ぢた其眼をもう一度今世の暇乞ひにちらりと見開いたそれの樣な三日月が、斜にかゝつてる、而て廣い〳〵眞黑の野には、さながら大な銀の蛇が今しも冬籠りの穴には入ると言つた樣な姿勢で、菊部川が横はつて居る。

『やあ戻つたぞ』と外から聲をかけながら、いきなり飛込んだのは此屋の息子でもあらう、ぴしやりと荒しう閉切つた障子の音は、きはめて物淋しい死んだ樣な山に響いて、反古ばりの丸窓には人の影が動いた。

（評）仙窟めきたる光景面白し空想を破つたる障子の響殊に面白し。

（地）

○はづれの家

下谷根岸一一五　太田秋津子

門邊の柳緑りに煙り、吹くとしもなき春風輕く柔かに高く瑠璃に澄める大空浮雲の影だになく、夜べの春雨

の行方や何處、うら〳〵と春闌の日影いと長閑なり。村はづれ杉の生垣環らせる茅葺の家、垣の中には櫻の今を盛りと咲亂れて垣に立掛けし張物板二枚、白き花びらは其上にも散り掛りつ。下には鷄の三四羽、落花を翼に乘せつゝ遊べり。傘干す門口、ゆら〳〵と陽炎立昇りて、待つ俥一輛、まばゆき春日に鏡の如く光れり。蹴込に燃え立つ緋の敷皮、夫れに腰掛けたる紺法被の車夫は、膝掛け腰に巻きて暖かき日影浴びつゝ心地好げに眠れり。何所よりか來し黃なる蝶の二つ、俥を圍りてもつれ舞ひ居たりしが、やがて傍なる菜の花畑の中に見えず成りつ。打霞む遠山。白雲たなびくは梢の花か。家の內よりは華やかなる笑聲洩れてさやかなる人の氣はひ、待たせたる俥の主にやあらむ。村の春、たゞ靜かに、聞ゆるは遠く牛の聲。

（評）小說の口繪にあるやうなる景色なり、俥をあり〳〵と描きたるが中心となりて面白し。

人

○ひと夜

茨城　櫻雲女史

置く霜寒き夜いたく更けぬ、話止絶しをわれふりむきて丸窓の小障子半ばひらくに、風もあらぬ夜、目のとどくところ霜白う、枝さし出でし梅、いまだ蕾なるが、黑き樹にこれのみは白う目立ちぬ。星寒う磨ぎ上げし眞玉のやう女神の頸玉ともなすべしや、ひと色も動くものなきこの霜夜に、ばさと音して飛びしは何と云ふ鳥ならむ。

君は、爪のまゝ、琴の前に高島田の頸たれて今の我が言身にしみてや、小さき胸を樣々の想像に惱ませ給ふ。黑髮漆のやう、つや〳〵と水も垂れなん、けは〳〵しさ、白粉は嫌ひと塗たまはねど、自からなるうるはしさ、紫に梅の白ぬき模樣の襟、今年十八のきみにいとふさひぬ、濃からぬはけ眉、長き睫、寒紅梅の唇かたく結ばれて、深靨の頰豐かに淡雪の今や今や解けぬべし、黑きつぶのやうなる瞳、淚のためにやいよゝ光をそへぬ。二つの袖琴の上に、ふぢ紫の君泣き伏し給ひぬ、かすかに泣き給ふ聲絃にひゞきて、千鳥の簪島田に、さゝとふるふもあはれや。

霜いよゝさえて、折からの野寺の鐘、凍るやうなるに開きし窓を閉づれば、いつ出でし月とや、やがて障子にうつる梅は墨繪のやう。人泣かせまつりし罪は吾れにあるなれ、慰めん言も今

は知らぬに、かたへの紙と筆とりあげて、古き世のうたた人の名など筆の行くまゝに、寒かりき、つらかりき、その灯影の二人のひと夜。

（評）物語そのものを寫さで物語の後を寫してその物語のいかなる物語なるかを想はしむる所に限り無き味あり。

秀逸

○春の川

信濃　野菊

散り行く花の運命をのせて、何處に行くか春の水。白、うす紅の花片をしづかに守つて、美しき人の頰にたゞよふ笑のやうなさゞ波をたてゝ、銀絲と白い芹の根を洗つて、もゝ草の花の香に醉ひつゝ、ねむつたやうに流れて行く春の里川を、自分は今、小舟に身をまかせて靜かに〳〵流れて行くのである。黄なる菜の花と靑き麥、その間をつぎ合はせた紅、白、紫のいろ〳〵の花、何とも云へぬ美しさに、魂は身をぬけ出てゝ、夢のやうな感にふけるのであつた。

古き〳〵其のむかし、人の子を住はすべく、此の地に色々のそなへつけをしあげた女神達が、祝ひの宴を開くべく、敷いたもうせん、あゝそれは此の、春の野であつたらう、其の時舞つた姫達が袖の衣の香は、今、我が髪のリボンに纏れて居た蝶となつたのであらう、雲雀のうたと小川のせゝらぎは、其の時の音樂の名殘りで、たなびきわたる霞は、惡魔をさけた幕であつたらう。その美はしい女神達が舞の中に、迷ひこんだやうな自分は、涼しい風を送る柳の堤に來て我にかへつて空を見あげた。幾筋となく垂れて居るみどりの絲は風にゆら〳〵水の面にその先をつけて居る。「岸の柳のかげきよく……」あまりの心地よさに思はず小聲にうたひながら、こゝをぬけると、早や近く見える桃の宿、今日我が問ふべき友の家である。

（評）神話風のところ面白し。

○半日の畑打

佐渡　玉置とみ子

妾は今日麥の中打をなすべく、裏畑へ出たのである。暖かい春の日を背に浴びながら鍬を下して居ると、藪かげの方に當つて俄然小學校の點鐘の音がした。すると今までガヤ〳〵騷いで居た小供の聲が一時に靜まり返つて、あとはひつそりとした。それと同時に藪鶯の聲がしはじめた。思ひ出しくり出し、頻りに啼いて居る。恰も妾を慰めて呉れるかのやう。暫くすると、試驗休みで家に居る今年中學一年の弟が後から來て。

「姉さんこんな所に一人で畑打つて居てさびしくないかね！」と問ひかけた。

『あゝわたしちつとも寂しくないの、反つて面白いのだよ』

『それでは夜、本よむのとどつちが面白いの。』

これは妾が、とある暇には雜誌など讀んで樂みにする事を知つて居る爲め、かくは問うたのである。

『晝は野原へ出て働き夜はランプの下で本よむのがどつちも面白いわ。芳さんはどつちがよいかね。』

『僕はソンナ事は皆きらひよ、テニスと歌留多が一番すきだ。』

あまりその無邪氣なのに、妾は思はず微笑を洩らした。

『アヽ暑くなつた。芳さん好い子だから、笠もて來ておくれ』と頼むと『ヨシ』と言ひすてゝヒタ走りに家の方へ走つて行つて、右の手に紅い紐の菅笠を、左の手にラッケットを持つて來た。笠を手に渡すと、「これから友達の所へ遊びに行つて來るよ」と言うて、霞こめたる杉の並木の方へと去つた。妾は其の愛らしき後姿を見送りつゝ、妾にはなぜあんな樂しい時代が無かつたのであらうと、そゞろに淋しい感に打たれた。

それからまた相變らずコツ／＼と中打をつゞけて居たが、あまりつかれたので暫く畦の芝生に腰を下して休んで居ると、二すぢ三すぢの白い煙が靜かに立ち上つて、あるかないかの風に低うなびいて居る。思へばモー午餉の仕度をせねばならぬ頃と、いそいで足洗ふべく池の端へと來た、落ち椿は一面に池の面を埋めて、足洗ふべき隙もないやう。手もて靜かに、水をかきわくれば水は波紋を作つて、ゆたり／＼と對うの岸へ打ちよせて居る。日當の水の暖う、足を洗ふも心地よい。白い胡蝶が二三羽、もつれ／＼て前になり、後になり、妾につき添ふ風情が、言ひしれずなつかしかつた。

（評）意味ありげなる生活。

朝の豆腐賣り（賞外）



宮崎縣下北方　澤田きく子

○墓參

三河　澤田つま子

「褄さん、似合まして?」……洗ひ髮の束髮を母君の仰せのまゝ丸髷に結ひ更へ給ひて、銘仙のお召に紋縮緬の羽織いと映りよう、撫肩すらりとせし後姿見せ

て窓の戸に凭り給へる姉樣の、お麗しさは一しほ引立て見えたまへど、描ける如き美しの眉顰みて、凉しきお瞳の色も曇り勝に、兎角沈みたまへるみ氣色は、堪へぬ歎と悲しみの優しき柔胸に溢るればにやあらん。「眞に良く似合まして！」とわれも寂しき片笑作りて應へまつれば、今更に「似合とて誰に見せん心盡ぞ」と早俯居して泌々お憂はしき御面持に、われも消えも失せたき心地して、涙含まれぬ。

哀れ人は花見よ櫻狩よと春面白う打興じぬる此頃を、如何なれば吾家のみか許り悲しく寂しき氣に滿てるならん。次なる部屋には、白き位牌と縫り給へる兄君のみ前に、木魚叩きて餘念なう廻向ましませる母君の、老の皺枯れに、いとゞ幽かなる覺束なげの念佛の聲、胸に泌むるやう。

いてと誘ひ給へるまゝ、さらばと共に相並びて、白き紙緒の野草履穿ち、遠からねば爺がもて行く手桶の花を受取りて、妾にと宣ふ姉樣のみ手拂ひつゝ前に立てば、籬に咲ける八重櫻の五片六片霏々と零れて桶な水に漂へるに、まだ嫩芽小さき櫟の枝の葉を洩れて、春の空行く白雲の映れるも哀れ深しや。

紅椿のほろ／＼と散る藪添の逕を拔けて、小川を渡りて、菜の花咲續く丘を越えて、漸辿りつける淨專寺の山門、持ちたる花の淋しさには憧れよる蝶もあらねど閼伽井汲む手桶の上に木槿の花の亂れては、先づ涙こそ湧き出づれ。古りし本堂の庭なる鐘樓の右は墓塲の細逕、五彩美しき八千草履みてぐるり廻れば、大なる碑小なる卒塔婆、所々にはまだ新しの土饅頭見えて、雨に霑れたる造花、淡らに消えし位牌の文字などいと憐に、此所ぞ懷しき兄君のみ墓所ぞと詣づる新塚に、香焚きて花捧げて、扨額付けば悲しき想泉と小さき胸によせて、唯暫時を祈念の頭ももたげ得ざりしが。さても渾身の血を相傾けし愛の囁のまだ新しう跳れる姉樣のみ心の中やいかならむ、廿の花はまだ咲かざるに色更へぬ松の綠の堅き決心もて、一世の春は去れども再び此家は去らじの誓に、母君の願も却けて、身は初初しい丸髷姿の、あはれまだうら若き奥樣風！

思はず犇と抱き合ひて、二人は止め度なき涙に咽びぬ。

（評）わざとらしき節無きにあらず叙景はよし。

○逝く春

山城　幸山くも子

五月一日

實に春は既に逝けりとや、垣根越しの山櫻も色なく、床の白桃も萎れたり。此頃はたゞ稀れらになりし鶯のたま／＼訪ひて來ぬらしき羽音も、梅の若葉の綠濃きに驚きてや、寒竹の若葉を搖りて一聲二聲、やがて去りぬ。老いし哀の聲、枕に響けば姉上の病や又重らむに、寧ろ鳴かずもあれ、妾は駒鳥を愛す。

畫すぎの日陰暖に、姉上も安く睡りませり、夢懲なす

落花も無かれと、そと持ち出でゝ山吹を、柳の若葉と生けかへ參らす、寒き日は枕に離れず伽し奉りし『玉』（猫）の勞れしにや、暖かさに日向に寢たり。源藏目の下二尺もあらんずる大鯉と稍小なると二尾持て來て與るゝ、草の餅ついて馳走す。「淀、百合あたり今年は鯉多し、乳母もいたく老いて、徒足にては五里の道のくるしけれど、船便あれば一度は上り來べしと云ひ暮し居れり」などいふ、舟濱よりは一里、定助に俥引かせて迎ひにやらんにと約束す。宿りもせで製茶に急しければと去る。烏影の西に流れて夕雲は軒に迫りぬ。鐘の音に姉上は覺め給ひけらし、絶え入る如くむせ給ふ。大なるを料理して味噌汁にして參らす、散りにし花を吸へばか、春は鯉の美味しきもうら悲し。と、又泣入り給ふ。牛乳二合計り、鯉は箸もつけ給はで。燈暗うして只涙を流し給ふ、枕にし給ふは藤村の落梅集と夜雨の花守なり。鬱ぎ給ふ折いつも讀み慰めまゐらす伊普蘇物語など取り出せば、否よと止め給ひて、又さめ〴〵と泣き給ふ。

孤子吾爰らあたりに杖とめて眺めて過ん父島母島。故萩の舎先生の歌よと身にしみて哀なるに行燈に背き添へ給ひしを仰ぎて――、せめて名にだに懷しき父島母島もあらば嬉しかる可し、孤子姉妹、幸は神に奪はれ終んぬと又泣きぬ、一人は病みて危し。

（評）この筆つき今少し熟しなば氣味よき文章とならむ。

○逝春小記

深川　朴　蓼　子

一

暖かき風そよ〳〵と、晝頃より雨となりぬ。こや花見返りの人なるらん、雨の中物ともせず腰にしたる作り物の朱鞘に落花の名殘り二三片、袂にもかつらの大髷にも二三片づゝ、瓢簞腰に鼻唄の口調も亂れて大跗を右にはた左に千鳥足おぼつかなげに通り行きけるが、これや春逝く名殘りかとぞ只何とはなしに慕はしき心地せられける。

二

夕暮なりけり。歌の會の歸るさ、ふとの興に廻り道して隅田堤に遊びつ、落花紛々雪と紛ふべく、堤の花か、花の堤か、とある石碑の側にいこひしばらく、花片を糸もて通したるが捨ててあるを見て詩興やむなく筆とりて歌すら〳〵。花輪に結ひて籠に流しやりぬ。

三

風一陣、連翹の露に映る雨後の月をはら〳〵とこぼして過ぎぬ。

會我物語り讀む聲かすかに小窓より洩れて行燈の光り

庭一面に流れて折から蝶一羽何にか驚きしはた〳〵と飛び立ちて飛び失せぬ。あゝ此蝶そも此蝶に從ひて春は暮れ行くならじやと幻想やむなし。

(評) 美しき中に深き所ありてうれし。

○病院の一夜

札幌　水上美惠子

雨そぼ降る宵なりき、あまりの徒然なるまゝ都なる兄が許に細々と文認めて、これのみは身に相應はぬ小さき金時計そと出だし見れば早や十一時なり。室內を顧れば年老いし取締の君や、赤十字社七回卒業生の今は當病院に雇はれ給へる毛利の君、助手の加藤樣も皆眠つて、微かに寢息のみ閒なる室に響きぬ、さらば我も寐ねむと靜かに寢臺に橫はれば、それやこれやと想は馳せてなか〳〵に睡られず、去年の此頃は都に在りて樂しく文の窓に罪もなう睦みけるを、運命の神は我に急劇の變化を與へつ、赤十字社に籍を置く身とはなりぬ。言はれぬ悲哀しみのありての上とはいへさる事は色にも出さず、たゞ忠實に看護の道學ぶなる。寄宿より日每に通ひけるを今日よりは責任重く此處六號傳染病室附となり實地見習のため病院に起臥する事となりぬ。それにしても毛利の君年は廿四となむ容姿といひ行ひといひ殊に文事にも秀で給へるに嫁にはゆかで女盛を白衣に送り玉ふは解し得ず、それには何か故あらむなど、我が身に較べて思ふともなく、夢に入りぬ。

少焉交睫みしころ、戶叩くものあるに目覺めて起き出て戶開くれば腸窒扶斯にて病める中學生とやらの母なる人にて、いと熱のありて囈語のみ言ひて苦悶む故醫士の君煩したくてと乞はる、暫時待ち玉へと我れは帽冠ぶりて長き廊下に出づれば、夜は更けたり四隣寂として我れの跫音のみ高く響く、雨は小止みたれども春の夜の天曇りて十五夜といふに月朧なり。行く道すがらあらぬ事のみ思ひ出されて漫ろ身に寒さ覺えつ。電燈の光はいと凄く瞬きて遙彼方の精神病室にては何やら罵る聲の聞ゆ。我は醫士の君を起こして診察を乞ひそれより氷室に行き氷を出し來り患者の頭を冷やして、再び床に就きしは午前二時にてありき。

(評) 何をか思ひ給ふとあはれなり。

○神都の春

津市　松尾はな子

△御文庫の櫻

蔚乎として高く聳ゆる松杉の間を縫うて、尊き外宮の御靈地を辭して振返つて見ると早や奧の高倉山の木の間から紫色の淡霞が冉々と湧いて來る。其色が何となく崇高な感を起させる。麓を縫うて御文庫のやゝ朽ち

かゝつた山間を入ると先づ目に入るは幹、枝共に奇しき古木の櫻が今を盛りと七重八重に咲亂れて早や其梢に十三日の宵月が薄すりと匂うて居る。茶店に憩うてふと頭上の花を見上げた時ほろ〳〵とこぼれた花片は茶の中にも浮いた後への田面には蛙が「ころ〳〵」と鳴く。私は恍惚とした。

△神苑の櫻

五十鈴川の清う澄んだ流れを控へて尊き神のおはします靈池も今丁度春の色に滿ち滿ちて居る。午下りの日蔭ぼか〳〵と、白い雲がふうわりと凝つて流れず、靜かな嚴かな中に咲いた櫻は今を盛りと咲亂れてさらさらと音づれる柔かな風に雪かと計り散り亂れる。と清しい香が何處からともなく流れるのである。

あゝ神苑の櫻艶麗ならずして却つて崇高な感が起る。私は襟を正した。

△清盛堤の櫻

今にもこぼれさうであつた花曇りの空は果して糸の様な細雨を降らして來た。宮川の清盛堤に着いた時は折からの雨に人も散つて却つて靜閑であつた。

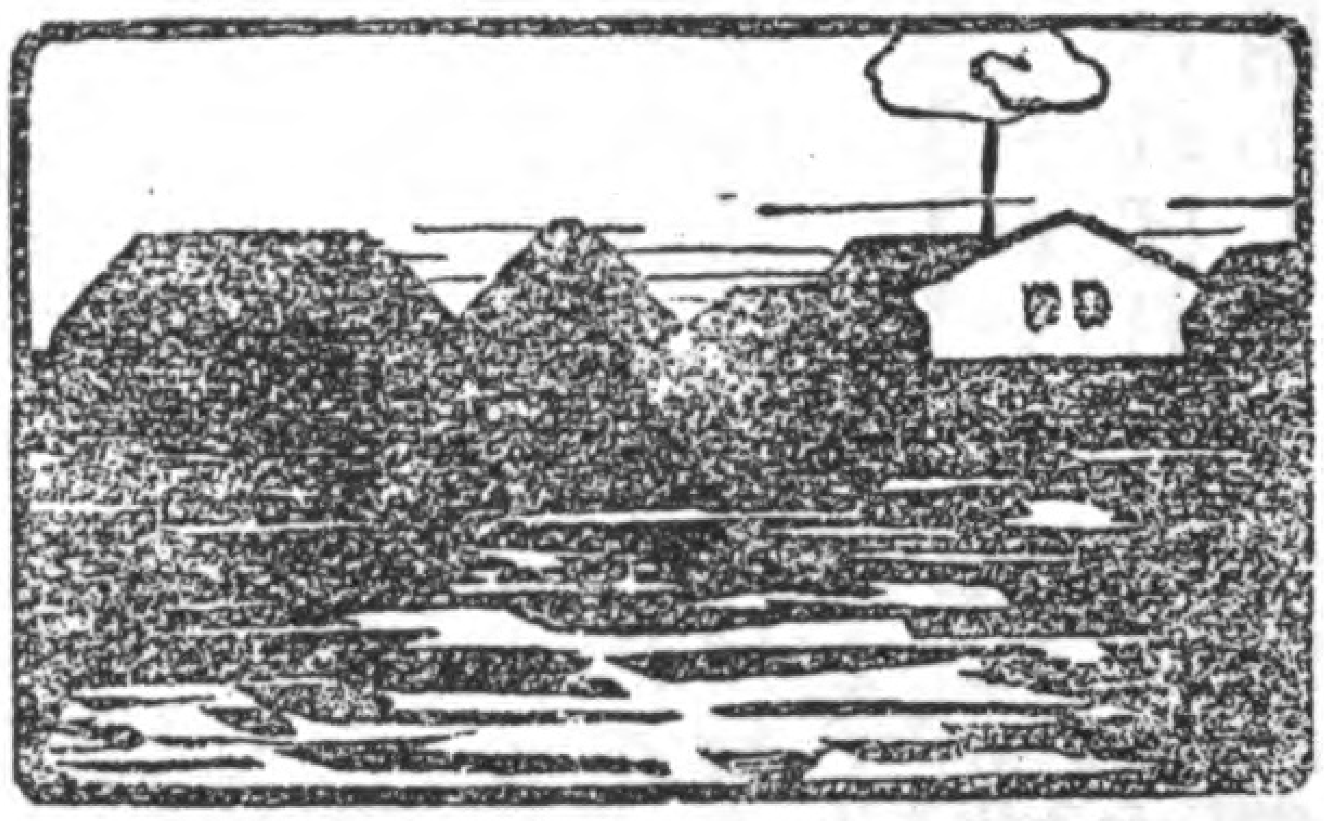
雲か霞かと計り五町の堤上に咲き滿た櫻花の上には白雲凝つて動かず、折からの雨にはら〳〵とこぼれる花吹雪に愛らしい小犬が戯れて居る。河原を縫うて下る筏の上にも又花を散して棹さす若者の悠やかな欸乃。

「わしが可愛いあのお花つ子、
　衣洗ふ手は雪より白い

あゝ花は水あつて趣を添へ、水は花あつて眺めも一入てある。

（評）崇高は甚だ寫し難きものなり。

朝の川岸（賞外）



新潟安田驛　上野志摩子

○詩趣の四季

木曾の邊　渡邊馨子

『一』

緋縅の鎧着たる若武者、山巓に立つて落花の下に、今暮れて行く紫ゆる夕雲の彼方、銀鎌に似たる月仰ぎて合掌瞑目したり、風なきに、一陣散りしきる花の吹雪。

『二』

評判の糸屋の娘、流行の浴衣いと淑やかに、楚々として吹く夕風に裾を吹かせて、水潺湲と流るゝいさゝ川の竹林に、可愛ゆき弟の線香煙火に打興じて笑ひさゞめける、涼し。

『三』

遠く、低く細く微に響く砧の聲に、母戀しやと近松の世話ものに泣きて欄干に寄る哀れ、禿。

『四』

夜は更けて冴えし冬の月、星稀に風寒く霜深き夜、訪

ひ來りし老大工と、火鉢かこみて、身の上がたり靜かに、外には淋し、からんころんと一人斷橋の歸りの下駄の音。

(評) 二が最もよきか。

○春雨

下總　伊藤春溪子

曉の空に立ちこめし霞、其儘晴れやらで打くもりぬるに片山陰の林がくれ淋しげに鳴きし山鳩の聲も打絶えて山より枯枝拾うて歸る翁は今日は雨模様となりぬ、降り出ぬ間にとく歸るべしとて只管家路を急ぐめり、やがて肌寒き山風さと吹き來て軒端の櫻花二片三片空に飛ぶと見る内に早やはら〳〵と落ち來りぬあな生憎の雨と打仰ぎ眺むれば、かきくらしたる雲色晴れて行くべきけしきなし。

降り暮らし日數ふる程に寂しさは秋にも増して哀れいと深く覺ゆるに山家の庵は誰とて訪ふ者もなければ打語はん友もなく獨閉ぢこもりて終日只徒然と明かしくらすばかりなり。

庭の櫻も降る雨の露にや濕ひけむ蕾勝ちなりし梢一しほ麗はしう咲き亂れて、おもげに見ゆる花の姿朝日に匂ひたるあてやかさに引きかへいみじうやつれたり、枝に滴る花の雫の零れて染めるにや色にも似ず垣根の若草いや生ひに萠え出てゝ青み渡りたるこそ常に見馴れたる庭ながら紛るゝ許いとをかしけれ。

遠山の峯は煙に消え失せて近き山の端はむら立つ松の梢より打つゞきて立ちこめたる霞に影おぼろなる樣、薄墨もて描きたる畵を見る心地して言ひしらずをかしきに、谷の小川は水嵩や增さりけむ岸なる水車の響きのみぞいとゞ音たかく聞ゆる。

雨の中よりひゞく山寺の鐘の音夕べ淋しく告げ渡れど塒へ急ぐ鳥もなく、いと物寂しげに暮れ行けば軒の玉水音しめやかに、香の煙ゆかしく上る閨の中まで聞え來て、靜けさ實にいはん方なし、

かゝる雨降る宵にこそ琴かき鳴らさんは心ゆくべけれと思へど、琴もなく又彈くべき手持たぬを如何にせむ更け行く程に昨日今日鳴き初めたる門田の蛙の聲遠く聞えて此頃鶯の塒やいかにと流石に思ひぞやらるゝ。折しも花を後にして歸る雁の聲悲しく鳴き渡るに心ともなく立ち上りて窓の戸押せば漸う雨はやみて空にまよふ村雲の隙より雁の影ならぬ十日許の月さすがに春の心もわすれず朧にあらはれたる此頃の徒然も打忘るるばかりいみじうおかしうなむ。

(評) 中心の無き心地するはいかに。

○ふしぎ

秋田　松田せい子

「母ちやん凧を」
坊ちやんが二枚半の繪凧を持ちこんだ。
「母ちやん羽子板……」
お孃さんが美しい羽子板を袖の上にのせた。
「奥さんこれを薪屋さんから」
お釜どんが手拭らしいのを差し出す。
「奥さん、斯樣な物を」
書生がハンケチらしいのを立ちながら突き出す。
是等は凡て奥さんの後からて、
「奥さんどうも有難うございます」
とは車夫が、正面よりの言葉で、法被に股引がちやんと重なつたまゝである。
「おやそれは、お父さんにお禮を申し上げるのですよ」
之れは坊ちやん、とお孃さんに云つた言葉で、
「皆なもね」
之れは其他の人に云つた言葉だ。
此の時側から、
「奥さん、旦那さんからこれを頂戴いたしました」
と、美しい簪と半襟とをお目にかけたのは、愛くるしい小間使である。
「ふん左樣かえ」
いとも無愛想な返辭だ。之れが奥さんが小間使に云つた言葉である。旦那さんにお禮を申上げろとは被仰らない。不思議なことだ。

（評）あからさまならぬがよし。

○歸省

下野　新井翠子

才も智もない自分の身でよく一度の失敗もなく今までになつたものだ。考へて見ると不思議でたまらない。今度の卒業試驗も無難に過ぎた。自分は鬼の首取つた樣な心地で、いそ〳〵と歸つて來たのである。久しぶりで見る故郷の山河草木、何を見るも懷しさで胸一杯、何となく淚ぐまれるのである。停車場まで出迎ひに來て吳れた五平老爺に荷物を脊負はして、袴の裾輕く春草を踏んで、行く〳〵老爺が話す故郷の出來事を聞きながら、いつしか村の入口なる渡場まで來たのである。

もう一足で家の門だ、父樣は什麼う、母樣は——屹度母樣は門口に立つてニコ〳〵していらつしやるだらう、妹は駈けだして來て姉樣と縋り付くであらう、さうして末の弟は直に御土產は？と聞くであらう、さうさう御土產は鞄の中にある筈、リボンと簪は妹に、空氣銃と繪草紙は弟に、ホヽヽまーどんなに嬉ぶだらう。ギッチ〳〵と櫓を押して來る渡守。日はもう黃昏れて、鎭守樣の森からは小鳥の聲が聞えた。四邊を見廻せば夕霧に蔽れたる川添柳、花の野末。皆思出の種である。まだ白う光つて居る西の空には、雲が夢の樣に

薄れてしまつて、春風がそよ〳〵と吹き出した。觀音寺で淋しくつき出した入相の鐘は、大氣の中を傳つて殷々と響いた時、老爺と向き合つて自分は舟の中で立つて居た。外に乘合の人もない。

『出船ますだ―』

渡守の聲と共は船は河心に進んで行く。ギーッギーッ、十日の月はもう中空に薄く現れて來て、其從者の樣な星がキラ〳〵と水に。平な川の流は白銀の樣に輝いて來ると、河下から白帆が二ッ三ッ。淸い欸乃が水を渡つてゆく。

『主とな―……………別れて松原行けば……………松のな―…………露やら淚やら……………』

(評) いかに嬉しかりけむ。

○田舎の祝賀會

土佐　石川潔子

長閑なる春の日は、霞を破りて東の空に昇れり。うらゝかな春の野の、胡蝶の夢驚かす銀鈴の音に、祝賀會は開かれたり。

會場は綠の布しきつめし如き、鏡野の片ほとり、椿が丘に建てられし小學校には、前を流るゝ物部川の淸流は、玉をころばすごとき音立てつ、中流には魚や躍るらん。

兵事會長の祝詞と凱旋軍人の答詞ありて式は終り、直に餘興にうつれり。

白銀に似たる凧の尾は、春風にそよぎて、暖かなる日の光にはゆるも美しく、紀念木引行く婦人會員のかむる揃ひの手拭の色はなやかなり。

櫻花爛漫たるもと、紅白の幔幕張りたるは、彌生流及び楠流の劍舞場にて、勇ましき白刄の光と、潔く散る櫻花の色、げによき配合や、彼方の柳の絲の間をもるゝ竹刀の音、面小手の掛け聲は、軍人の心も忍はれてゆかしく、み空に高くごーと轟く煙火、祝砲の音は川をこえて廣き野邊渡り行く。庭にさゝめくは、福引福飛の滑稽に腹をかゝゆる女の聲、さては酒宴の開かれて、笑聲は堂を動かすばかり。

朧にかすむ春の宵、吹き起る夜嵐に、狂火のいやが上にくるうも面白く凱旋軍人萬歲祝賀會萬歲の聲に紅白靑の三色の灯は、竿頭に飜る日章旗のもとに富士形につられぬ。

やがて萬歲聲裡に散りゆく人の花のうつくしや。

(四月四日日記の一節)

(評) 筆つき幼なけれどまづはよく寫されたり。

佐々木信綱先生選

和歌

特別寄書

○ 殘雪女

亂れ髪の狂女のおもを白く吹きて

秋風蘆のやみにまぎるゝ

【評】鬼氣人を襲ふ心地す。

特別寄書

○ 弘前市品川町十六 佐野光子

母、いますみ空に響く鐘の音に

撞く手をとめて物おもふかな

【評】讀む人の胸にも響く歌。

天

○ 備後 池田華月子

櫻花花咲きみてる小島へと

繪日傘のせて行く春の舟

【評】着想すぐれたり上句原作濃き紅の櫻にけぶろ美しき島へとあり。筆かへたれど猶おもしろからず。

地

○ 上總國長生郡新治村桂 小河柳子

夕暮を語る人なき溫泉の宿の

青葉若葉に雨細う降る

【評】やすらかなる歌。

人

○ 陸前國本吉郡松岩村 尾形千代子

ゆく春やわがうつゝなき思ひのせて

流るゝごとき野川見しかな

【評】結句いまだし。

秀逸

○ 常陸 花舟女史

春くるゝ河添小道たそがれて

閉しゝ茶屋に花吹雪する

○かげ法師ながくつめたく地になげて月をながめて泣く人やたれ　淺草　岩本よし子

○幸うすく戀も破れし世をすねて春にそむきて經よむ少女　駿河　秋子

○少女子のまゝごとすなる軒の端にやまぶき咲きて日はたけにけり　美濃　中島きく子

○春風に大和路行けばこゝかしこ宮もわらやも梅の花さく　福岡　古屋ちか子

○音もなく椿くづるゝ雨の夕とぼそに迫る晩の鐘かな　京都　片岡敏子

○逝きし子に面影似たる京人形其名負はして又も呼びぬる　秋田　黒丸登美子

○梅さけるかたやまかげのわかれ道ためらひをればうぐひすの鳴く　美濃　中島よし子

○兄君の都語りに小夜更けて窓の青葉に雨細う降る　石狩　久保たけ子

○長老と歌がたりする南椽に春雨細う日はたそがれぬ　弘前　佐野翠子

○新しく小さき墓に人知れず花をたむけて泣く夕べかな　下總　伊藤みち子

○亡き稚子を野邊に送りて歸るさの袖にこぼるゝ白萩のはな　下谷　太田秋津子

○ゆら／＼と陽炎昇る畷道菜の花の末に富士の山見る　信濃　とき子

○兄君が臨終のみうた胸に秘めて思出多き春の譜に泣く　德島　住友時子

○堀あれて尾花さびしき城あとにたゝずむ人の何もの思ふ　千葉　鈴木文子

○菜の花のつゞく彼方に不二低く蝴蝶むれとぶ春の野邊かな　上毛　浦子女史

○鶯の枝うつりする影さして南の窓に春暖かき　伊賀　菊山かね子

○野の石にかきてのこさん歌もあらず

◎君と別るゝ菜の花の路
福岡 雑賀てふい

◎ほろ／＼と瓶の緋牡丹くづれ落ちて
わが歌なりぬ雨細きゆふべ
廣島 荻村女史

◎僧一人座禪に耽る山寺の
白桃散りて夕日冷たき
島根 原溪流女史

◎青葉かげ旅僧眠る岩清水
盤還ひ上る破笠の上に
讃岐 紫菫女史

◎一むらの小鳥老木の松に入りて
夕立くらし湖添の道
新潟 岩本芳子

◎森黒うもやはましろき野の曉に
神に似し子の羊追行く
奈良 藤田せい子

◎帛を裂く繪師が怒のとけやらで
書堂に近くなく子規
水野蝶子

◎家出せし兄は歸らず夜な／＼に
一人思ふよ島の磯邊に
大分 とめ女

羊呼ぶわらはの笛の低くして
牧場靜かに日は暮れんとす

大祭日（賞外）　豐前岡崎　中村直子



◎最上川藍のやうなるをちかたや松の木の間に白帆見る宿
酒田 阿部花子

◎よどむかと見ゆる小川の水の面にあらしにつれて櫻ちるなり
福岡 圭枝子

◎紅梅の花さく夕べ里道に語らふ人の京訛りかな
美濃 内藤みち子

◎さらばよと出で行く妹を送る門二片三片梅の花散る
千葉 林貇子

◎すゝまなむ文のまさ路をたどりつゝ桂しげれる千代の庭まで
大阪 貫島春子

◎すみれつむ里の少女子遠う見えてにほひ先立つ春の若草
眞佐子

◎のどかにも霞そわたる春日野に鹿の子遊べる樣のやさしき
奈良 松島千代子

武夫が歌ひし花は今もなほみだれて落つる春風の雪
勿來關 本鄕朝井松子

のどかなる野邊に草はむ駒の背に二ひら三ひら櫻花散る
春駒 志摩立神善子

◎友よびてともに眺めん我が庭のほゝ笑みそめし椛の初花
鳥取 政子

◎姉君のこひしき姿出し見てしのび音もらす秋の夜の月
芝 山本はる子

◎音もなく緋桃にそゝぐ夜の雨に秘めし手箱の紐ときて見ぬ
滋賀 辰井孪瑤女

◎眞白なる駒の一群嘶ぎぬ桃の牧場に春雨ふる日
越後 菊野女史

友を思ひて　　大坂　松本德惠
淋しさに君や如何にと忍ばれつ眺むる空に春雨の降る

○　　紀伊　今井歡子
主なきの椽先しげく梅さきて慰顏に風かほるなり

○　　備中　佐藤芳子
いのちをばこよひ限りと定めつゝ船をしづめしいさをたかしも

○　　伊賀　星百合子
夜もすがらすみこしかたの偲ばれて衣手淋し冬の夜の月

歸雁　　札幌　渡邊はや子
秋にきて春かへりゆく雁がれはいづこの花にちぎりおきけん

春月　　筑前　家中ちよ子
おぼろ夜の峯の櫻の花ぐもり昔に似たる春の夜の月

○　　陸中　阿部とみ子
大佛が肩に夕日の影さして櫻散るなり奈良の寺々

○　　澁谷　みどり
みとりするわれも病におかされぬなやめる人をいかに癒やさん

○　　小石川　吉田あや子
誰が袖に秘めしかをりか春風の名殘ほのかにわれをかすめぬ

○　　千葉　內藤みよし
そよ／＼と吹き來る風もようやくに春風らしく思はれにけり

○　　栗山讃　越川さき子
日は落ちて四のみ空はあからみて色鬘うつる春の夕川

舟遊　　京都　上田里子
癸づるによき月出てし夏の夜を潮にまかせし二人の舟よ

春雨　　武藏　大木歌子
菜の花にねむる胡蝶の夢の間にいつか盛りて春雨のふる

猫　　川越　中村礪子
庭に舞ふ蝶をおふとてをりたてばもすそにからむ愛らしの猫

○　　石狩　清子
春やゆく堤のさくら色うすう袂にちるなりおぼろ月夜に

○　　淺草　大沼さゆり
つよき手もなへ衰へり此の夕べ歸りてくまん妻のえがほに

○　　京橋　若松みどり子
春ぞよと風吹くけさの嵐山川の瀨白う花のながるゝ

山家立春　　千葉　岩澤かれ子
たつ春もわかぬ深山にすみなれゝ今日鶯の初音にぞしる

○　　上總　大矢きよ子
夕煙岸のとま屋にたちそめて夜闇にみゆるいさりびのかげ

○　　千葉　鈴木園子
夕榮を名殘りおしうも眺めゐて破れし衣に花散りかゝる

○　　大坂　ひろ子
君思ふ歌成らずして夜は更けて一人もだゆる燈火のもと

○　　攝津　和久加津子
ほろ／＼と椿こぼるゝ山寺の夕庭寒く雨ふり出でぬ

○　　下總　川奈部たか子
大臣のみ庭にさきし山吹の灯にはゆる宵の雨哉

○　　大坂　藤野孝子
何事も少さきむれに秘むる身の親しく語る友の有らばや

○　　信濃　清水りん子
げに戀ははかなきものと少女子が腕こまぬげば不如歸啼く

鶯　　陸前　大浦まつ子
冬過ぎて春來にけりと鶯の今朝も來て鳴く梅が小枝に

○　　鹿兒島　今給黎しげ子
長閑なる春の光りと諸共に君の歸りを聞くぞうれしき

○　　羽前　みどり子
小川べにすだく蛙の聲々に日はかたぶきて月おぼろなり

春野　　武藏　青柳彌生子
春の野や三千の駿馬放ちやりて朝夕のいななぎ聽かむ

錦江灣夕景　　鹿兒島　藤野冬子
あかねさす夕日をうけて入る舟のかず／＼見ゆる錦江の海

○　　むらさき
妹の泣寢入りたる窓のもとのくづれしかべにすもゝ花ちる

下關　宮原みや子

○

兄君の好みたまひし花すみれつみて送らむ文にはさみて
川越　橋本花登子

櫻

うれしくも綻びかけし櫻ばなはや知らせまし友のもとまで
水戸　白梅子

卯花

朝戸出にまづ打見れば垣つゞき雪かとばかりまがふ卯の花
宮崎　遊四女史

○

菫つみいづこに花の宿とはん野末にひゞく鐘もあはれに
麴町　熊田ふみ子

○

野の朝は小鳥のうたに露消えて小草々々は淺みどりせり
茨城　前原かすみ子

○

散らぬまにいざやたむけん山櫻花とちりにし背子がみはかに
羽後　前田ひさ子

○

少女子の文よむまどにちら〳〵とさくら花ちる春の夕ぐれ
福岡　市川てつ子

○

めぐり來し大和名どころかぞへては人うら若し木曾の宿
宇都宮　金澤保子

○

都なる友やいかにと眺むればいとなつかしき雁の玉章
豐後　泰泉子

○

雨の日に二人ものせし去年の春を花に言はする友なつかしき
信濃　延川としえ

春月

見渡せば磯の松原風たえて波間にうつる月も霞めり
大分　すみれ

○

いたつきに春雨の音をきく夕もの哀れにも泣くほとゝぎす
西多摩　坂本貞子

○

ふしてより思ひなかばにめぐらせば行きにし君の跡ぞ戀しき
上毛　十九子

○

秋の野に咲くや山とのをみなへしすがたやさしみおきてみるかも
下總　武田たき子

○

筑波根の霞の帶を一重して霞の中に雲雀なくなり
茨城　秋山隆子

○

さびしみの世の幸薄くうらぶれて縮委いだく胸のつめたき
佐渡　玉置とみ子

○

柳ちる秋を古沼の夕雨に流人泣けとや鐘の音むせぶ
豐多摩　太田紫青

○

繁りあふ若葉の中に鳴く鳥の聲しめやかに五月雨ぞ降る
神戸　宮崎柳子

暮春

かはりなき春は昔の色いてゝ妹がおくつき櫻花咲く
丹波　ひろ子

盛花

たま〳〵にこぼれてちるは胡蝶とも思ひなさるゝ花ざかりかな
仙臺　南もり子

○

鐘の音は麓の里へゆるうひゞき朝日にかゞろ菜の花の露
上毛　亂砂すみれ

○

人ならば笠かさましを春雨にぬれつゝ咲ける海棠の花
碓氷　礒雅井蓮子

○

菜の花を左にみつゝ江を右に堤づたひに乳母が宿訪ふ
武藏　木村八重子

○

櫻花時におくれてひらきなば盛りも春の名殘りとぞ思ふ
秋田　鮎川耳子

○

もろともに學びし年も久方の月の桂を手折る嬉しさ
和歌山　[illegible]嶺

○

忍ぶればしのばれやせん君が身はおぼろ月夜の山櫻花
駿河　かほる

落花

こゝろなくまたもむれきぬつばくらめ吉野の花はあすかちるらん
周防　石田八重子

○

春の潮ほの紫の霧となりて霞む小島の人なつかしき
大坂　金森よしえ

○

萬歲の聲も悲しく聞ゆらんかへらぬ友のつまの心は
岩代　三浦きち子

○

春草の花のいろ〳〵取りあつめはなれの窓に一日紬を習ふ
靜岡　すみれ子

○

吹く風に髮なぶらせて少女子が早苗取るなり小山田の里

○　豊後　いづみ子
寫眞にそと接吻けてゆくりなく君が御名よぶ我おろかしき
○　長野　山崎美喜代
集ひ居る童に花の里訪へば黄蝶白蝶狂ふ邊りと
○　東京　丹後芳子
女夫波打つや皷の音につれて唄ふ千鳥の聲面白き
○　秋田　黒丸登美子
日ごと／＼心つくしてつみおけば塵もこがねの山となるべく
○　上總　田村瀧子
春の夜の櫻馬路おぼろ月更けて佩刀擦るてふ荒法師ゆく
○　磐城　横山とめ子
夕立の名殘の雲の行く方や吾が友ゐます東の空に
○　陸前　佐々木櫻綠女
思ひ出せば一昔なる庭ざくら忍んで君を待ちし櫻も
○　長崎　つた子
若菜つむ時は來にけり昨日今日我古里の友ぞ戀しき
○　筑後　古賀まきの
朝綠野べの霞はつゝめどもこぼれて匂ふ山櫻かな
○　常陸　板橋あい子
幾たびかよせてかへらぬ年波の春をむかへて夢おぼろなり
○　常陸　大和田消子
窓開けて草摘む少女聲細し夕日照そふ里川の堤
○　佐賀　篠島かずほ
行く先も同じ旅なり梅の花匂へる宿に今一夜寐む
○　木曾　渡邊かせき子
もの買ひに女房下山の鬘の雨太古めきしよ閑古鳥なく
○　神田　關口しん子
たらちねの親子はらからまどゐして花見る許り嬉しきはなし
○　雪女
小傘さす狐もあらばほめましと夕うす月夜尾花野かへる
○　能登　新保雪枝
春未だ淺き野末に若菜つむ袂にすゞし春の朝風
○　平城　白藤女史
君さりて一人わがもる花園の草にくれゆく春の夢うき
○　千葉　天美桂花女
さきつゞく菜の花遠く蝶舞ひて麥畑十里春の風吹く
池上櫻　石見　小松原鶴子
咲く花の池の鏡にうつろひて底まで匂ふ庭櫻哉
○　上野　曉奈美子
柴の戸を出れば曠き野べにして花さまざまの色を吹く風
○　下野　梅子
かきならす琴の手やめてうちみれば松にやどれる春の夜の月
○　羽後　奈良入重子
月影も朧に成りぬ明日は又雨とやならん初蛙なく
春山里　川越　すみれ子
西山に雪を見ながら野に山にくさつみあそぶ山里の春
梅　麹町　草村の孤兒
鶯の聲も長閑き春風に梅の香りの天に滿ち滿つ
○　神田　太田然子
旅宿に假寢の夢のさめやすく暮れてうつなり秋の小波は
蝶　安房　三瓶はる子
春の野に蝶の連れたつ影見えて共にや行かん花の都路
○　白薔薇女
はら／＼と花か雫か音もなくうらぶれの身の肩に亂れぬ
○　大和　坂上きぬゑ
七村や朧にかすむ春の夜を里の若人が笛の音のよき
○　下總　小林はつ子
はてしなき畑のかなたにそびゆるは白雲とまがふ富士の頂き
○　富山　北山雪江
里の子にほり殘されし若竹は垣に結ふべく早なりにけり
○　大分　甲斐ふい子
扉によりてわれを見送る妹の顏ほの白き星月夜かな

筑前　白露女史
○輪をなして湖の上に鳶の鳴く小春の空の暖かきかな

新潟　大崎秋子
○秋雨や灯かげや旅のいれがてのひくき枕にこほろぎきくも

落花

大坂　白菊
○雪と見し峯に匂へる櫻花誘ふがまゝに散るぞかなしき

茨城　綿引早子
○美き富士の御姿きよく寫しては大古の儘に澄む春の湖

神田　菊野花子
○日記くりて友は逝きぬの黄昏を偲ぶ小窓に櫻散り來る

長崎　江上順子
○桒の花のこぼるゝ畑に木鎚とれど胡蝶みだれて土塊うちかぬる

津市　松尾はな子
○宮川を下る筏に花のせて流して暮れぬ伊勢路の春や

大坂　銀菊女
○線香のけむりの末も母君が姿やあるとながめやるかな

呉市　森高子
○年ふりて物皆かはる故郷にかはらぬ母の情うれしも

山吹

伊勢　松本しげ子
○夜の雨のなごりの露にうるはしくこがれ色そふ山吹の花

筑後　梧桐露子
○或る夕君を花野に見てしより蝶の行方に我おのゝきぬ

松山　山脇幸子
○此奥は吉野ときゝてなつかしく渡し守る女に川の名とひぬ

陸前　白百合女史
○さきくあれと祈しものをはかなくもうせぬと聞は浮世なり鳧



春雨（賞外）　さくら女

春雨

仙臺　梅枝女史
つと立ちて庭面をみれば紅梅も昨の雨にや色まさりけん

岩代　服部てい子
○朝門に小草を踏みて露ふみて琴の調の君をおとづるゝ

堺　すえ子
○いかにせん都の春も惜しけれどとなげきし人の忍ばるゝかな

桃

下總　石渡つれ子
○梅さくら咲きほこる世に爭はで籔の木かげに桃の花さく

本所　田中霞筏
○丸木橋渡る子守の絵日傘に旅胡蝶舞ふ影やゝ長き

菫

大阪　白菊子
○打かすみ匂へる野邊にたづれ來てけふも終日すみれつみつゝ

茨城　赤澤せい子
○吉野山花にうかれて分け入れば奥深しとも思はざりけり

熊本　村上はつ子
○光明の燈火きえてかげくらしのぞみのなわも今たえんとす

下都賀　春野光子
○いのりつる神のしるしのあと見えて笑顔を二ゝたりわれは泣きぬる

鶯

越後　若楓子
○あけぼのや花野つゝめる彩霞をり〳〵もるゝ鶯の聲

因幡　みどり子
○憧がれて乳母がり訪ひし桒の花野胡蝶むつれて路しるべしぬ

熊本　湖畔
○鐘のれもあしのそよぎもきえゆきて白きはなちるなにはづの浦

群馬　飯塚千翠子
○湖添ひの十戸の村はたそがれて柳にとぼし三井寺の鐘

和歌

○　陸前　洋月なみ子
幸あれと云ひておこせし外國の兄君戀し行く春のくれ

○　陸前　寄柳いと子
春雨のしと／＼と降る夕まぐれ窓おし開けば白梅香る

春夜　下總　はな子
花ぞちる今宵に逝かむたらちねは心して吹け小夜のあらしよ

○　新潟　岩瀬波子
ポンチ繪に一人おかしき花ちる日春行くらしう野の風たちぬ

春野　上毛　金子例子
少女子の置き忘れたる花かごに我主顔に蝶ぞまもれる

○　新潟　岩瀬政子
藤波の紅見て下に立ちし朝富士の絲はいつもより濃き

夜學　山梨　池田なか子
ともし火をあかくしなしつかゝげつゝかたるもたのし古のひと

○　南多摩　山村さゆり子
花見んとさまよふ少女の下がみのかざしの花に胡蝶舞ふなり

○　愛知　藤重子
雄雌波に白帆消え行く睦濱に朝日の光り仰ぎ見むかも

○　八王寺　小池つれ子
ほゝ笑みて眞砂に書きし君が名を聲消して行く朝月夜かな

○　大坂　都留子
まみえざる亡き祖父君のねむりますおくつきわたり風暖き

山吹　東京　大畑千代子
くれてゆく春の山路にたゞひとりおくれてにほふやまぶきの花

○　石見　三明糸子
月おぼろ梅が香高き我庭の燈細き石ドーロ哉

○　新潟　逢坂きその
夕虹と花間を通ふ佐保姫のは風に散るか窓の紅梅

○　横濱　井本君子
欄による白衣の女の黒髮に緋桃吹雪のもつれもつるゝ

櫻　東京　芝野水紅女
隅田川長きつゝみをいく度か花にうかれて往返りけむ

○　福岡　よし子
春の日ののどけきあした老人も花さくかきね草むしりする

春　香川　河村富貴子
美しき少女の眠る春の野に羊群れ居て日は長閑なり

新樹　山梨　萩原貞子
我庭のものと思ひし富士の根も見えずなりけり繁る青葉に

○　和歌山　玉置菫花
花曇る夕ぐれ空をおぼろ／＼鐘の音こもる佐保姫が里

○　臺灣　紫子女史
月清き土橋に一人たゞずめば笛の音遠く紅梅の散る

○　麻布　五藤澄子
暮れてゆく菜の花つゞき富士見えて靜かに濡らす春の細雨

○　陸前　加藤貞子
今朝見よと心ありてや宿しけむ庭の紅梅露のかゞやく

○　信濃　佐久貞子
君とゆく朧月夜の菜の花や林檎畑や湖ぞひの里

○　飛驒　白百合
須磨あたり佳き人こよひ逝きますか新星一つ又流れたり

○　尾張　秋外女史
月みればわかれし君の偲ばれてたゞ何となく袖ぞつゆけき

○　八王子　小池つれ子
小屛風に散る夜櫻の二片らを秘めてほゝ笑む姫の御謎は

○　下總　刀月女史
何となく思ひみだるゝ小夜時雨秋さりがたの夕べならねど

寫眞　名古屋　林田米子
なき友のそのうつしゑを見るごとに共に學びし時をしぞ思ふ

春野　信濃　山越鶴子
うら／＼と霞こめたる野の小道草暖かに白き蝶舞ふ

杜鵑　讃岐　白蓮女史
有明の月影かくす森の中に一聲高く杜鵑なく

○　新潟　風間露子

おばしまや月にもたれてよる女に涙たまへとなきける虫よ

○　讃岐　香川千重子

草刈の少女がかざす菜の花に垣根越え來て蝶の止りぬ

春月　佐賀　石井ゆふ子

つく／＼と窓打ち明けて眺むれば影面白きおぼろ夜の月

○　大阪　森ふさ子

春雨の靜けき宵をいそぎくる灯にうつりぬ散る花のかげ

雨夕　横濱　豊間秀影

病む妹に藥すゝむる雨の夕まくらもたげて散る梅を見る

○　茨城　綿引甲子

惜しまめや名にし殘れば山里にたとひ散るとも山櫻ばな

○　新潟　小林きみ子

うつゝにもゆめにも君を慕ひしに明日より袖を誰としぼらん

離別　信濃　神津良子

恙なく歸り來ませと母君があつき情の言の葉になく

○　信濃　識子

なき母に逢ふとみし夜の夢さめて小雨靜かに梅が香のそう

○　麻布　五藤すみ子

根芹洗ふ少女可愛き鄙歌に暮れてゆくなり里川の春

○　麹町　山下雨葉女

春の野に君が名わが名書き止めて戀しき花にさけても見ばや

○　麹町　山下里子

うるむ眼に御空の星を數へをる妹が頬に花ちりかゝる

行春　島根　竹内小夜子

行く春のうれひに悩む夕まぐれかの光る星仰ぐにたへぬ

○　麹町　美笛子

亡き人のうつしゑ出して祭らむにあまりに悲し春の夕暮

○　米澤　白川まり子

磯がすみ海もかすみて日もかすみかすみに浮ぶ天のつり船

○　讃岐　香川玉舍女

夕まぐれ小川のほとり人たえて岸の柳に春雨そゝぐ

○　香川　松永茂子

戰死せし兄子の寫し繪ながめては涙にむせぶうら若かの人

○　出雲　福井今子

うらぶれの詫居の庭に虫鳴きて問ふ人も無し秋の夕暮

○　山口　オ子

春雨に去年のふるごと偲ばれていよゝ秋のかはく間もなし

○　三重　山田ひさ子

若き愁ひ若き喜び胸に秘めて花の吹雪にあこがれてゐぬ

○　和泉　辻林みどり子

亡き父の手植のさくら花散りぬうすれし雲の月をかくせり

○　讃岐　東原好月

いにしへの人の心もくまれつゝ忍ぶにあまる水ぐきの跡

○　伊賀　桔梗花

櫻花手折かざして遊び行くみ空に高く雲雀鳴くなり

○　島根　原溪流女

ふりつゞく五月雨悲し昨日今日袷入衣きまほしきまで

○　福岡　筑紫ふじ子

宿つゞき梅の林の八千本に今朝より來鳴く鶯の聲

○　印播　酒井みち子

いつしかに星影消えて川添の柳に白む有明の月

○　三重　坂本かず子

反古張の小窓さびしく開かれてほろ／＼散りぬ緋桃白桃

春夕風　函館　さゆり

もしほたく若き少女の居るぞかしあらくな吹きぞ春の夕風

○　紀州　山口まさえ

香をとめて奥深くこそにほひけれ花にはてなきみよしのゝ山

春夕　姫路　松下梅子

草の上に散りくる花も光あり詩集おさめて夕日眺めぬ

○　伊勢　大畑こう子

磯めぐり思ひ出多き黄昏やしぶきにひぢて袖重うなる

羽前　朧月
○
緑子を守りする椽にひるたけてゑまひそめたり白桃の花
山梨　大島しづ子
遠村柳
心あてに見つゝたどらんとほさとの野末にけぶる青柳のいと
安藝　ちと子
○
かへりくる花觀の服たそがれて川にうするゝ白桃の宿
安藝　寬女史
○
里の子が軍事する春の野に國旗ひら／＼胡蝶とびかふ
岩代　西畋子
○
まちわびて春の遊に逢隈の川のかみしもかすみわたれり
備後　高田順子
梅
にはの面を立ちて眺むる少女子が髮にちりくる梅の花びら
新潟　田村さく子
○
樫の實の風にこぼれて山くだる盲法師が古琴ならす
下野　田村靜子
春風
門まもる犬も眠りて我が宿の柳しづかに春風ぞ吹く
上總　小川文子
○
立つゞく花の下かげゆけど／＼行けどもつきぬみ吉野の山
群馬　吉田きみ子
○
迷藏の子のかたらひにわれもなきぬ秋風さむき白河の關
本郷　照子
○
牡丹さき獅子居りきとの土產がたり袴を興ずる姪がかたこと
越後　名香村常子
胡蝶
追はれにし昨日の恨み忘れてか緋牡丹めぐる胡蝶かはゆき
山口　秋山たき子
○
朝夕に忘れがたなき師の君の住みます方へ雲流れゆく
周防　小澤千惠子
○
さらばとて出て行きましゝ兄君の何處の空に里思ひます
羽後　鈴木しゅん子
○
むかへ出でし人さへ今はかはりけりまなびや卒へてかへり來見れば
香川　松永紫葉
餘花
若葉さす深山がくれのおそ櫻心のこりてひとり咲くらん
淺谷　雅芳
庭前櫻
けふ見ずばかひなからましわが庭に咲ける櫻は今さかりなり
小石川　田中佳江
○
うつら／＼夢とも分かぬ湯の宿に桃花見えて春あたゝかき
信濃　山浦楓月子
○
餌おきて泉水近かく立ち寄れば桃の一ひら西に流れぬ
信濃　延川としえ
春野邊
老いませる母を助けて行く先に胡蝶とびかふ春の野邊かな
福井　野坂雅子
○
山守のゆるさぬ花にをりかへて岨路のわらび家づとにせむ
長崎　迎てる子
○
ふみなれぬ和歌の浦みちたどらましみやこの人をみちしるべして
秋田　平田波子
夏月
露すらもおもげに見ゆる蓮の葉の上にやどれるなつの夜の月
向島　白百合姫
○
琴ひけどみかへしあまりつれなきに我手みだるゝ春雨の窓
栃木　寺内まき子
舟遊
みわたせばあなたに見ゆる大池の池ふち近く遊ぶ舟あり
茨城　板橋小菊
○
菜の花のにほふ心をなき母の御墓にしのぶ少女さびしき
京都　橋本すみれ子
○
花半ば邸は燒けぬ父は逝きぬあゝ何とせむ哀れ此身は
青森　白石床利子
○
散る花の運命をわぶる雨の絲戀に十九の春暮れんとす
高槻　赤松春雨子
春田家
こゝかしこ噪ずる雲雀の聲はして花になり行く高月の里
小倉　澤文子
○
谷川の細きながれを葉と花がもつれもつれて流れ去りけり
志摩　台花女史
○
日毎々々梢がくれに見し海も梢繁りて見えずなりけり

〇　神奈川　中村清子
汐干より歸るあとには波見えて磯邊靜かに月の霞める

〇　上總　小河柳子
うすものゝ二尺の袖はうづもれて美女三五の百合の花園

〇　周防　岡部征舟
青草や花籠一つ小雨して胡蝶の夢に春行かむとす

〇　岩川芳蘭女史
病む母にすがりて泣ける少女子の聲いよ高うして小雨そぼふる

春　讃岐　合田まが子
詩も歌もならはぬ身にも春はきぬ花よしとのみいひてすぐさん

〇　尾張　白つばき
鶯の聲にうかれて近よれば谷の清水も清き音たてゝ

憶病妹　靜岡　中村かをる
病妹が枕邊近く梅活けてかをりやすると吐息秘めつゝ

〇　四谷　しらぎく
春の日を振分髮の少女子が鳩に豆やる手つき可愛も

〇　太田利子
老の身は短か夜にさへ寐覺してまちかれて聞く曉の鷄

〇　大分　三木春子
春雨窓に去年の日記を繰るからに庭もせに散る八重ざくらかな

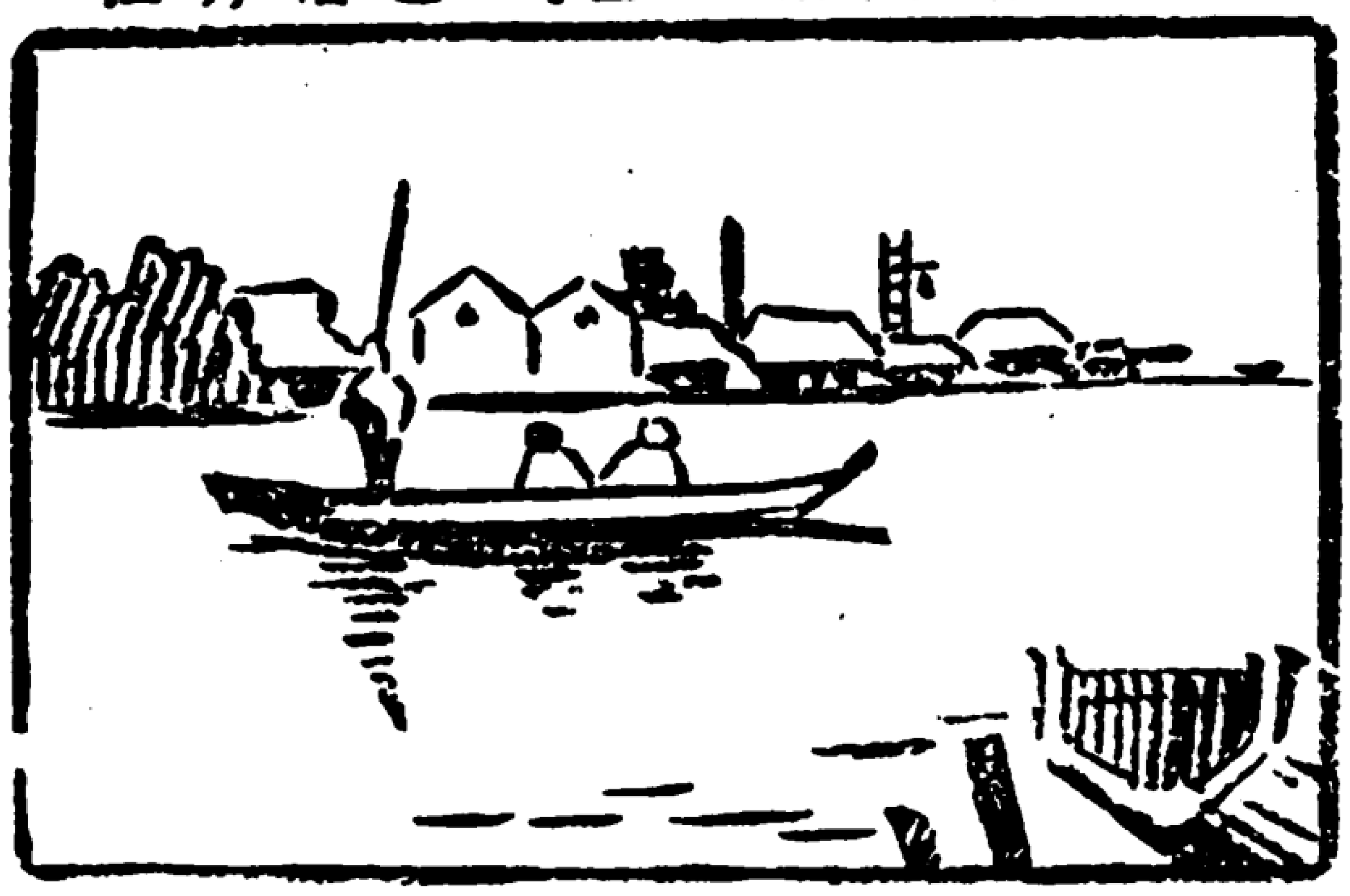
〇　飛驒　田舍乙女
花籠を振のたもとに抱きつゝすみれつむ子の姿なつかしき

〇　奈良　稻の里女
このごろは思をたれにかたらはむ春ゆく門におとづれもなし

〇　大坂　青葉しげ子
夕日紅き浪華の春の雨あがり白梅散りて鶯のなく

〇　茨城　飯塚志げ子
櫻咲くのどけき春は來れどもかへり來まさぬ君ぞなつかし

河岸（賞外）　府下八王寺　乙幡秀江



〇　相馬たけ子
玉だれの御簾と見るまに雨やみて風にあやなす青柳の糸

梅　日本橋　山田八重子
洗髮の五尺流れて肩にふく春風十里梅の花散る

〇　大分　工藤鈴子
母は逝きぬ夫は歸へらず花は散りてこぼるゝ雨に春くれんとす

〇　茨城　秋山きみ子
胸ふかくひとたび染めしこの思ひ抱だきてゆかん宿世なるべき

梅　宮城　たちばな
雀すむやぶの南の梅咲きてきのふにかはる鶯の宿

〇　岡山　高岡花枝
おきまさのもつれ〳〵し糸口をとかんすべなき身こそつらけれ

〇　大分　出水玉子
草枕結ぶかり寐の夢さめてとこよに歸る春の曉

〇　淺草　朴蝶子
舍人には籠の簾を上げさせて花をめでてますさ公逵かな

春日　鹿兒嶋　石神朝がすみ子
おさの音途絶えて主人かへりきぬ春の日たけし桑のはなの宿

〇　仙臺　宮守かる子
金鞍の駒に鞭して春御子の大和いでます桑ざくらの雨

〇　京都　岩淵國子
逝くまでにこの人形をつぶさんかさなくば母は袖も朽ちなん

〇　京都　島田英子
吹かば散れ嵐の山の櫻花また咲く春を待つぞ樂しき

〇　福岡　田中逸子
姉君のかたみの雛は殘れどもぬしはいづこぞ闇の夜の國

春海　青森　加藤美枝子
金色の波にゆられて眞帆片帆春の海路をたれかゆくらむ

櫻　神戸　泥谷ゑ津子
うつし植ゑし教の庭の八重櫻世々に花そう花のけだかさ
○　横濱　齋藤とゑ子
もうち君駒とめ給ふ行く春の櫻花ちる勿來の關に
○　大阪　村瀬つた子
なつかしき君が御手とりいひしれぬ胸のひゞきのいや高き哉
○　新潟　中林秀子
いと長く枝たれそむる青柳の葉末を洗ふ池のさゞ浪
○　神田　松室うた子
春長閑小波立てゝ吹く風に渡し小舟に桃の花散る
○　岩代　三浦たい子
形見なればのびるが儘に育て見む春は絲の兄が若松
○　大畑歌楓子
春めけばこゝろも早く向じま花の便りをいざ言問はむ
初旅　磐城　佐久間ちよ子
橋一つ越えて我家を眺むればかすみの中に屋根の端見ゆ
雨中若草　下總　兼坂秀嶺女
春雨のふりそめしより野邊はみなあさみどりにも萠る若草
○　四谷　山中芳子
暮れて行く春の小川に馬洗ふ馬子の鄙唄節面白き
春曙　周防　春月
東雲の明け行く空にみゆるかな深雪の櫻青柳の糸
○　上毛　河内とめ子
花散りて鳥はかへりぬ今日もまた思ひにいたむ春の夕暮
○　羽後　白鳥りん子
こゝも亦鶯鳴きて花咲きぬうらのとまやの春のあけぼの
夜卯花　豊後　玉露
川ぞひの垣根をこゆる白浪とみゆるは月にうつる卯の花
○　川越　中村ふく子
畔道に若菜つみつゝ見返れば賤が伏屋にいそぐうなゐ子
霞中歸雁　石川　山岸美代喜
歸る雁子の爲にとていそぐらん八重のかすみの衣ぬひつゝ
○　岐阜　後藤英子
薫り高き花咲く春の南椽に胡蝶にやらんの歌かへりみき
○　長崎　藤田ゑな子
夕まぐれ風音凄き奥津城に哀慕の雨か雲せまり來る
○　島根　鶴子
都よりうれしき便り今日ありて夢に見てけり兄のかへりを
○　青森　梅が香
のたまはず言はれずしばし花蔭に君と別のさてつらきかな
○　芝　蝴蝶
吹ぐ風にもりくる月もうごく哉端山の梢青葉そよげば
○　越後　白葉子
うす墨の夢の遊山あはくして青葉そよぎて日はさかりなり
○　群馬　吉村華雪女
散りぬとも香をだに殘せ梅の花またこん春の思ひ出にせん
○　高崎　染谷勝子
業なりて吾が故里の吾が友は吾畑の痩せを語れと云ひぬ
○　前橋　參蘺女史
近江路やしばし帆によき夕暮を淀の川瀬の月美くしき
○　上野　佐藤露子
細き雨に思ひがちなる吾が背子の袷縫ひさす夕暮の窓
○　前橋　浦子
夢とすぎし昔の春よ現なれ母と花見し五年の前
○　長野　小松きみ子
乳ほしの泣く子にすみれあしらへて給日傘排を尋れてや行く
月下落櫻　長崎　葉山ますみ
春の夜の月にうかれて來て見ればさくらのもとは雪ぞふりける
○　陸中　菊池はせ子
駒にのりて昔をしのぶ袖の上に花ちりかゝる嵯峨の山里
○　上總　十六夜女史
誰が爲と殘し置きけん我爲はつらきばかりの日記の戀歌

文學士 沼波瓊音先生選

抒情文

天

○小野の別れ

神奈川縣鶴見 紅扇子

さらばさきくと胸迫りては、涙に半ばかすれし聲に、斷ちがたなの思を斷ちて強ら振りてつと別ちし手と手、此手に殘りし和さぬくみもまだ去り敢へぬに、君はや咲き續く眞萩白萩、桔梗女郎花の色あえかなる花野の末に紛れ行き給はんとす、悲し悲し、花なき檜の木立に縋りて空ゆく雲を打ちまもり、彼方に紛るゝ影を見送り、狂ほしの我胸や、斯て消えなば消えよとぞ、身を悶へては伏し沈みては。秋くれ方の野風冷めたう、頰にうするゝ夕日の色もはかなし、はるぐ\の野や、我目路遠く白雲ゆるう流れて風一しきり、白萩の花しきりにこぼれぬ、奇しきえにし、まことくしきえにしなり、君を初めて見まつりしは往にし春の夜の歌留多のまどゐ、襖越しに聞きてしみ聲、初めてきゝし聲ならず胸に響きて怪しう、見まつるに及び御面は愈々初めての君ならず、さりとも何所如何なる折に見上げまつりしとも思ひよらねば、これや必ず前の世の朧月夜に花ちる木蔭に佇みて我が、見送りまつりし君なんめりと、我も得知らぬくしき影の、此胸の中にかくと囁くやう覺えて。さはれ戀とは云はじ、宿世拙なく君に一つの姉なる我戀と云はんは口惜しかるべし、只我世に得たる一人の友と、かゝる花野に、かゝる夕映えのかげに、幾そ度み手とりて語りけん、人には秘むる望みも想ひも興じては憚りもなう、若き瞳を輝かして幾そたび見はてぬ夢の影を追ひたりけん、君よ紅顔十七の如何に春深うゐませしよ。

相見る事の屢々なればさがなき人の口に懸りて、うたてあらぬ名は唱はれぬ、名に立ちては世の掟人の諫め口惜しう、且つは行末の幸多かるべき君が行手を、有らぬ名に掩ひまつらん事の悲しう、斷ち難きはさる事乍ら此まゝに別れまつるべし、我世にはかばかりの薄きえにしと別れまつるべし、さらばよ君さらばよ我懐かし人よ、來ん世にも此野に似たる花野し有らば其花蔭に君をば待たん、さらん折には容れさせ給へわがおもひを。

君が袂の隱れしあたり、萱穗さやぐ\音立てゝ今秋風は我袖に吹きぬ、野末に低き筑波しげ山、紫ねびたる雲美しうそが頂きを掩ひて夕映えの色あえかなり、さらさらと萩のしづ枝を洗ふ野中の流、よどめりや、翡翠ひくう啼きぬ。

（評）美しき情美しき状、錯雜して、糸竹の相和するが如し、身の年上なるを歎くあたり言ひ難き趣あり。

地

○おもひ出

彦根 四十九 林　玉子

二ならず愛で給ふ夫のある身なるに、かゝる事思はんはふた心あるに似て、後めだきわざなれば、いかで忘れんと思へども、想ひ出さるゝはをさなゝじみの人なるよ。幾度かあふと見ては驚くねざめの床、人なみならぬ身をもて、今はいかなる里、いかなる宿、いかなる世をか送るらん。さる身となしまゐらせしも、皆我が罪なりゆるさせ給へ。

思へばはや十五年の昔、恐ろしかりしかの火事の夜なり、われは離れ家にかき入れられて、前後もしらず臥し居たりしを、側より母樣の御聲にて、おゝお茂よ氣のつきしか、先程はさぞかし苦しかりしならん、それにつけても芳松は御身を助けん爲に、生れもつかぬ不具の身とはなりしぞと、襖をあけ給へば、そこに芳松は死しけるやうにて、右の足折れて血は淋漓たり、見るより心はつと動きて仆れぬばかり走りより、おゝ芳松と、後はえいはず涙ぐめば、靜に目を見開き我顔打みて、御無事なりしかと唯一言、片ほにうれしげなる笑はふくめども、忍ぶ苦痛は面にあらはれしに、頑是なき童心にもそゞろ氣づかはしく、枕にすがりて、むせび泣きぬ。

思ふ去年しも月、われ嫁ぐ日の夕べよ、あはれ二十年餘りをなづさひ來し家に過さんは、今しばしのみぞと思へば悲しく、今更なごりの惜しまるれど、さてかくてあるべきならねば、やがて迎への車にうちのるに、門の柱に打もたれて、此方を見おこせる芳松の姿、いとさびしく、色青ざめて病めるが如きに、我は思はず胸を打たれて面をそむけぬ、芳松はその翌日、誰れにも告げず、何故ともなく、すみなれし我外家をあとにして、何處ともなく姿をかくしぬ。その居間を捜れば名宛を我に一つの箱あり、開き見ればこはいかに、ただ一管の笛ばかり。

ふりわけ髮の昔なりき、叔父君より賜はりし笛を彼人に與へたりしに、いと喜びて、我がひき習ふ琴にあはせて、覺束なくも吹きこゝろみしを、あはれその笛を見すてゝ、去りし主の心の中は？

あゝ、我は是後のことを多くは書かざるべし、身は名譽ある珠玖家の夫人として、幾多の人に羨まるれど、

心の底に深くきざみし傷は、あはれいづれの日にかいゆべき、げに恨めしきは浮世のさがなるよ。

(評)芳松が遂にそれと言はざりしが趣深し。
(又曰)芳松の身分、家に在りし譯を記さざるべからず。

人

○森の精

三河 澤田穠子

何千年前に神様が種を蒔いて愛の雫を注いだのであらう、雲通ふ許りの老樹古樹が清新な嫩葉の衣を着けた梢々を差交して、暑い日影を遮れば夏ながら猶肌寒い木の下徑は、丈にも近い熊笹の間を分けてすぐ後の瀧から流れて來る、玉を溶したやうな滑い冷い清水に添ひながら、露滴りさうな青苔の上を過ぐるので、極めて幽寂な大氣を搖がせて、銀鈴の如き呼を立てる水音の外、些の音もなう森は靜まり返つて居る。

嗚呼森、幽寂なこの葛名森、妾は此の弱い胸に湧き返るやうな苦痛や煩悶の起つた時、慰めて呉れる人もなき孤子の身の悲しさには、何時も此所に來て思ふが儘に泣いたり歌つたりして、心の自由と慰藉とを求めるので、此の森はまこと妾の爲には、唯一つの安息場なのである。

主人の家の裏口を拔けて、椿の實ホロ〳〵とはぢけ落つる藪添の小徑を二町許り、瀧川を渡つて夏物の野菜畑を横切つて、斯くして漸うに辿りつく此の葛名森、何と言ふ懷しい森であらう、慕しい森であらう、妾は唯名を聞くのみで早言はむ方なき感に打たれるのである、と言うて妾は其を何故とも知らぬ、唯果敢ない運命の定律に觸れて樂しみ多い花やかな半生を、紅涙の淵に過ごさねばならぬ憫れな孤子に、唯一人叟い同情の泪を注いで呉れないのみか、却つて卑しみの目もて擯斥される境遇にある身の上とて、只譯もなう此の境が懷しく此の森が戀しく、悲しい事、苦しい事、其等運命の儚が胸に憂の浪打たせる時には、宛ら夢中の幻影のやうな捕ふべき事の出



クリケット(選外) 神戸二ノ宮町 德永美爾子

來ない一種の力に引寄せらるゝかのやう、自ら手にせるあらゆる業を擲つて、此の森蔭に音訪れるので、其の永夏のこぼれ日影が黄金の箔をふり落したかの如き苔の上に座して、徐に空をいざよふ雲の流を嫩葉樹の搖ぎの間に瞻仰げながら恍惚とすると、丁度々々宏やかな花やかな、神のみ園の綾絹のやうな搖籃の内で、美しい天使の讃美歌を聞くかのやう、心は次第に幽玄な詩想の索求に捧げつくされ、胸奥の裡には早くも優しく清い念が泉と湧いて、恰も汚れた萬の想から永久に甦つた罪人が、神のみ前に聖き洗禮を受くるかのやう、座に宇宙の萬象が含笑れて、最も眞率にはた敬虔に、壯嚴な詩境の神を心に描かれるのである。

噫されども妾は其は何故とも解し得ないので、唯追ふこと捕ふることの出來ない幻影なるものが、妾の胸奥の琴線に觸れて、森の奥に秘められた神秘を説いて、慰藉ある樂しさを告げて、不知不識の間に其の境まで誘ひよするので「そは何物の幻影ぞ」と問ふならば、妾は己が慰藉の地、己が安息の此の境を指して、唯もう懐しい、唯もう懐しい、幽寂深玄の氣に富める森の精が、此の世の幸に離れた可憐なる少女の爲に、猶生ける其の聖靈の活現を示したものと外語り言ふべき言葉を知らぬのである。

（評）無韻の詩。

秀逸

○青葉蔭

豐橋　房枝

いそふりの枕に通ふ鎌倉坂の下に五年を夢の如く送りしわれは、故郷の母上の病癒えずと聞きて、御暇を乞ひ、明日此御住居を去らむとはするなり。

故郷は箱根の彼方三島の宿なれば、歸りては再び來む事思ひも寄らず、されば久しく住馴れし此御屋敷も、明日が長への見納なるべし。と思へば俄かに名殘惜しく、胸迫りて、熱き涙に眼も曇りぬるに、悲しきは是のみならず、五年の間片時も離れずかしづきまつりし、道夫樣とのおん別れなり、あゝ堪へがたや。

涙拭ひて立寄れば、日影も洩れぬ青葉の蔭の釣床の中に、道夫樣は猶すや／＼とうまゐして居たまへり、玉とは是をや申すべきおん膚の淸らかさ、眉付口元の可愛らしき、偏へに幼き御神なんど見まゐらする心地せられて、いはむ方なく懐しきに、何御心におぼし給ふらむ、朱の唇僅かに弛びて、片靨ぞ浮べさせ給へる、見るに我にもなく引入られて、心幼くなり、憂も忘れ果てぬべき樣なるを、おん別れ仕りては、なか／＼に胸痛ますする種となるべし。

道夫樣の、此濱邊に呱々の聲揚げさせ給ひし時、召さ

れてこゝに來りしより、雨の日も風の日もたゞ其御相手のみして暮らせし五年の間の、如何に樂しく幸多かりし事よ、竹取とやらむの姫君にはおはさねど、もの悲しき夕も、罪なき笑顔を見まゐらすれば、まことに胸の晴るゝ思ひありき。此君抱きて、波靜かなる朝の磯に立ちをれば、過ぎ行く人の親も振返らぬはなかりき。取分けて嬉しかりしは、いと健かなる御生にて、二度三たび風邪に冒され給ひしが、曾てわづらはせ給はぬ御事なりけり。

われよりもつまの君よりも、此子は其方になつき居れり、と奧樣も仰せられし事ありき。更に、何により如何なる緣の糸の結ばれしやは知らねど、道夫樣はこよなうわれになれむつび給へり、さるを、明日心にもあらで御別れ申さば、如何に本意なくおぼし給ふらむ、われとても、今二とせ三年は御奉公して、せめては學びやに通はせ給ふ御姿を見て御暇をとてこそ思ひ居りしを、今はたゞ其れも儚き夢となりぬ。

道夫樣、われは明日此地を去るべし、されど御情厚き父上母君のおはせば、さら〳〵御不便なる事は侍るまじ。ゆめ無理なるせがみして、あれは賤しき女に守りせられし者なればなどゝ、人の譏をな受け給ひぞ、幼き御心にも、常々申上げし事よく聞きわけ給ひて、御兩親樣の仰せ言に背かず、われになされしやう誰々にも優しく遊ばしたまへや。たとひ此地は離るゝとも、心ばかりは御身のほとりに從ひて、雨にも風にも楯となり、夜々の夢にてまみえはべらむ。

明日のおん別れは、旋て今生の見納なるべし、さあれ、われ何處の野末に埋れ果つるとも、朝夕必らず此方の空を望まむ、道夫樣、何卒此後も御健かに、天晴めでたき方とならせ給ひて、名を揚げ德をも敷き給へや、世に勝れさせ給ふとの御噂を、陰ながら聞きもせば、果敢なく朽ちてゆく身に如何許りか嬉しからむ、今の願は唯是一つなり。もし假初にも、幼かりし頃何とやらいふ女にかしづかれしなど、おぼし出でたまふ時もしあらば、そはわが一生の幸にこそ。

折しも風凉しく梢に戰ぎて、さくら葉の黄なるが一ひら枝を離れ、ひら〳〵と舞ひて御寢顏の上に落ちぬ。急ぎ取上げて、捨てむとせしが、御膚に觸れしと思へば懷かしく、捨てかねて、いつまでも持つ手に、熱き淚ははら〳〵とこぼれぬ、堪へがたや、噫。

（評）戀にあらで、血緣なき者の間に起る愛情こそ最尊けれ。

○一夜の淚

本鄉照子

泣きぬ、泣きぬ、泣かれむかぎり泣きつくして、物も

見えずなりぬ、それよこの可憐なる弟の訴をきゝて、いかで泣かざらむ、泣かざらむ。

十二歳の幼き身にて、母もなく、友もなく、只獨りの父を便りに、朝は早く起きいて炊事の手傳をなして、學校にゆき、歸れば慰めむ母もなきまゝ閉ぢられたる扉を自ら開きて、父の歸りをさみしく待つらむものを、血を分けたる叔母は有れども、一度として安否を尋ねたる事なきとか、

あはれ雨の日風の夕、父まつ程のさみしさや如何ならむ。如何に物學びの爲、家の爲とはいひながら、便るに人無き汝をつれなく殘せる我を恨むならむ、ゆるせ弟、我は此地に來る前、一夜も二夜も夜さり悶へにもだへたるなれば。

思ひ出づれば、六年の昔、母上この世を去りますいまはの際に、汝の事は呉々も我に托してゆきましぬ。噫吾は十二の其時初めて、涙といふものを知りそめしが、汝には知らさじと固く／＼秘めしものを、汝は遂に六歳の時そを知りぬ。今日の手紙にも、

「書くまいと思つたのに、遂にこんな事を申上ましたが何卒々々内の事は御心配なさらずに、御勉強なさつて一日も早く卒業しておかへり遊ばす樣に、而してあの面白かつた數學をもまた敎へて下さる樣に、樂んで待つてゐますよ。」と。

嗚呼、腕白盛りの十二歳兒をして此言をなさしめたるを我はかなしむ。

かなし、我は人二倍父を慰め、弟を愛育すべき身なるにいつまで斯くさすらふらむ。さはれいとしの弟よ、三年の月日はさみしくとも志のびてよ、我は日毎々々に三度は必ず父上と汝との健かなれかしと祈りつゝあれば、神の御手はいつも我家の上にあらむぞ。つらくとも先を樂しみに待ちてよ、業成りて歸らむ日には力の及ばむかぎり父に事へ、汝を愛しみ、汝が好める數學をも共に爲むに。

逆上せし重き頭を冷たき風にあてばやと窓押せば月はなけれど、星のまたゝき何となう我を慰むる心地して。

（評）一生の中斯る涙を味はざる人は寧不幸なりと余は思ふ。

○鄕の便り

和泉　竹叟文子

妾はつひ知らずに要ない口辷らして、今日學校で親しい友達の感情を損ねたので、宿へ戻つて机に對うたが、それが氣になつて／＼讀書にも心が行かず、筆取つても氣が進まないので、書も伏せ筆も擱いて、窓にもたれて庭のあらぬ方を見詰めた。あゝ、輕はづみな事を言うた、あの方を感情惡うしたならば、親しう語ることも出來ないのだ、僅かの距離て故園を離れるともう

只一人も妾を慰めてくれる人がないのか、世の中はかうしたものとは言へど、恁んなに氣狹いものか、こんなに薄情なものか、故郷にさへ居つたならばたとひ一人二人の友を失うても、いゝえ凡て友がなくても母の暖い情に浴し、妹の清い愛に接することが出來るのに、あゝ、淋しい佗しい、一層こんな勉學なんて止めて、美しい故郷の自然の花園に、新らしい空氣を吸うて、朝は花賣りに夕は畑へ出て、日もすがら罪ない唄をうたつて、生涯鄙に朽つる方が餘程好いわ、などゝあれからこれへと思を飜へして、終には極端な詰まらぬ考を起した。

ふと足音がするので振り返ると、この宿の下女が郵便が來ましたよと言ひ捨てゝ一通の書狀を投げて去つて行つた。それは戀しい懷しい母からのであつた。

妾は母の筆の跡を見るともう讀まぬ先に、嬉し涙がほろほろとしぼれて、今の落葉の庭の樣な腦は春風に吹かれたやう清々として、取る手遲しと封を破つた。

三尺斗りの長い手紙であつたが、束の間に讀み終つて考へて見たがこんな長い手紙であるに、もつと他のことも書いてあるであらう、讀み落したのであらうと思つて、二度も三度も讀み返したが、一行も讀み落しはなかつた、けれども妾はこれを讀み行く中に心は轟き鳴つたのである。

お前は交際上手であるから他郷へ行つても心配はないけれども、隨分輕卒な性質だから充分注意して人の氣を惡くせぬやうに……妾はこの一句を讀んだときの心、如何であつたらう、現在妾は只だ一人の親友の氣を惡くして、獨り悶えて居るのである、母の心痛を無にしたのである。今日の事を今日忠告を受けて……まさか母は知られやう筈がない、母の清い心に宿られる神が告げたか、若しくは俗に言ふ虫の知らせとしか思はれぬ、あゝ、濟まない……一部始終を母に告げて懺悔しようか、否、妾さへ良心に謝したなら、母も免して下さるてせう、妾と母との胸を結び付くる糸が乾度傳へてくれるに相違ない。

母と言ふ暖い情の影が妾を守つてくれるのに、妾は獨

謎もの（賞外）



讃岐二本松町　松永茂子

り此の世を氣狹く思つたのだ、明日は友達に此の罪を謝らう、免して貰はう、と思ひ定めて、母への返書を書いた。母へ出さうと言ふ氣なのでか、それとも良心に詫びる爲なのであらうか、筆はすら〳〵と動いて、都の行く春の情況斗り、最も樂觀な狀を出した。あゝ、それとしても明日が待たれる、友達の喜ばしい顏が見たい。

（評）遊學の身にはよく斯ることあるものなり余も經驗あり。

○或る夜

ゆかり子

上野の鐘は、もう既に十時を報じたのである。今岩崎のやしきの前を何をか語りながら、上つて行く二人!!、一人は母親らしい、外の一人は娘であらう、實に見すぼらしいみなりをして、且つどこともなく、苦勞をして居ると云ふ樣子が、あり〳〵と現はれて、居るのである。二人は湯島天神の石段の前を通り過ぎたが、ふと娘が見返つて「母ちやんこつちから行つた方が少し近いよ」聲は何とも云はれぬ哀れに涙ぐんだ調子であつた「さうかいおちやあこつちから行かう、ころばずにゆつくり御上りよ、」娘は無言であつた、母親は娘の肩を打つて「ね……美ちやんや今の母ちやんの境遇をよく〳〵考へて見て呉れたら、そんな我まゝは云はれぬ答だ、もう少し辛抱をしておくれよ、母ちやんだつて決して御前にこんな苦勞をさせようとは思はん、たつた一人の此の可愛い娘にネ!!!父ちやんも床の中で每日每日御前の事を心配して居なさるのだよ、母ちやんなどはネ、ろく〳〵夜もねずに內職をしたり、父ちやんの看病をしたりして居るのだよ、どうにかして其日がくらして行かれる物ならば、此御前を奉公などにどうして出さう、どうか少し位の事は辛抱して御くれよ」まだ十三のがんぜなき娘に、こま〳〵と今の境遇を語りきかせて居るのである「だつて〳〵母ちやん御主人樣はあんまりだと思ふよ、いくら孃樣がころびなすつたとて、あんなにあたしを叱らずもよい、御前の守のしやうが惡いのだ、折角ぬつて今朝着せた許りだのにつて、今々御ぶちなされさうな奥樣の御樣子、あんまり恐ろしかつたので、裏口から出て家へかへつて來たのよ、もう是からは辛抱するよ、」二人のかげぼしは長く長くなゝめに電車線路に橫たはつて居るのであつた。「あゝもう御宅の前へきたよ泣いた顏など見せずに、よく御詫びをするのだよ、是はあんまり少しだが母ちやんが御前にと思つて、持つて來たのだから、何ぞ欲しい物でも御買い」―「いゝえ、あたしいらないのよ父ちやんにあそこの猿飴でも」云ひつゝ路地口を急いで入つて行かうとする、袂をおさへて中へと押しこんだ、さうして我が最愛の子のしほらしい後姿を、ぢつと立ち

どまつて眺めて居たが、姿が消えると共に安心したのか、彼は家の方へと足を向けた、もう夜も更けて來て雁車が物すごい程早く走つて居る、どこともなく犬の遠吠が一種身に刺してまれるやうにきこえる。「あゝ寒い」と、云ひながら、胸をかき合せてふと月をふり仰いだ目からは涙の雫がハラ〳〵とほゝをつたつて地上へと落ちた。

（評）平凡なるやうなれど哀深し。

○袖時雨

長門　國子

青葉茂れる櫻井の、里のあたりの夕まぐれ、と片言まじりに霜夜の虫のそれよりもあはれに歌ひ出したのは、亡き夫の忘れがたみなる今年丸る四つになりし秀雄にぞある。

春はめぐり來れども歡樂永しへに逝きてかへらぬ夢と消え果てしより、人は花に醉ひ朧月にあくがるゝ今日此頃も忍ぶに餘る恨みを呑みて、ひたすらに急ぐは、明けても暮れても同じ針の道、父なき憐れ孤兒の敎育費にとて養育の旁ら日切の此請合仕事、賤の女の手一つに育てし者なればと、人に嘲られなば何とせむ、行末は必ずなき父の志を繼ぎて、適れ大和の花と薫り出て父に劣らぬ功名なしてよと、朝に夕に神や佛に祈るかなしき胸の中は同じ境遇の人ならではよもわかるまじ、さても幸薄き星の下に生れ出てしはあはれ此子なるよ窓の外にはまたも節もあはれに。世の行末をつく〴〵と、偲ぶよろひの袖の上に、散るは涙かはた露か。よろひの袖のそれならで、内には涙の雨に袂をしぼる母のありとも露知らで。折りしも連れにはなれし雁の一聲は、入相告ぐる鐘の音と共に、涙の胸にしみ渡るやう。

（評）憂きを憂きと知らざる子を見る母の心同情するに餘あり。

○夕の思ひ

福岡　中村直子

わが家は夜舟はつる周防灘に面す。夕つ方、輝ける雲黄金の色を漂はして、湧き返る夕しほの眺さびしき時、我は庭のませ垣によりて、くれ行く海原をながむるを常とす、やがてみそらに星の數添ふに伴ひ、地にうすぎりの、罩めまさりて、水鳥の白きが芦わたる夕風にさわげるも心細しや、遂には一幅畫圖中の線皺夢の如く消えゆきて、もろ袖に闇棚引けば、何となく愴然としてこゝろはるかにゆきなむとす、かくて大空にしばだゝく星の數を仰ぎては人の世のうつせみに似たるを

嘆くなり、あはれ人の子の枕はいづこにありや。ちりなればちりに歸るてふ人の身こそあはれなれ。空なる星よ、美しき天上の囁を地なる人の子に洩らすを吝む勿れ。

（評）かゝる思ひに耽る時ほど人の高きことなし、危からざるにはあらねど。

○笛

津市　坂　ふみ子

歸雁の一群鳴き渡つて小供の軍歌の聲などに書齋を引出されて裏庭に出た、日は西山に沒してオレンジ色の雲は紫に變つて、池の面は靜かに小波を漂して葦の内に放たれたる小舟の内に鴨の二羽三羽眠る用意にいそがはしく前面の大藪も夕霞の幕にとざゝれて唯だ其輪廓が見える計り。

菜つみの小供達の幽な唱歌も森の彼方に消えて馬の鈴の音も次第々々に消てしまつた。

其時に葦の内の鴨は何物に驚いたのかバタ〳〵と音高く立上つた時に池邊の紅梅の二ひら三ひら髮の上に彷徨うた。

御寺の鐘がなると遠き屋の燈がちらほら見え初める、大きな星が一つ我が家の上に輝き初めた。

紅櫻相並ぶ堤の下から低く高く遠く近く風に送られて聞ゆる笛の音、知ず〳〵落とす一雫……嗚呼天にまします神は血を分けしより仲よき君子の友をなきがらとなし、幼き時より手に手を取りて遊び學び契りしかひもなく、然れども君には幼き時より音樂を好まれ私も共に娯み或時は山に海岸に、或時は月光を利して河畔に歌ひし事など回顧されて今の笛は君の其れに似たりなど考へられつゝ只茫然として。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

紡績會社の汽笛に我に歸つた時は月は中空に座して君子をかなしむかの如く木蔭もれに我頰を射て夜番の聲も物あはれに聞えた。

（評）まことに笛の音は人をして回想に耽らしむるものなり。

○試驗の前夜

播磨　綾子

夜は更ける、準備は濟まぬ、次の室の弟の樂しげな鼾が、今夜は腹立しうて、いつそ私もと、一度は本を投出して見たが、流石にさうも思ひ切り兼ねて、復拾ひ上げました、不圖思出して、障子を開けて見ると、何處も同じ大みそか、離れて居るが、二階同志の向合で、能く見えて居る、花樣の居間は、燈が赫々、何時も乍ら今夜は分けて懷しいので「花樣未だ遣つて居て」聞えたのか、障子がさつと開いて「綾樣もー濟んで」と例の優しい聲「否中々、未だ二十枚も殘つて居るの」

「まー羨ましいわ！私未だ三十枚!!」と如何にも苦しさう、私よりか重荷の人も有ると思ふと、何やら急に重みが減じた樣で、一氣呵成に十枚許り書ぎつけましたが少し氣がゆるむと、忽ち睡魔がつけこんで、丁度讀みかけて居た、百年戰爭のジャンダークに、身が代つて男裝乘馬で戰場へ驅け出したと思ふと、忽ち古鄕の愛子になつて、母樣の膝下にだゞをこねて居る、どうした拍子か、亦本のジャンダークに復つて、迫る火刑を憂へて居る折柄、ジューと毛の燒げる音、驚いて我に歸ると、前髮が洋燈の上で、ジャンダークの身代、思はず眼を丸くしましたが、此れも一時、書物の方では未だ、ヲルレアンの戰爭が闌なのに、まぶたは早や平和會議を結了して、水魚も及ばぬ親密さ、苦肉離間の策略も更に驗が無いので、あきらめて、股肱の忠臣目覺時計に、枕邊を守らせて暫時と枕に親んだが、僅に炬燵の溫さを感じたばかり夢は早や歸省の途をいそいで居ます。

下女の聲に驚いて醒めると、南無三寶！旭は早や障子に映つてゐる。

（評）試驗前の夢現の心持よく寫されたり。

○石地藏

本所 田中霞筏女

淋しげに獨り立ちたる石地藏、春風吹きて、そが面を拂へど微笑まず、秋雨降りて、が身をぬらせど歔欷せず。胡蝶舞へど遊へど樂まざるが如く、青蠅面にとまりて、なむれど拂ひ給はで常に香華の香りに醉ひ悠々として直立し給ふ。

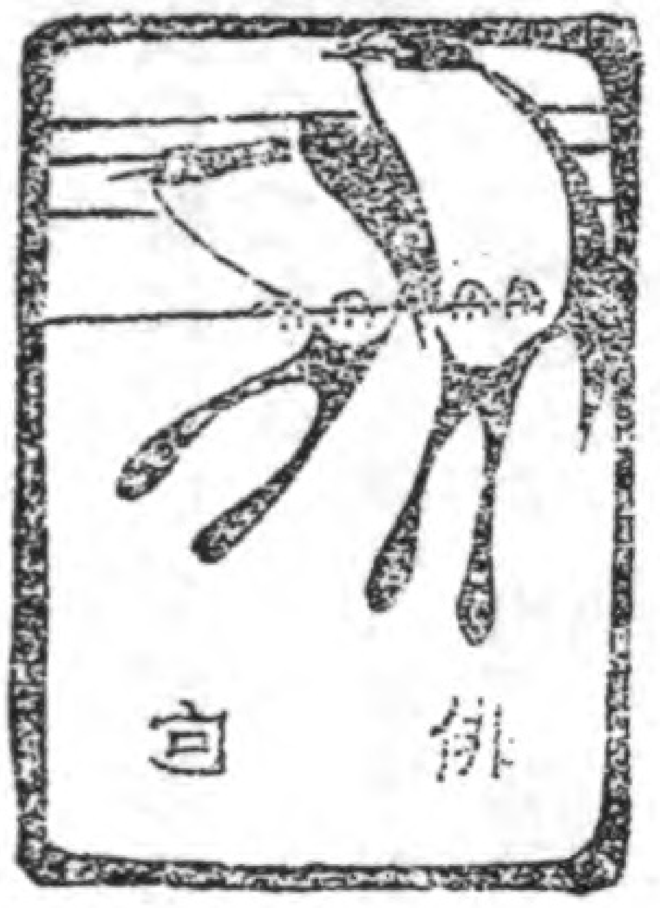
幾年經れど雪の如き白髮をもたず反りて紺青の苔ふえて年經る每に青々として若し、賤の童が徒らに石をもて鼻をかき頭を削れど寬大なる君は、怒り給はず又嗚咽せず、君、世の無情を語らんともせず、食はずして死せざるが如く、呼吸せずして生命あるが如し。

犬屢々此處に來りてむさきとすれども、いとひ給はず、烏往々此處にとまりて汚せども、未だ嘗て逐ひ給ふ事なし。

伺ひ奉れば御同胞は諸國何十萬、皆見ず、聞かず、語らずして唯恭默道を思ふのみとかや。

（評）俳文の趣あり。

巖谷小波先生選



特別第一賞

斑鳩の塔聳えけり春の雲　奈良威德井橋畔　白藤女

〔評〕宛然一幅の土佐繪を見る感あり。特に座五の雲、却て動かぬ事山の如し。

特別第二賞

頭巾着て寢給ふ母となられ皃　備後仙養山の邊　華月子

〔評〕人情句中の粹。殊に女性の作として一層の妙あり。

特別第三賞

連れは皆十七八や春の風　德島　齋藤菊子

〔評〕只連れとばかりなれど、其連れの皆女性なるを見る。清新にして愛すべし。

天

桃咲きて茶碗のたらぬ藁屋かな　遠江國見付町西坂　宮城梅子

〔評〕田園的詩趣に富む。

地

青麥の中に寺あり馬を飼ふ　越後中頸城郡寺野村　石田喜子

〔評〕前句と正に姉妹たるべし。

人

花疲れよき衣のまゝ寢入りけり　岡山市二日市町　横山亭子

〔評〕艶にして而も無邪氣を見る。只「花疲れ」の語の、やゝ月並臭きを惜む。

秀逸

牛追ふて朝まだ寒し春の川　因幡　三橋春代

律院や椿こぼれて日はなゝめ　安藝　さゝなみ女

春雨にぬれて紅屋をくゞりけり　北品川　橘しん子

釋奠も近江聖りの小村哉　奈良　神の鹿守

中流に舟して岸の柳かな　美濃　内藤みち子

春の山雲に入るまで登りけり　千葉　林緻子

振り向けば彌彦の山や汐干狩　武藏　青柳彌生子

花散るや納具ときたる匣の中　下關　宮原みや子
大寺に男一人の秋暮れぬ　上總　笑女子
刀とぐ椽に陽炎もゆるなり　陸中　津田さつき子
蝶舞や奈良の寺々午の鐘　一關　阿部とみ子

海棠が浮べて見たし化粧水　小石川　吉田あや子
唄ゆるう淀の朧ろを下り舟　千葉　鈴木園子
佐見路や柳の渡桃の茶屋　岩代　丹治はるみ子
石運ぶ牛車續くや桃の村　大分　安田初子
朝日の蓮池渡る微風かな　上毛　五十貝すゑ子
花薫ちひさき春を見せにけり　下野　田中浪子
春風や門の柳の西東　攝津　和久滿子
向ふにも菫こゝにもすみれかな　陸中　遠野すみれ女史
日あたりに寢ころぶ牛や土筆　陸前　佐々木櫻緣女
菜の花やかすかに霞む五家の村　伊賀　笹鶴江子
茶摘女の中に唄はぬ一人かな　松山　山脇幸子
白梅や墨迸る小短册　千葉　みち子
鶯に針落したる乙女かな　下總　直子
梅の雨銀短册をぬらしけり　新潟　岩瀬政子
鞦韆や櫻散ること頻りなり　弘前　みどり子
町へ來て蝶にわかるゝ彼岸哉　小樽　梶水仙子
春雨や避難の親子濡れて行く　三河　山本富士子
麥秀て春雨白き笑子の朔　信濃　美杜里子
炭斛て七くせ一つ見出しけり　豐後　麗子女史
牡丹見た人に乞るゝ薄茶かな　讃岐　かほる女史
春の雨囚人の籠通りけり　廣島　瀨々奇
蠻人の毒矢を放つ霞哉　信濃　山越雪子
友問はん十月の村や春の水　播磨　山下郁子
鶯の來怒日は寒き小雨かな　下野　田村靜子
舟に夜を明石の浦の涼哉　尾張　瀬島政子

行く春や鳥は古巣にかへるなり　多古屋　宮地すみ子
楊柳黄鳥鳴きて暇けり　豐後　花山學子
花雪吹劍に舞まふ美少年　奈良　まこと
春雨や大極殿の物靜　信濃　卯津良子
若楽して師が庵見えずなりに鬼　茨城　貝塚一葉女
蝶舞ふや椽にわするゝ花ばさみ　常陸　川並はな子
十丈の瀑布みをろす新樹哉　長野　飯塚ぎを子
卯の花の門を南へ流れかな　和泉　竹叟文子
草の名を付けて晴れけり春の雨　大分　山中敬子
小闌に鶯を聞く朝湯哉　淺草　朴蝶子
牡丹咲いて奢がましき山家かな　伊賀　菊山かれ子
島一つ向ふに見へて松の月　京都　島田英子
乳母が宿は今し緋桃の盛りなり　能登　千田美芙子
朧ろ夜や吟聲起る花の陰　新潟　中林秀子
神の庭鹿の子あまたつどひけり　豐橋　房枝
陽炎や牛の背かくす草の上　上毛　浦子女史
麥のびて三つ子の脛をかくしけり　前橋　麥隴女史
五月雨や髮梳る人若き　山口　小澤千惠子
長閑かさや背戸の小川に蛋一つ　香川　松永玉水女
初孫を守りあぐみたる日永かな　信濃　山浦楓月子
朝風に櫻ちりこむ硯かな　遠江　中村まさ子
配達とすれ違ひたる燕かな　横濱　山崎京子
杉くらく奇しき花ちる奥の院　千葉　秋葉ふみ子
春雨やまだ戀知らぬ二人づれ　備中　佐藤正子
酒を賣る土手の小店や桃の花　備後　志計子
孤子の宿をたづぬる櫻かな　美濃　内藤みち子
たんぽゝもすみれも出るや緋の袂　弘前　工藤和子
山彦や峰は吹雪となりにけり　靜岡　高木しづ子
永き日や鷄も居眠るかきねもと　常陸　酒葉つれ子
啄木鳥の木叩く音や村閑か　羽後　伊藤鶴子
婚禮の提灯走る春のまち　大坂　杉田孤梟

俳句

撫子の枯れたる鉢や赤とんぼ　香川　松永つる子
踏み切りの灯あはし春の雨　伊勢　葉津惠子
朧夜や町を見に出る船の人　大坂　今非千代子
紙鳶二つ戯ふて昇るうなり哉　備後　都子
瓜盗人ひろ殿の窓をのぞきけり　京都　岩本たま虫
行く水の濁るともせじ春の川　越後　上野志賜子
知らぬ貝に足はさまれし汐干哉　秋田　大越靜子
芍薬の赤き芽を出す日和かな　埼玉　江森しげ子
寺町に土埃りたつ彼岸かな　豊後　後藤花枝
涼しさや殿に砕くる瀧の音　能登　千田星龍女
白ばらの鉢うつしけり化粧室　兵庫　柳田白百合子
春雨に緋桃の蕊をぬらしけり　羽前　花汀女
東京へ行く人多き四月かな　八代みく子
足あらふ池にうつるや楓紅葉　安藝　ちさと
一輪に庭のあかるき牡丹哉　下総　渡辺みよ子
おく庭の緋桃みだるゝ暮の春　鹿児島　醉舟女史
五月雨や宿に聾殿の道者かな　京都　花雲
白菊や月はなくとも花明り　滋町　柔女子
行水や夕日かげらう裏戸口　北海道　水仙子
若草や煙突細き湯屋の屋根　上野　佐藤露子
夜櫻や箱提灯の楼に入る　上総　梶まさ子
山吹や雨を訪ひよる蜆賣　奈良　らん子
夕月に黒き影なり柳島　美濃　中島きく子
梅雨晴や傘なんど干す廓町　越中　藤原清子
ぶらんこや月を蹴上る緋の袴　大阪　綾武幸子
闇の香にふと目さめたる宵殿かな　石川　千鈍子
春寒の銭拾ひし廊下かな　岐阜　耶溪子
姿よりこころにほしき柳かな　矢名
凱旋の兄も交りて花の宴　姫路　堀直子
背参に砲車ひき行く埃哉　越後　藤原鶴子
端午の鳥居に迫る木立かな　千葉　鶴月花子

遣すがらふと鶯の初音かな　芝　芳野芳子
春の夜や公達舟を呼び戻す　東京　松蛍うた子
桃山の絵屏風たてゝ風光る　福井　高芝花野女
おきて見てねて見てやはり春の月　新潟　照子
人とめて脚たかだかとつりにけり　ゆき女
雛子ないて櫓こぼるゝ巨勢野哉　茨城　ひで子
鶺鴒の足洗うて行くや春の水　上総　鈴木文子
遣水鶴人仙に入る夜なりけり　木曾　かせき子
更衣して夕餉にそろふ長者哉　大坂　三宅艮子
大寺を斜にすぎし燕かな　淡路　伊藤紫濱
海だより上臈か門たゝきけり　大坂　高砂みどり
留雨はれて蚯蚓吟ずる日暮哉　上総　森愛猫子
石打ては鮮魚散るなり春の川　姫路　三木君子
春かすみ嵯峨野に牛の乳搾る　盤城　井上芳枝
春の窓や紫高き桐の花　下総　酒井みち子
音もなく芹生潜りぬ春の水　下総　岩井かれ子
緋桃咲く下流れ行く小川哉　淡路　伊藤綾子
白き馬背参の中を行きにけり　越後　藤原花子
永き日の蟹をランプの支えかな　廣島　武子
掛香や花散る里といふ局　神戸　木越美子
大洋に艦遅々として日の永き　遠江　宮城蝶々子
上臈の肩にほろ散る櫻かな　長崎　四島ひさ子
菜の花やゆとりの見ゆる作男　横濱　山上きよ子
さげ髪のリボン追ひ行く小蝶哉　備後　高橋深雪女
桃の花散らすも猫の戀路哉　姫路　堀濱子
梅林痩せたる牛の通りけり　麹町　山下宮子
御陵を埋めて寒し花の雪　遠江　宮城うめ子
あかつきの白梅に星明りかな　麹町　美備子
勾欄に内侍は一人ほとゝぎす　淺野梅子
暮れある馬も繋いて桃の宿　山口　河津才子
朝の花乞食一人たゝえけり　品川　小林のぶ子
掉のせてくだる舟あり春の川　上毛　吉田きみ子
春の夜や門札のぞく歌使　越後　つれ子

文學士沼波瓊音先生選

消息文

地

○都の友に

鳥取市鍛治町五七　上山千重子

片山里はよろづ事おくれ候とか、げに脊戸の紅梅四月と云ふに漸う綻び初め候。都の春にのみ目なれたる身は、只何事も珍らしく、悲しき運命もしばし忘れて、今日もひねもす花咲く陰に、牛追ひ歌を繰り返し候。なつかしき御許様には恙なくてや、定めし今頃は紫匂ふ御袴をめして、明日の豫習など試みたまふ御事と、遙に羨望に堪へず候。師の君達も御氣色美しう渡らせ給ひてか、同じ道わけし友垣も幸くおはすや、うらぶれて、都落ち候ひしはかなの妾を、あはれ如何にかののしり給ふと、想へば〳〵身も世もあられぬ心地致し候。弱き者よ、妾は遂に女にて候ひし、かゞなへば一年の昔、月澄める夜を君と泣きて別れしが、彼の折みてづから、妾が蓬の髮にかざし給ひし紅のばら、今もなほ押し花として手筥に秘め居り候。かなしき朝に、淋しき夕に、冬のごと寒き妾が心を慰するもの、只此の紅のかはらぬ御友情にて候よ。さはれ櫻月夜に、君と調べ合せてし蒔繪の妻琴、さすらひの身にはふさはねど、これのみは離し難くて、はる〴〵田舍の草庵まで具しつるを、さるべき事の候ひて昨日……人手に渡し候。何事も宿世の因果に候ぞや。はづかしき事のかずかず、何卒君の御胸一つに御秘め下され度候。されど決して〳〵御心配下さるまじく、里の小川のせゝらぎに神の妙なる調べはとはに響きて音樂に飢えし妾をなぐさむべく候。あゝもはや筆を運ぶにたへず、君よゆるしませ。

（評）或は逆命を樂み或は運命を悲むその矛盾あるが憐れなり。

人

○都の友に

熊本　湖畔

君よ寂寞になきしは餘り幼き迷にて候ひしかな。

雲雀昇る大空の靈奇瞭然映ずる小窓によりて回顧の念擅なる時「あゝ若かりし」のほゝえみは瘦せたる頰に溢れ候。君よ筑海の庵そはかこちし程淋しきものには候はざりし、情なきものには候はざりき。菜の花つゞく畑

道の夕の雲にも風情は候青麥の和芽かをる野川の朝の水にも詩趣は候はた打けぶるわら家の軒に、汲かはす山の井の釣瓶の音に春の調はこもり居候。「噫人は紙より薄き心ぞ」となげき給ひし君よみ給はずや男はみな黒き筒袖にわらづはきて日は日ねもすの野良かせぎ目なれぬ人は笑はゞ笑へ孜々いそしみの彼等は誠快樂平和の權化なるを。あゝ文明も名利も鶯耳近き戸に倚る己が身には何の意義なきものにこそ候へ。されど胸の小琴の村童の歌にふれて懷舊の譜の高なり抑へ難う君を思ひ出てゝは今も涙に咽び候。疊六の文机の許梅が香身に迫る宵にも候かな。

（評）文明名利悉く忘れてなほ友を思ふ美しき情や。

秀逸

○故里の友に

麻布　五藤澄子

鳥は歌ひ花は裝ひしげき野も山も、霞たなびきて佐保姫のみ姿のみぞ美はしうなりまさる今日此頃、妾のみは君まさぬ春と思へばいかて嬉しと眺むべしやは。あはれ懷かしき君よ。

西の空の戀しさに、それとも知らで渡りゆく雲の一片、いかに／＼流離の身の恨めしく候よ、思ひ入りて獨り小窓の下に、胸を抱いて悲しさのやるせなく、せめてはやさしき君があつき恵みの詩集によりて、狂ひに狂ふ胸のなやみを、おし沈めばやと、涙に濡れし眼を君が揃ひにとてたびたる紫小袖に拭ひやりて、なつかしき集を繙きゆく折ふし、あゝその折ふし、ふと見出し菫の一花、妾は思はず口におしあてゝ暫し人心地もはべらず、胸はいぶかしきまでに高なりてわれ知らず忍泣き申候よ。

あゝ戀しき／＼美代子樣。かつて妾の故里にありける去年のこの頃、君と袂つらねて大津の原に二人むつましく語ひし折、側に咲きし一花摘みとりて、思ひ出の種となむなしつる、あゝこの菫よ、今もなほ色香は昔ながらにゆかしきを、妾はたゞ一人君を殘しまつりて都の空にさまよう、あゝ許し給ひてよ。

お別れ參らせてよりはや四月、日毎夜毎御許のみ戀しうて、人しれずしぼる愛の涙、君よせめて哀れと思し召せ。あゝなつかしき君よ、大津の原は昔ながらの春風暖かう吹き候にや、都の風は常に／＼冷やけき秋風のすさび候よ。

（評）故里に居れば都の風のみ暖く都に居れば故里の風のみ暖くおもはる。

○友のもとに

靜岡　櫻子

郵便屋さんが通る毎にそれかそれかと待つて居た甲斐があつて今日こそは御良人樣よりの御文をひつたくるやうにして拜見すれば、男の御子樣で御兩人樣とも御丈夫で御名は武夫さん、重荷をおろしたやうな氣がして、いつも佛頂面の竹までが今日はにこ〳〵と見えました。しつかりした御氣象は父樣似で、情深い御心は母樣似で、そこで怒りなさつたことのない、御祖母に慣つて、武夫樣の御行末は實に賴もしい。

私は何にしても御子樣が早く見たいのですからよい時分に御寫眞を一枚とつて頂戴、私はもう〳〵奇麗な寫眞ばさみを拵へました、それにはさんで我室を飾る日は いつてせう、それからねまことに申兼ましたが御寫眞の板はぜひぜひ前に御二人樣で御うつしになつたのと一しよのにして頂戴、でなければ寫眞ばさみが不用になりますから、我儘は嬉しさのあまりと御ゆるし下さい。

（評）たしかに眞の嬉しさなり。

○觀梅に人を招ぐ文

山形　丸山留子

今日しも節句に候へばあばら屋ながら觀梅も亦一興と雛かざり餅搗きなどして今日の半日は過して候何はなくとも盛りの花をひとり眺めんは惜しう候へば是非是非二時頃よりお越し下され度大根切るとて右の小指を切り候ものを母とまるめしくだけ餅の加減もおほめにあづかり度くと存じ候ものなるを今日あたりの御勉強は罪作りに候ぞ雛人形に奉るお歌袋必ずお忘れ遊ばさぬ樣希はしう存じ奉り候かしこ。

（評）早速御伺ひ申御馳走にあづかるべく候。



子ども（選外）　下谷區中根岸　上野ふもと女

○文して返事あらざりければ再び

淺草　朴蝶子

綾子さん！昨日も亦學校から歸りましてすぐ『御父さん田舍から返事が來て居ますか』と聞いて見ましたらまあがつかりしましたね『イーャ來て居らんよ』との御返事。まあどれ程がつかりしたとおぼしめす。そして御飯を頂いて寢るとき明日こそきつと届くだらうと樂しみにしながら寢て、起きて、學校へ行つて今日ま

た歸つて來て昨日の通りの問ひをくり返したら、まあ今日こそはと思つたのに今日も亦御父樣は昨日の返事をくり返しなさるのよ。
がつかりしたの何のつてまあ綾子さん、此の十分の一でも察して下さいな。そして早速御返事を頂戴な、妾はこんなに、こんなに待つて居りますのですから、ね、さよなら。
(評) 濃き友情の程も思はれて。

○都の友の許へ

津市　松尾花子

美津子樣、思回らせば去ぬる彌生の頃、思出多き錦橋畔に湧き立つ涙を強て抑へつ、「さらば」と許り放ちし吾が手君が手、聽ては妾も君が跡追はむ身にしあれば、只暫しの別れよと知りつゝも、朝の霧に紛れ行き給ふ御姿を夢の如見送りながら、淋しき哀しき思ひに泣き候ひしが……。
思へば其れも夢にて候、妾とても同じく理想の影に憧るゝあまり空しくかゝる草深き村里に此若き身を朽ち果てむことと思ひも寄らず只一圖に君が跡追はむとのみ誓ひ候ひしが今となりては、そも又夢、只一人の親しき君を欺き己をも欺き、かくて遂に此寒村に淋しき孤獨の苦しみを味ふべき身とは成り申し候。
情ある友よ妾が涙の繰言に暫しを耳傾けられたく候。姉とも妹とも誓ひまつりし情あつき君に別れ候てよりは只朝に寂しく夕に哀しくわだつ海の中なる孤島の島守の如、鳥の音に鐘の響きに幾度東の空を仰いで幸深き君が身を羨み候ひしか。
美津子樣。
かくまでに思ひ、偲び、悶へても尚君を追はざるを不甲斐なしと宣ふか。免ませ、そこには義理ある親子の間、恩愛の絆の此身にまつはり居り候ものを。三歳、頑是なき三歳の秋より吾兒の如育て慈み給はりし義理ある老いませし御母上の、今日此頃老の身の障りありて只妾如き身を杖とも頼まるゝ有難さを忘れてはならず候。
美津子樣!! 心弱しと笑ひますな、妾には此まつはりし絆をも斷ち老いませし母上を後にする勇氣は之なく候ものを。何卒此の草深き寒村に平和に神聖なる教鞭を取りて只冷たき形骸を横たふる自由を御與へ下され度、將又、三年の業終へて目出度故郷に花飾られむ君が身に幸多かれと神に祈る哀れなる友あることも御忘れ下さるまじくこれのみ願ひにて候。
(評) 或人の歌に「世の中は人の上こそ床しけれ羨やむ我も羨やまれつゝ」

○遊學を親しき友に報ず

石川秀子

春子樣なつかしう候。

妾が常々泣き悲しみ只々出來ぬものとのみ思ひ居りし學びの道遂に父上も許し給ひて愈々明朝は東都へ遊學の途に就くことゝ相成り候よ。

今しも裏に啼き居り候鶯も常なれば悲しき種に候へ共今日のみは嬉しう〳〵聞え候。

あゝ許し給へ亦も涙のこぼすまじとはすれど拭ふひまなくて筆にじみ候を。

昨日まで君へ參らせし文の數々は皆悲しき涙の雫ににじみしものなれど今日のみは嬉し涙の雫に候。

あゝされど春子樣妾これより只一人兼ねて聞きたる賑しき都大路に友もなく寂しくも遠き君を忍びて袂ぬらす身かと思へば又も悲しき涙のあふれ候。

おゝ春子樣この最後の一雫は妾が明日は行くべき都にて夕日彩る空を戀ひ、夜ふけし孤燈の元君を思ひて思はず落す其ときの悲しきしづくとおぼし召されせめて思ひ出させ候折々は東の空なりとも眺め給はれよ。あまり嬉しく悲しさに胸つぶれ候て筆運び難く候へばこれにて筆とめまいらせ候。

猶又彼の地に到着せば直ちに文差上ぐべく候へば呉々も御壯健に御勉學の程願上候かしこ。

（評）眞の友情は別離の際に解せらる。

○花のたより

大阪　杉田孤泉

○

妹よ、御身ひとり我が家をはなれてより、我が家庭、頓に淋し、桃の節句も來りぬ、されど、御身あらざるため雛人形もいつになく淋しげなり。

庭の桃も數日以前より咲きそめたり、美しう。願くは、妹よ、この桃の花を手折りて、御身の髮にかざさむ日の近からむを。

○

春雨の漸く止んで世は暖く、今や堤の櫻は滿開となれり。今、そが花の二つ三つ、その香を妾が言の葉とともに封じて送らむ、妹よ、願くはこの花を見て、ふる鄕のけふ此頃を忍ばせ給へや。

○

あゝ、滿開の菜のはな、妾はけふ野邊にひとり立ちて、恰も蝴蝶の如く、恍惚として、苦も悲も愁も、凡て忘れたり。

あゝこの美しの春の眺は、都びとの想ひ能はざる處ならむ。

○

人の中にて女はそが花なり、女の中にて少女はそが

花なり、少女の中にて心根優しきはそが花なり。あゝ、この世に花とにほふものは、げに花の少女にてあらずや。

わが妹よ、妾は御身もまた花の如く淸くやさしくなり給はむ事を祈る。

（評）花につけ月につけても妹を戒むるを忘れず。

○故郷の父母に送る

大和　和田芳子

戀しき膝下を辭し候は、實に昨日のやうに思ひ候ひしが烏兎匆々、最早一年を夢と過し申し候、御兩親樣には御變りもこれなき由、何より喜ばしき事に御座候。私事もいとすこやかにて、日々勉强致し居り候、近頃は試驗前の事とて、何かと心掛りに存じながら、御無沙汰致し申わけこれなく何卒御ゆるし下され度候。あゝ思ひ出せば去年の今頃、靜かな雨の朝に候ひしが、戀しき故郷を後にして、汽笛の一聲に限りなき恨みを殘し、黑き煙に盡せぬ名殘を止め、轟々たる車の響に心は碎けんばかりの思をなしつゝ此都に來りしはげにうれしさあまりて悲しみの極みに候ひき。草深き田舍よりの上京とて、初めのうちは萬事勝手知れず、深更人定まりたるの時、微かに響く鐘の音を聞きては望鄕の念に打れ、彩雲淋しき夕べ、鳩の行方を眺めては、極りなき悲しみの淵に沈み、さては散る花、亂るゝ雲に思ひをよせて、故郷偲ぶの露に袖を濡らし候事も度々に候ひしが、一と月二た月と慣るゝにつれて、その悲しみも薄らぎ、親しき友のさま〲慰めくれ候故、今は却つて面白き位に御座候。學科は幸にも優等の方にて、この分にては今度の試驗も首尾よく及第出來る事と喜び居り候。花の都の今日此頃、それは〱賑はしきものにて、知らず知らず心浮に立つばかりに候。さるにても、昨年父上の御植ゑなされし八重櫻の、今年は嘸かし美しう咲き出て候事とそれのみ思ひ出でられて、なつかしう存じ候。

御二方樣にも、御自愛專一に祈り上候。

尙此寫眞は、先日友人と共にうつしゝものにて、見苦しく候へ共、すこやかに肥え太りたるさまを御覽に入れたさに御送り申候。

（評）情强くしてしかも亂れず筆つきもおだやかなり。

○行春の宵（都の友のもとに）

福岡　古屋ちか子

○

しと〱と濺ぐ春雨に今日も亦暮れて候。

壁に貼り付けし古新聞も讀み飽きし、今日今頃、一入に、かゝる時の無聊を慰め玉ひし君の偲ばれて候。

しと〱と降る春雨に今日も暮れぬ、一人さびし

き文机のもと。

○

つれ〴〵のまゝ古き物語など、ひもどき候へ共、なにとなく心うつらず、夢にきくらん如き、裏のさゝ川の微妙のせゝらぎの、心耳にひゞくらん心地せられて、そと窓のとをおして庭の面打ち見やれば、雨ほそうして、緋桃、白桃なかば散りつくして、いかに中庭の、春の色の褪せて候よ。

雨細き緋桃白桃色あせて、あはれ我世の春逝んとす。

○

色褪せし緋桃の花、二片三片、ほろほろとこぼれ落ちて、池の面に、美しき波の輪ゑがきつゝやがては皆、苔青き岸へと漂ひつく。

かくて我世の春は逝くにて候。

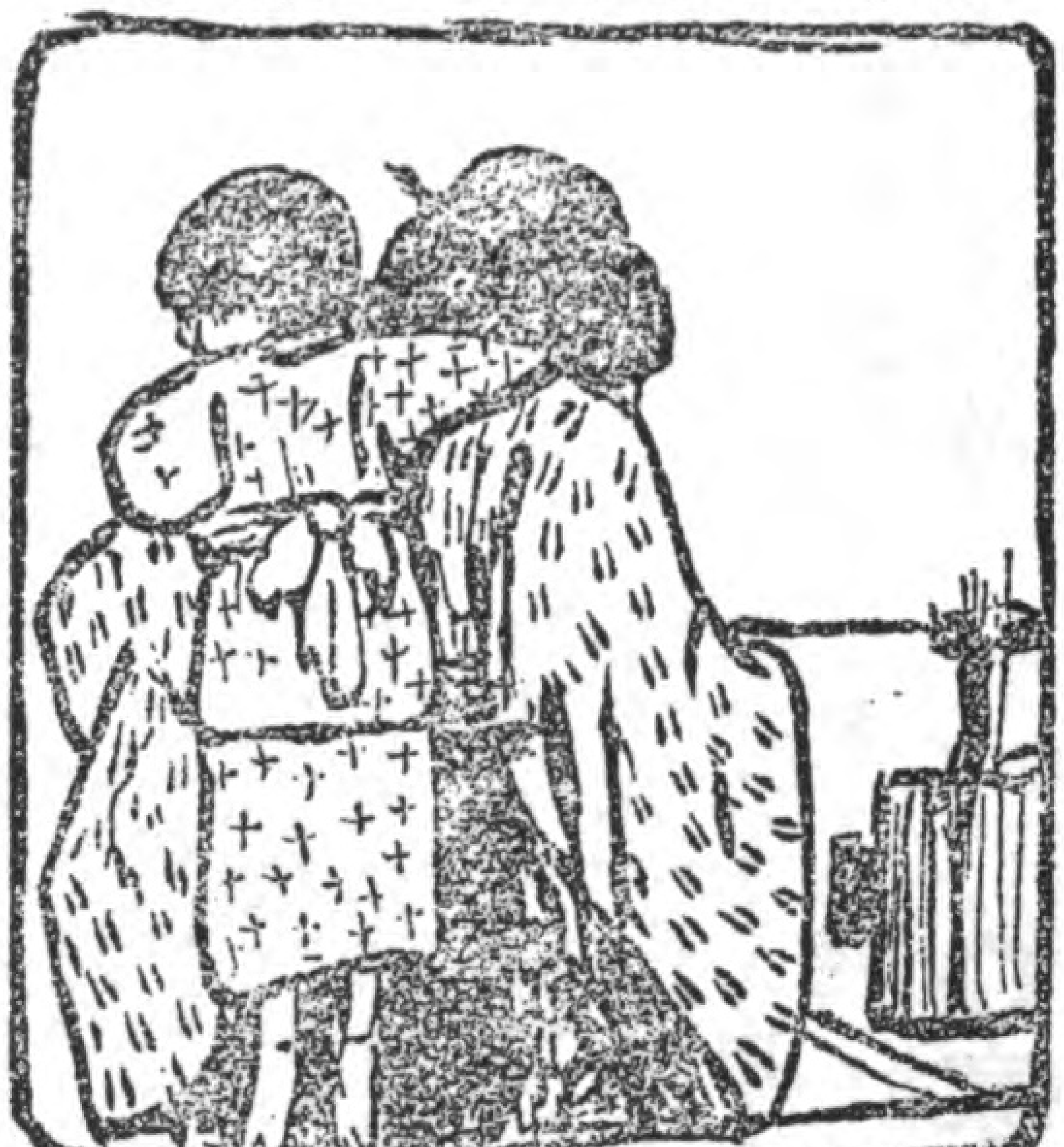
ほろ〳〵と緋桃の花のこぼれ落ちて、行春さびし山かげの庵。

（評）細き趣あり。

○雨の夜となりの人へ

四谷　しらぎく

おんぶしてよ　（賞外）



岐阜縣席田　川村つま子

むなしく散れる花の梢に、しと〳〵と降る春の雨、又捨てがたき風情には候はずや。

かゝる宵にこそ、ともしびをくらきねやの内に、古き文反古取り出して、戀になやめる乙女もあるべく、窓の障子に艶なる影うつして、粋な爪彈に思を唄ふ、浮れ女もあるべくと存じ候。

あはれ今宵の君様が御こゝろやいかにかして。

（評）風情ある文。

○病氣全快を報ずる文

長野　山越雪子

庭の石燈籠も、見えぬまで積りし雪も、いつしか消えて、柳の枝の目につく頃とは相成り候、御許様には何時も御健かにて學びの道御いそしみ遊ばされ、萬づの道いみじう御進みなされ候事と、朝夕羨しう思ひ居り候、思ひまはせば、昨秋紅葉狩の御供いたせし後の事、ふと病の床になやめる身と相成り、唯うきふしのみ多く、月日を送り候、折々御許様の事思ひ出られ、一日も早く癒えて御身と樂しく遊ばんとをのみ、明けくれ

ねぎ居り、只管醫師の戒めを守り居り候、人目も草も枯れて寂しき冬の日の病きも、母上の懇ろなるみとりと、妹が何くれとなく、さかしき慰めにうさも忘れて、只身の保養にのみ心をもちひ候、漸々快方におもむき、昨今は庭の掃除位は、出來得べく相成り候、之れ偏へに母上の御蔭とよろこび居り候、母上の御手の皹のふかきを拜み侍りても、思はず涙にくれ候、妾健かにてあらば、かばかりの御うきめ御かけ申さじ物を、なれ給はぬ水仕事に、かく御身をそこね申せし、妾の罪御許し給へとなん、身のかよわきを咎め御詫び申し上居り候、こは兄上が此頃送りこせし、足柄山より望みし富岳の圖、其まゝを縫ひし物と、妹が學校の歸りに、冑塚あたりより、摘み來し菫の一把、そを妾が用ひし藥の空瓶に活けたりしを、寫生せし物に御座候、御笑ひをもかへりみず、病氣全快のしるしにもと、そへ進らせ候、先は御知らせまで、かしこ。

（評）やさしき文なり。

○友の死去を他の友に知らす

赤阪　森　ふさ子

あゝ、殘念なことをしました、露子さんは今とう〳〵逝つておしまひなさいました、あゝ、こんな事と知つたなら今少し貴孃をお歸ししなかつたに、眠るやうてした、お母樣や私達の嘆きをも知らないで、貴孃があした小川から卒業式の寫眞を取つて入らつしやるのを樂しみにして入らつしやいましたがもう出來て來ても見ては下さいません、露子さんはもう此世の方ではなくつてと思へば夢のやうで、御名のそれよりも墓ないお命でした、間もなく病院をお引取になりますからお宅の方へ入らしつて下さいまし、私はもう涙も枯れつくしましたが、あなたのお嘆きは目に見えて、どうか冷たく永眠つて入らつしやる露子さんにお會ひなすつてもどうか成丈こらへて下さいよ、餘りお泣きになるとお母樣がなほね、それですからどうかねこらへて私はもう手がふるへて此先書けませんから後刻御面會の折にいろ〳〵申上ませう先は取り急ぎお知らせまで。

（評）悽愴。

○家郷に試驗成績を報ず

陸前　尾形千代子

玆に謹んで御兩親樣の膝下に嬉しい喜ばしい福音をお傳へ申します。

去る二十日から擧行の定期試驗、妾も今度こそは愈關が原天下分目の戰と、腕限り精限りウント力を入れて受驗いたしました當時の消息は既に申上ました通り、それから發表の日を一刻千秋の思で待て居りましたと

ころ、實に意外ほんとうに豫想外にも、今朝六時の貼出を見れば平均點九十五點同級の第一等、さて見違へたのか知らんと猶眸を据て幾度も見ましたが、矢張第一等、妾は嬉しくつて喜ばしくつて夢の樣にも思はれるのですが、全く夢では無いのです、あまりの嬉しさに電報でお知らせ申さうかとも思ひました位、翼があるなら飛んで行つて今直ぐお話して、お喜びなさるお顏を見度う御座います、今何だか氣がゾク〳〵して長く書て居られませんので、一通りお知らせまで如斯申上ます、どうぞ私が幸を欣んで下さい、左樣ならば。

（評）おきどころなしとは斯る嬉しさのことか。

○古里の友に

徳島　木戸玉緒

過つる秋の末つ方、刈田の枯草に、長き黑影ひく夕月夜に、御別れまゐらせ候てより、青葉の茂る此頃まで、御消息もきこえ上げざる怠りの程、なめしとも怒らせ玉はず、かへりて、度々の御おとづれ、いとも嬉しく候ものから、今更ながら恥かしく存じまゐらせ候、誠に我身此地にものし候は、初めての事なれば、わが逍遙の地として「ヴアルハイム」を撰びし如き心地いたされ候ひしが、會ふ人影も見ず知らず、よろづに心細く、親しく語る友どちもおはさず候まゝ、うち過ぎ候こと思ひ出てゝは、早思いいづる御許のお姿、妾は其度毎にえも云はれぬ感にうたれ候、さては昔の樂しかりしぞ、物學びとは云へ、などてかくも遠く家出しけんと、袖におく露も數增すのみにて候、春雨のしと〳〵と降りすさび候今宵は、一際物さびしきに、獨窓押しやりて、あなたの空にこそ我親しき友の、恙もなくいますらん、今頃はお手馴の琴もやものし玉ふらんなど、故郷の空遠く思ひやりまゐらせ候、思へば去年にて候ひき、互に袖重ねて、日沈みし後の黃昏の雲美はしく見ゆる夕べ、夕雲と題して、歌詠みしなど、思ひ出て候に、今は千里へだてし身の怨めしく、堪へがたき思ひに沈み、君なつかしと思ふ折柄きみよりのお便り、うれしさに、心のもつれも解けまのあたり御目にかゝりし心地いたし候。

よろづ細々の御心づくしかへすがへすも、拙なき筆とりて御禮申しあげ候。

いて是より暑さも一しほ增し候はんに、御病氣めさぬ樣ひたすら、御身をおいとひ遊ばさるべく候先づは、かしこ。

（評）美し。

○桃の花を送る

高知　野中すみれ子

野づら川づら春ふかく、土筆摘む子のうたゆるやか

に、うまし女神の手ずさびか、紫かすむ朝窓の下なる白桃の三尺ばかりなる梢に、二つばかり蕾を破りて、例へば眉うら若き乙女が朝湯姿の優しげなるにも似通ひて、春には花多けれどかばかり氣高く、且つ艶なるは、見當らず候まゝ日頃に睦ぶ君が御許に。

おゝ思ひ起せば、去年の桃の節句の雛壇の前五彩の糸もて君と二人手毬飾りの最中頃あどけなき妾が弟のまはらぬ舌もて、姉さんこれ人形樣へと、二人の前に差し出したる桃を、こは生花のよき料やと、君も妾もきりつゆがめつ立派に出來上りて母に賞められ和歌を白きリボンに、さら〳〵とかき綴り、花に結びしはいと興高き夕にて候ひしかな。

あはれせゝらぐ水の音は絕間なく移ろふ時を刻みつゝ世は再び白桃の咲く頃と相成候さてもふるき思出に君にさゝぐるこの一枝何卒春戸の小川の水に養ひて昔の思出となし給へかし。

（評）用語に注意せらるべし。

○春の野邊より

徳島　花世

喜久子樣あれよ、御覽じたまへ。

霞といはじ花の木の間をたゞうら〳〵と立ちのぼりゆく、そは夢姫がいぶきに似たる春の氣を。友よ。

あはれ卒業のよろこびを抱いてかへり來てし故郷の春野。理想にもゆる我がこの心の、のぼる大氣に溶けて流れて、嗚呼夢よ、早う三日をすごし候、醉ふらんごとき田舍の春色‥‥友よ思ひ見たまふべし春光は今日屋後の桃花の梢にあたゝかく候。いろどりよしや。菜の花畑の、胡蝶さまよふらんはなほ‥‥あら白きが二つ。あひみあはずみ里わをひくう、まこと君と我とがまじらひのごともつれとび候、山寺のいらか古きに掩ひかゝりし櫻の枝、春の日蔭のものうげにして、げにきざはしの三四の段に片手してものいひがほの、ほころび姿。これやかの女詩人が溫かき血汐にとけしものにてぞはべらん、友よ。田舍大野の春色益々ふかゝらんとし、田舍の春氣いよ〳〵盛に候。かくて今十日あるひは二十日、我身田園の大氣に感じて、平和を讃美の天使とならん‥‥喜久子樣。

（評）よき句あり。

廣津柳浪先生選

短篇小說

天

○葉櫻

靜岡市東町九番地　大石うめ子

春闌けた龍華寺の葉櫻は輝る月に影を長く階段に印して居る、折しも本堂を左りに折れて前の小高い丘、文學博士高山林次郎氏の墓標の横にどつかと腰をおろした二人の男女があつた、男は面長く鼻高く眉毛の濃い天晴の好男兒で紬の飛白袷に白縮緬の兵兒帶を結び放しにして白鼠の中折を眞深にかむつて憂悶の色が面にあふれて居る。女は圓顔の目はぱつちりして色あくまて白く鄙には珍らしい顔立て丸髷の崩れかゝつて、ほつれ毛がうつむき勝の顔にたれて居る、「あゝ實に既往は夢幻しの樣だつた、僕は貴女がこんなに心が變らうとは思わなかつた」、と嘆息する「ほんとにすみませんあなたが戰地へ行つてから少しもお便りして下さらないものですからお父さんやお母さんが、いくら待つて居たつてむかうではそれほどに思つて居ないから、手紙一本もくれない當にならない男をまつより他家へ行けと云われましたが、私はもう少し待つて下さい、あの方に限つてそんな人てはないからと云ひまぎらしては居たんですが、あんまり進められるので、それにあなたからは、ちつとも御手紙を下さらないんだし、よんどころなく行く事になつたのですもの、何にも私の心が變つたと云ふのでわありませんわ、なぜあなたはお手紙を下さらなかつたのです、一本位下さつつたてよかつたぢや有ませんか、私は實にあなたを恨んで居た位ですわ、それを心が變つたなぞとわあんまりひ、酷いわ……」女は半巾て顔を覆ふて涙に咽んだ、「それあ僕が手紙をよこさなかつたのは惡かつたが何にも貴女の心次第ぢやありませんか、貴女の心さへ變らなきやあ、誰が何と云わうが、何んと進め樣が、貴女は貴女で誓つた事を守らねばなりますまい。滿更手紙を送らないにした處、三年の五年のと云ふじやあなし戰地へ行つて居ては何んだかかんだか軍務にせわしいから遂出すひまがなかつたからだ、こんな位ならいつそあの時死んで終まつた方が增しだつた」とぶる〳〵と身

慄してきつと齒ぎしりをすると唇破れて血がにぢむ「私が惡るかつたんです、貴君の御腹立も御無理とは思いません、政夫さん、勘忍して下さい」瀧の如き涙は彼女の面を傳ふ。「勘忍するもしないもないじやありませんか、貴女の心で貴女がしたんですから」男の顔は恐ろしい程血の氣失せて居た。

折から鐵舟寺の鐘が遠く田面を掠めて消えて行く、清水あたりは豆の樣な燈が漸漸へつて行く。

「最う今更何んと云つても取かへしのつかん事ですからこんな愚痴は止めやう、其れに人に見られでもしたら、貴女の名譽にかゝわりますから、いや人の妻に對して失禮申しました」「けしてそんな事わないわ」と口の内「どれ歸宅しやうか、然し僕は今夜限り貴女とは會われないか知れません」



と男は早立ち上らうとした、「ま、まつて下さい、まだお話したい事もございますから、どうぞ政夫さん政夫さんネネ勘忍しると一言云つて下さい」とさすが語尾は亂れて居た「おはなしなさい僕を止めて如何するのです、僕の樣な者には何も用は無いはずです、お放しなさい」と云ふ「いえ放されません、私の云ふ事を少し聞いて下さい」と女は男の袂にすがりついた「えつ……」とふり放して男は早くも階段を早足に下りて行つた。

女は嗚咽の聲を漏して着物の砂を拂ひもせず、いつまでもそこに居た。

今回の懸募中の首位は確かに此篇である、最もいくらか「金色夜叉」の倣もあるが、眞似たと云つて咎める程でもない。女も男も能く表はれて居り、筋にも文章にも無理は無い（選者評）

人

○疑惑

富山縣西礪立野村　北山雪江

教會の說教が今終つたのと見える、老幼男女どやどやと門を出る、中に一人の婦人『けれども何だよ：……』と小首を傾けて、廣小路を西へ〳〵と歩んで行く、風は身を切る樣に寒く、月は浮雲に覆はれて、今にも降らん雪模樣である。

今迄考へ通しに考へた婦人は、

『何故再緣をしたら操が穢れるといふのだらう？、再緣せずに居て、何かと空想に耽るよりは……』肩掛の中に首を埋めて、荒ぶ夜風に裳裾吹き拂はれるのを事ともせず、なほ西へ〳〵と歩を進めた。

＊　＊　＊　＊　＊

宵の間の嵐は靜まつて、月さへ物凄う冴へ渡て居るかと思ふと、又忽ち墨を流がした樣に空は掻き曇るのである。

『ア丶厭な晩だこと……』つぶやきながら戶を閉して內に入つた、彼方の壁には亡父の肖像が懸つて居る、此方の長押には貞操の二字の扁額が、殿に懸けられて有る。

『此扁額の二字は自分が撰んだのではないか、自分が撰んだ貞操に對して、疑惑が起るのは何故であらうか、これを撰んだ時代の自分と、今の自分と何も異つては居ない筈である、勿論偕老同穴を契つた吾夫は今世に居まさぬ、けれども自分は……』

更けるに連て夜は益々寒くなつて來て、今は雪さへ降り積つた、婦人は其夜は終に一睡もせず何事か考へ明した樣子であつた。

再緣——貞操——疑惑、殊に戰後の婦人界には多き起るべき問題で、疑ひは疑ひを生じ、今の婦人に自覺せしむるべく、餘りに荷が重すぎるので、此篇の主人公の如く、只煩悶するに止まる（選者評）

秀逸

○小松原

岩代　服部すゐせん子

「俊夫樣！」

小松の影の處々に思ひに瘦せし身の影を、細長う交へてそゞろ歩きの俊夫が後に、美しきさはれ密かの呼聲捕ひ得ざりし想より我に回て振り向く俊夫が傍にそと走せ寄つた色白の人。小豆色矢飛白の袷一つに、水淺

黄色の帶を、裕かな背に少さくぴつたりと結んて、眞白き襟のさて品も宜う。

「千賀さんてしたか」

俊夫は褪せたる其顏に、大人な氣もなく紅葉を散らした。大島絣の丈長き羽織の肩を張らして、兩手を白の兵古帶の間に差し込んて、うつむき見る芝生の上に夜露重げの紫菫一もと。無言に立ち止まれば、千賀子も無言に、其楓々しき手に摘みあげてそと接吻つ。

「あの俊夫樣……奧樣を可愛がつてあげて下さいまし」と唐突に、語尾をやゝきつぱりと言ひ出でた。驚き顏に、俊夫は千賀子の顏を見入つてまた差しうつむいた。

「私、突然にこんな事申上げて……ても何から先に申上げて宜いのやらわからないのてすもの……」

「私存じて居りますの、貴君が奧樣にお辛らくなさるのを……毎朝婆やさんに伺つて能く存じて居ります。お可哀そうぢやありませんか御容子と言ひお心立てと言ひ是と言つてお惡るい處の無いあの秋子樣を、どうして彼んなに冷淡になさるんてせうつて婆やさんがいつも私に口說くのてございます。それは貴君がお心に召さなかつたのを何したのは存じて居りますけれど……俊夫樣女と言ふものは弱いものてございますよ、一生を賴む夫に素氣なくされちやあ……まあ秋子樣のお心はどんなてせう……俊夫樣！何卒可愛がつてあげて下さいまし」

「……」

「私何もこんな事を、貴君に申上げずとも……とお思ひなさるてせうけれど私、秋子樣がお可哀そうてお可哀そうてこんな差出がましい事を申上げるので御座います。またそうして戴かなければ私の爲にも……」

「俊夫樣……實は私はあの桑原さんから疑はれて居るので御座います……」

「え？」と口惜し氣に唇を嚙む千賀子の白き面を、愕然俊夫は見入つた。

「いゝえ親御さんの情として決してお無理てはございません。私の宅は貴君のお隣り、常に足繁く出入りをして居るのてすもの……それに貴君が秋子樣に冷淡になされば……」

「……」

「私は決して怒りませんし怨みもいたしません、口惜しうは御座いますけれど私は潔白なことは神樣がご存じて居らつしやいますもの……たゞ私の身の疑ひを

晴らして下さるのは貴君のお心一つでございます、貴君がお優しくなさる、それ一つで御座います」

「……」

「俊夫様！貴君のお心は私能く存じて居ります！」後れ毛諸共、白きハンカチを噛みしめて月に立つ影のやがて俄破と芝生に伏して。

「私もお慕ひ申して居りました！」

「えつ！千賀さんも……」

松並木を通る馬の鈴月に冴えて、誰が流しゆくか寂しの歌。

　君と別れて松原ゆけば……
　　松の露やら涙やら……

遠き野寺の鐘の響消えて、月白し。

「俊夫様！奥様を可愛がつてあげて下さいまし！」

例に依つて達者なもの、殆んど隙間はない、此人、作家たらん志あらば、今より努めて修養せよ、只軽々に筆を弄んで、自らの才に驕られつゝあるは、惜むべき次第であらう（選者評）

○柳の門

豊橋　房枝子



春の川（選外）　神田　村地たつ子

上

おゝ姉さん久濶と主人正左が言へば、差對に坐りし姉のお大、好き程に挨拶済して、正樣、お前樣未だ御存じないか、私はちらと聞込んだが、お絹樣が近くに來て居なさるとの事ぢやの、と言へば、正左驚きの目を瞬りて、絹めが、左樣でござりますか、而して何處に居りまする、と忽諸ならぬやうに膝を乘出す。お大苦き顔して、吹殻を丁と撃き、暴に煙草を結め込みし煙管を膝に支いて、お前樣お逢ひなさる意かいと、眞向より切込めば、主人面を正し、正左も男でござりますれば、那麼不屆な眞似して、遠國へ走つたやうな女に微塵も未練は殘りませねば、逢ひたいとも見たいとも存じませぬ。唯念の爲にお聞き申したばかり、然ればこそ戀しがる娘にさへ、那麼者を母と思ふが最期父の子ではないぞ、母は亡き人と諦らめて名も言ふな、逢いたいとも思ふまいぞ、と固く吩附けてありまする、お訊ね申すが惡くは伺はなくとも差支ござりませぬ。と膠もなく言ふに、お大おほきに狼狽て、お前樣那麼に眞劍にお成り

ては困ります、私は何も惡氣があつて言つた譯ではない、然した心で居てくれゝば眞に安心といふもの。お絹樣の居る處は、此市を出外れて並木を一丁程行つた何とやらいふお宮の前の、門に一本柳のある家ぢやそうな、聞けば緣續とか、以前大相お絹樣が目を掛けて遣つた人ぢやとの事。それでお前樣厭ぢやないか、今では肺病だとの話、那の病に罹つたら所詮助かるのではない。此年になつても命は惜しいから、私なんぞは聞いたばかりでも慄然とする、眞に一時はお前樣の顏へ土を塗る憎い仕方と思つたが、結句愆うなれば幸福さ。家で煩はれて御覽、豈夫追出す譯にも行かず、お前樣やお雪に迄傳染らうも知れないし、私だつて一月に唯一度實家へ歸つても恐くて溫湯一ぱい安氣には飮まれない譯。あゝ他で病んで居るので有難い、……が這麼事曖にも出してお雪に悟られてはなりませぬぞえ。と言ふも愚かや、それからそれと語り續くる座敷の外の、庭の花雪の如く散りかゝる椽には、何氣なく來し娘のお雪、お絹と母の名をいふ聲の洩るゝに、さてこそと胸轟かして、忍んで立聞く姿寂し。

下

神に詣るなら親から先よ、親に增したる神はない。どうどう〳〵、と早遠くなりゆく馬士の一節に、松風に和す鈴の音賑かなりし昔の樣の偲ばるゝ並木の下蔭にて、立停りしお雪は始めて我に返りて四邊を見廻はし、まあ私は何うして這麼寂しい處へ一人で來たのか、叔母樣のお話を聞くと等しく、唯母樣に逢ひたくて家を出たのも道を步いたのも恰て夢中であつて、最早暮れるに間もないのに女一人で這麼處を物騷な、父樣が待つて被居らうに急いで戾りましよ。といつて此處迄來て空しく歸るも口惜しい、あれ向うにお宮が見える、眞に其前の家の門際に柳が一本、彼家に母樣が被居るに違いない、あゝ逢いたい懷かしい。と又も飛立つ如く思ひしが、旋て心も稍鎭まり來れば、今更我身の慌しかりし振舞の顧られる。ほんに初めて行くのに土產なしでは母樣がさぞ辛からう、今日は他所ながら垣の外にでも居て、那のお聲一言聞いて戾りましよ、然う然う其が宜いと足早に來て綠濃かなる柳の下に立ち、荒く結ひ遶らせし垣の間より伺へば、庭寂として山吹の散るばかり。身に泌む夕風を厭ふてや障子殘らず鎖したれば、座敷の內は知るべくもあらで、早點きし燈火の隙間を細く洩るゝのみなり。摘草の歸とも見えぬ少き女の然も艶麗なるが誰待つとしもなく垣の外に彳

み居るなれば、花に心を留めぬ程の行來の人も目を側め、顧る者さへあるに、お雪何となく憚られて俯向きながら、漫ろに家の事思ひ出して、嗚呼々々、惡い、惡い、私は此儘歸りましよ、父樣が那の樣に被仰るもの、恁うして來たのを御知りなされたら甚麼にお怒りなされやう、何處へとお尋ねなされたら、何とお答申したが宜いか、逢いたいけれど逢つては惡からうと、いつて其は表面、私は這麼に成つたのも皆母樣の御蔭其母樣が今病んで被居るといふに、何して知らぬ顏がして居れやう、母樣に甚麼落度があつたか知らないけれど、此處に被居りながらお便さへもなさらぬ處を見れば、屹度御後悔遊ばして被居るに違いない、其だのに一目お顏を見る位ゐが……と思ふ時、座敷の方にて激しく咳上ぐる聲、あ、あれは紛れもない母樣、と覺えず顏色變へて、我を忘れて走入り、颯と障子を押啓くれば、内には看護の人もあらず、燈火の影に見合す顏、母樣、えッ、まあ雪ちやん、とばかり起出でむとすれど母は其力もなし。お雪は狂氣の如く身を轉ばし、母の手を握りしめて、お懷しうござんす、と咽び入る胸の中には、最早浮世の義理も人目もなくて、母を思ふ念の烈々として燃ゆる許りなり。

文體は初期の硯友社——德川文藝の名殘を止めたる——の風に似て、輕快無比、稍時代後れの氣味はあるが、今の青年に此位ゐ達者に書ける者は稀であらう（選者評）

○五月闇

備後　池田郁子

「水島君江、年齡四十一、人相……。同苗靜枝、年齡十九、人相……。
右兩人の所在御通知下されたる方には金五百圓謝禮致すべく候。
韓國統監府事務官
水島則久」

四月二日の「廣島時報」に此の懸賞廣告を見た人々は、其裏面に潜める秘密の解釋を、樣々に試みたであらう。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

「何樣かしてお前に些時でも、今夜の庭園の景色を見せたらと、お母さんは其れを思やね……、」

玻璃越に、朧の月影を浴びて折からの習風にパツと暗香を散らす植込の、白梅を眺乍ら、君江は密と泪を拭いて、

「私斗り觀のは勿躰ない樣で……、なまじ交換の能る事ならお母さんは構はないから、一眼なりとお前に與り度いけど、靜や、そ……其れも能ないしね……
…。」

愛の籠つた言葉――鼻をかみ乍ら咽せて……。

「お母樣！勿……勿躰なう厶います、其御言葉を戴きました丈けて、私、眼の明いた程に、う……嬉しう存じます」靜江は穢り落ちる紅涙を袖に拭ひ、「種々御心配を懸まして、猶此の先數々の御心配を懸ますよりは、生存て居て……詮の無い身てありますから、私や寧そ、死……死んて了い度う厶います…………。」

「何をお言ひだねえ、靜ちやん。最う〳〵其樣こと二度と考たり言つたりしないでね、お信神をして些も早く好く成る樣にしなきや不可よ。お父樣も韓地て何樣に御心配して居らつしやるか知れやしないからね、萬一お前が思切つた事を爲てお呉れなら、私がお父樣に對して申譯が無いぢやないか、ね、靜や、好いかゑ。」

「ハ……ハイ。色々考ますと何だか世中が厭になつて參りますので、ツイ心にも無い事を言つて、御心配を懸まして、誠に濟みません。最う彼樣言は屹度申しは致しませんから、何卒御安神遊ばして下さい、一心に御信神を致します。神樣のお蔭て些ても好くなりましたら、お母樣！何樣に嬉しう厶いませう……。」

寂しく笑み乍らランプの火影を受けて母を仰いだ靜枝の顔―細面の色白て、加之愛嬌こぼるゝ斗り美しいのが、あゝ可憐らしや、優しく涼しく、露に宿る星の樣に清かる可き鈴の眼は、彼女が高等女學校を卒業すると間も無く、角膜炎と謂へる難治の眼疾に罹りて、廣島縣立病院に入院し、いづれ醫藥におろかは無かりし甲斐もなう、左眼全く明を失ひ、右眼も亦殆んど視力を失ふて、唯朧氣乍らに明りを認め得るのみとなッた。あはれ親しき友垣と花野の露に紫袴の裾を匂はせて、溢るゝ青春の希望を語りしも今は唯追憶の果敢ない夢!!。泡沫の行末を思へば多年修蓄した學問を仇に棄てて、此儘我世の春は老い行く事かと、只管に悲しく淺間しく、寧そ現世の苦艱を逃れて未來の慰安を索めんかと思ふた事も幾十度てあつた。雖然母も亡後の父母の悲嘆幾干なる可きかを思ふては、獨り其身の薄倖を泣いて思ひ止まつたのてある。

今宵も日頃の胸を語出て、慈愛厚き母に慰められて其塲は兎にも角にも言納しものゝ、生存て詮無く希望なき、身の行末を思ふては、臥床に入つても眠られず、悲愁憂怨に胸を掻き亂されて、泣きて哭きて夜衣の袖をしとゞに濕した揚句、靜かに顔を擡げた靜枝は、四邊に耳を欹てゝ母の高き鼾聲を聞澄し、突と起上つて

平常衣を着けたる儘、一竿の杖を頼に密と我家を忍び出でつ、月明に田圃道を南へ街道に出て立つた。己斐、江波、嚴島の島山は模糊と霞に包まれて恰かもパノラマの樣。森々たる廣島灣の彼方似島の邊り、白く頽れて波と寄せる滿潮に聲乘せて來る千鳥の音哀れに細く、魂闇に引入れられんかと斗り、茫然として冥想に沈んで居た靜枝は、スウと鼻を突く梅の香に眞白の首を襟に裡めて、ホッと吐息を洩し、

「百花園の梅も早や滿開らしい、何樣にまあ倚麗だらう。左樣々々彼れは去年、慥か卒業式の五六日前だつたけ、園城樣と花瓣を掌に受けて塊に爲乍ら互に志望を語合つて、淑女大學の文科へ入るお約束を爲たのに。園城樣は目的通り入學しッたけれど私や此樣な不具に成つ了つて……、本當に私の樣な薄倖な者は有りやしない。人は希望に生存るつて聞いたが本當だわ、私の樣に希望を奪はれた者は何樣に考て見たつて生存る氣は爲ないもの……。お父樣やお母樣に先立つのは濟まないけど、生存て居る此の先長の御心配を懸けるよりは今死んだ方が却つて幾干か御心配が些い譯だ。明朝私の居ないのを御覧なされたら、嘸御母樣はお愕きなさるであらう、今日の彼のお言葉では嘸御立腹遊ばしてお泣きなさるであらう。お父樣がお聞きなされたら、近い處とは云へ外國にお居遊ばすのだもの、何樣にお悲嘆遊ばすだらう。だけど生存甲斐の無い身で此の先數々の御心配を懸て、自分にも悲い思ひ許りするよりは、寧そ今死んだ方が何樣に幸福かも知れない、幸福！本當に其方が倶に幸福だわ。何樣考て見たつて死ぬより外は無いのだもの……。噫自分は何故此樣に薄倖なのだらう……。學校に通ふて居た時は……え丶最う思ふまい、此樣に爲て居て萬一人に見咎められたら不可い、左樣だ。」

斯く思定めた靜枝は、韓の空遙に合掌して伏拝み、更に我家を顧みて再拝した後、白く寂しく冥土を照す如き月光を浴び乍ら、無慘や、靜枝は死の影を追ふて、田を、畑を海岸目指して覺束なく辿つた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

常樂寺川口（選外）　近江　那須勝子



君江は目覺めて、昨夜傍に寢た靜枝の夜衣を脫捨てた儘姿有らぬに打愕き、昨夜の靜枝の言葉を思出して、心も心ならず室を馳け出て見れば、表の雨戸二寸斗り開き居るに、さては煩悶の極、何處へか迷ひ出てたるならん。前夜斯迄に言聞かせたるに、平常優しき氣前の靜枝なれば、よも背きて自殺を謀る如き不心得は有るまじ、必定精神亂れたるに相違無しと、共に心も狂ほしう立出てゝ四邊を見廻はせ共、靜枝の姿は更に見えなかつた。

君江は可愛き娘を思ひ、さては外國に在る夫に對して申譯無きを思ふては起ても座ても居られず、心狂亂に成りて何處を的處とも無く、靜枝を尋ねて迷ひ出てたのである。

あはれ、燒野の雉子夜の鶴、子故に迷ふ親心、闇より闇へと狂ひ行く憐れさよ。

人生悲慘の極致とも言ふべき物語りて、作者は骨組に重きを置いて、肉をつけなかつたから、存外同情は惹き難いかも知れない。文章は確乎たるもので、殊に叙景の筆も詩趣津々、老成なる作品である
（選者評）

○夢の別れ

神戸　間名部羞花

「お母ちやん何處へ行くの」まだ舌も廻り兼ねる三歲四歲の可愛盛り、今鏡臺に向て居る母親の後からのびあがり鏡に寫つている美しいお化粧の顏を覗き込んだ

「あら坊は何時の間に歸つたの、お母ちやんは一寸お醫者さん迄行て來るの、」「うそだ〳〵お芝居へ行くのだ」

「お芝居ぢやないよ、お醫者へ行くのだからね坊は柔和しくして伯母ちやんと御留守して頂戴」「いやだ〳〵坊にも好い着物を着せて伴れて行て頂戴な」「困るね坊は、そう無理をお云ひだと……お母ちやんがねお歸りにあの紙鳶をお土產に買つて來ようから、泣かずと柔和くしてお伯母ちやんとお留守しておいで、ほんとに坊はいゝ子だよ」と色々宥めすかしたが、益々叨り、はては聲を張あげ泣叫ぶので母親も、やゝ困つた容貌で「おやお醫者に行くのを止して坊と一所にねんねしましよ」とやつと泣を止めさせ、まだ泣きじやくる子を抱きあげて邊りの座蒲團三ツ四ツ寄せ集め、添乳しつゝ暫時横はつたが何時か罪なき眠に就き、あたゝかき母の乳房は蕾の樣な小さい口から滑り落ちた。母親はそつと己が手を外し座蒲團を小さく丸めて子に枕し徐ら身を起したが、すや〳〵眠れる我子のいじらしくも、また眼に溜る淚の露に愛の光を浮べつ、如何

なる楽しき夢野に遊ぶか、につこり笑えだ寢顔に思はず立ち掛し腰も碎けてひしと子を抱き締て、怪しき涙の滴は不絶雨の頰を傳つて居るのである。

＊　＊　＊　＊　＊

其の夜母親は伯母の手に愛子を托して京都の某へ後妻として嫁すべく出發した、あゝ後に振り殘されし哀れな子よ、今宵何を夢見しぞ。

何處か昧ひのある文だが、未だ充分とはゆかない、但し「あたゝかき母が乳房は猫のやうな小さい口から滑り落ちた」はよかつた（選者評）

○決心

本郷　紅雲女

昨日から降り出した雪は未だ止まず、それに今朝から風が吹き出したので時々裏庭の松に積つた雪が落ちて家内を騷がす外に寂として音なく山中の一軒家の如き此家の奧座敷に時々聞ゆる咳聲は老いて何の樂みなき母が寢られぬ爲であらうか、時は將に十一時過ぎ、……折しも唐突に襖を開けて、

「淑子、まだ起きてお出でかい」との聲に讀みさした本をふせてかへり見たのは年の頃廿前後の美人、面はやつれたれど、すゞしく見はりし目はすぐに笑みを帶びて見るから凜々しき樣子なり、こは一昨年の秋此家に嫁ぎし淺賀某の令孃……否今日の奧山未亡人なのである、間もなく老母繁子は其前に座を占めて、あちこち見まはして又も咳聲一つ、

「淑子先程の話はそれから考を飜しましたか、……私もお前の御兩親も決して惡い事は云ひません、……お前もこの家にきてからまだ間もない斗りでなく子供一人あるではなし、それに雪雄が呉々云ふて出征たのだしするから、枉げて良い緣があつたら身を始末したら、お前一人の幸福ばかりでなく、この私もお前の兩親も安心する斗りでなく雪雄も地下で喜ぶでせうと思ふがね」淑子は流石に詞も出ず、唯伏眼になりて羽織の衿を手遊り居たりしが、斷然母を見上げて、

「御母樣、貴母の深き御心の中はよく分りました、誠に皆樣に御心配を掛けてもまだ我を張るのは本意ならず存じますが、私とて今更雪雄樣が戰死遊したとて、どうして再緣など出來ませう、どうぞ私のお願て御座いますから、ふつゝかながら一生貴母の子と思召してお置き下さい、私は其上の望は御座いません。」

「しかしよく考へて御覽、お前も兼て懇意の澤山の嫁

ね、あの初子さんさ、おもひ切りよく自分から申出してさへ葉山とか云ふ學士とやらへ再縁たとの事ですよ、それにお前は兩親に勸められてさへなぜさう堅くしてお出でなのかね、」淑子は堪へかねて、

「御母樣、どうぞもうその事はお云ひ下さいますな、人樣はどんなに遊ばしても、私の心ばかりは枉げる事は出來ません、」と云ひ終りてうつむきしがあまり云ひすぎたりと思ひてか、又詞をそへて。

「それでは尙よく考へも致しませうから、どうぞこゝ一月程御猶豫下されば必ず決心をいたします」とあとはかすかに。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

今日は風もなく、よくはれた暖い日。

上野の櫻は日一日と散りかゝつた爲かいつに珍しき人出、それに今朝から嶽の臺では某小學校の運動會にて尙更の見物人山の如く、遠くからでも兒童の唱歌の聲、勝鬨の聲、萬歲の聲がはつきり分るのである。

今丁度高等科男兒の徒步競走がすんで、尋常一年の鳩ぽつぽの遊戲の始まる處である。

向ふから下髮、稚兒輪、田螺のやうな束髮に美しい簪を挿し、袴の裾高くさも嬉しげに足なみそろへて出で來る稚兒、それに附きそふて廿一二の若き女教師があつた。

此方の幼稚園兒童附添人席に居た一團の婦人連の一人目早くそれと見て、

「一寸葉山の奥樣、あつちを御覽なさいな、あの若い女の先生ね、あれ淑子樣ではなくつて、」と云はれて、

「あらさうですよ、つまりませんね、この先女教師で一生暮さうなんて」とさも〳〵さげすんだ樣の句調

するとまた他の一人は、

「然し實に感心の方ですね、實に戰死者の未亡人として立派の決心ですね、女もあの位堅く決心すれば、夫の名譽に汚點を附ける樣な事は決してありませんね、」と感じ入つて、それとはなしに葉山夫人の方を見れば彼は薄赤き唇かみしめて、何の返事もなく。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

間もなく遊戲は始つた、教師も生徒もたゞ無邪氣に節おもしろく、歌ひつ踏りつするのを、一同浦山しげに見つめて居た。

雪江子の『疑惑』は道筋を示し、此『決心』は結果を示して居る、小說としては雪江子の作が自然であるけれど、此紅霞女の作も決して下手ではない。たゞ眼の着け處は此方が複雜しては居るが平凡である（選者評）

○落椿

小石川　佐川貞子

（上）

「姉さん……」ガラリと遠慮もなく障子を明けて入つて來たのは黒紋付の筒袖に縞の袴をつけて今學校から歸へつて來た、鼻筋の通つた色は少し青ざめて居るが眼元の淸しい口元のキツパリとした定と云つて今年高等二年の弟である。

「ハイ何か御用て」今編みかけた針の手を休めて姉は微笑ながら弟の方を見やつた「いゝえ」

「定さん此頃はたいさう御勉强と見えるのね」「なぜです？」

「だつて定さんは毎日暇さいあれば妾の所に來て遊んで居たのに此二三日は少しも見えないですもの」と春子は編物を置いて机の上から何やら袋包を持てきて無言のまゝ定の前においた「姉さん是なに？」「それ定さんに上げるの、あてゝ御覽よ」

「呉るつて何てすか」定は不審の體て凝乎と姉の顏を眺めた。



騎兵（選外）　讃岐　岡越茂子

「冗談でせう」「あら冗談なんか云ひはしないわ……先程小針さんが入らしつて弟樣に上げて下さいつて：：：：御菓子なのよ」「そうですかお氣の毒ですね」恁う云ひながら定は恥しそう。

（中）

「姉さんの編んで居なさるのは何ですか」と定は姉の編物をみる、春子は暫く無言のまゝ熱心に編んで居たのであつたがつと面をむけて。

「これ……靴足袋よ定さんお御褒美に、試驗が濟む迄に出來ます」

「姉さんの下さるものなら嬉しくて何ても遠慮なし」

「そう、では妾も編み力があつて嬉しいわ」と春子は言ながら倘恁う語をつゞけた。

「定さんほんにあの試驗は何時なの」「來週の次の週からてす」

「まあ—間近いてすこと、定さんはそれて勉强して居なさるのね」と今更の樣に驚いた「ても定さんは毎年一等賞ばかりて今年は特別一等賞てせう、授與式の日

は妾も小針さんも參りますの、お母さんも行くとか言はれましたよ其時定さんは此靴足袋を穿いてすまし込んで居るのを見られますよホヽヽそう思ふ故か待ち遠いわ」「だが僕は此頃勉強する故か時候の故か知らんが頭痛がし體がてわくて困るよ」と定は姉の机に倚りかゝりつゝ何やら深い物思にしづんで居る。

「そう、時候の爲よ試驗がくれば治るてせう」

春子は淋しき笑を洩した。

「姉さん僕はまた來るよ」「早いのね明日必とお出よ散歩に行くから」何か意味ありそうに定の後姿を見送つた。

（下）

定の試驗がすんで五日目の午後であつた二臺の車が飛ぶ樣に此家の玄關についた、此近邊には名高い醫者であるが今は匙を捨てゝ悄々と歸つたのである、それより間もなかつたバタ／＼と驅る足音續いて母の泣聲春子の呼び聲：：：、春子は定の死體に犇と抱きつきながら再び呼んでさめ／＼と泣き伏した。

今にも降り出しさうな空合室内は香の煙り漲り四隣は寂として聲なく只隣家の植込に白椿がポツタリ／＼と落つる音のみ聞える。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

後數日川崎の高等小學校に盛大なる卒業證書授與式が開かれた、其中に一人特別一等賞箭内定と云ふ名郡長や多くの人々の前に披露された當時婦人席の中に手布て顏を蔽へる二人の娘がみえた。

嗚呼、箭内定今頃は草葉の陰にどんな夢を結んでをるてせう。

定と姉とのはなしの中に、戀ありとあやまる勿れ、定は戀する年齡にあらず、矢張腦が惡かつたので、はき／＼しないのは彼の死の近い事を虫が知らせたのであらう（選者評）

○魔の淵

淺草　岩本よ志子

六斗川といへば知る人ぞ知る諏訪湖へ注ぐ一大河で、其河口は里人が『魔の淵』と呼んでゐる聞いてさへも身ぶるいする樣な凄い淵をなしている。丁度三月も暮れて四月の初旬、月は青白い光を放つて紺碧の水面を照らしてゐる。

月光の明きに委せて流をゆるやかに下て來たのは二人の女を載せた小舟で何かしんみりと語合ひつゝ此淵迄來ると二人は何を思ひ出したか急に四邊を見廻して其處へ舟をつけた。

『然しねえ春子さん』飽く迄柔しいもの言ひ女は凉し

い眼から玉の樣な涙を頰へ流しながら躊躇つた。
「――靜枝さん、御互の不運仕方ありませむ」
流石に斷乎とは言たものゝ、語尾は怪しう震へて居た。
「だつて貴孃十數年からのお馴染‥‥‥」
「周防といへば當地から二百里もあるわ、夫れを如何して又二度と會はれるなんどゝ思へましやう‥‥‥」
齒を咬縛つて袖を顏へ當ている。
「あゝそ、その遠い／＼周防の國へ妾一人丈行くのかと思へば――あゝ春子さんにお別れして明日からは又誰と共に物語し、誰と一所に遊ばう、眞當に‥‥‥妾それが悲しくつて‥‥‥」と言ひ淀んで鼻を詰らせた
春子の方は無言で俯むいている。

* * * * *

夜はいよ／＼更け渡り月はいよ／＼冴え／＼て友を呼ぶ歸雁の聲遙か西の方より來る。

* * * * *

「春子、は、春子さん何と言つても仕方がありません、お別れして後もね、お互ひに身體を大切にして丈夫でゐたならば、天は屹と妾共に再び會へる、機會を下さるでしやう‥‥じや春子さん是てお別しましやう、して向ふの堤の上へ上りませう――。」と靜枝は打ち震へる紅唇をしかと咬ひしめ、春子の手をそつと握つたが、又振りはなして己れ先づ堤の上へと――夫れは四尺許りの間であつたが――怎したはづみか呀哉と見る間に足ふみそらして暗碧の淵の中へ眞顚倒!!!
あつ!!と見る間に春子が其上へ重つて落ちたので二人は期せずして犇と抱き合つたまゝ‥‥‥。
あゝ別に蹴躓いたのから察すると靜枝が自ら係かる悲しき運命に陷らしめたのではあるまいか?!。
淵の水は須臾くゆらめいてゐたが直ぐ復舊にかへつて再び物愴く碧々と紺青をといてゐる。あゝ水は長しへに彼等二人の秘密を守つてゐるであらう。

無理に含蓄した爲に文意の解し難い點あるばかりでなく、全體の意味すらおぼろげて、取り止め難い、かげらふのやうな短篇てあるが、鋭く刺すやうな筆法がキラリ／＼と、閃いて居る、兎に角、けいろの變つた作として採用した（選者評）

○鐘樓堂

尾張　秋外女史

（上）

山寺の住職が出征してより、指折數へてみれば、はや一年、こゝに冬のなかばとなつた。曉の梵鐘は住職が出征せる時檀方の吉助に賴まれたので吉助は風の吹く日も雨の降る日も、いつも未明についぞ一度もかゝし

た事はなく、太陽が東に出ぬ先に床を出て、身を清めて鳴すのであつた。人はまだ寐床に暖き夢をむすんで居る。暫くすると遠く近く工場の就業汽笛、戸毎には妻戸をくる音、烟筒の烟り、さては車の軋る音。

（下）

山寺の裏、ダンダラ坂を下ると廣漠たる野面がある、鍬を肩に烟草をふかして居る農夫が傍の農夫に向ひ、鐘樓に指さして、

「のう久作どん、あの鐘は一躰だれがつくかえ？」

久作と呼ばれし農夫は五助の指さす方をみやりて、

「ウヽ明の鐘かよ、をらア知らねえ」

「そうだらう吉助どんが出征から誰が鳴らすかきかねえのだ」

「マアだれか吉助どんから頼まれたものがあらうよ」

「ムヽそんな話きかねえだ」

「不思議なことだ、まさか、鐘がひとり鳴りもしねえだ」山寺の鐘は吉助が一年このかた鳴して居つたがつい一昨日吉助は可愛い花嫁を殘して出征したのである、吉助が出征するとき鐘つきを頼まれたものがないのに、昨日も今朝も鐘樓堂の鐘は吉助がならした時と時刻が少しも違がはず壯嚴になり響いたので、村中の人々は不思議の思ひに惑ふて居るのであつた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

つきてはそも誰か。外ならぬ吉助の妻であつた、吉助の妻は夫吉助が出征中は其夫の志をつぐのであると云つた。

文は初心らしい、形は小説の體であるが、言はゞ美文の少し複雑した位に過ぎぬ、着想の一等、地を抜いた處を採る（選者評）

新刊紹介

本誌〆切後到着の分は次號に紹介すべし

▲母の書簡（堀内新泉著）　娘に與へたる母の書簡と題したる書にして書簡體に擬して若き女子の處世の要訣を敎へたるものなり初め學問の目的より日常坐臥の事に至るまで巨細洩れなく指示し誠に母が子に教ゆるが如き態度を以てせり好書の一として歡迎す（定價四十錢實業之日本社發兌）

●婦人世界　一卷五號　京橋區南紺屋町　實業之日本社
●明治の婦人　二卷一號　四谷區内藤町　明治の婦人社
●初楓　一卷三號　伊賀國上野農人町　初楓會
●裁縫雑誌　四卷五號　本郷區東竹町　東京裁縫女學校
●秀才文壇　六卷十一號　神田區旅籠町一丁目　文光堂

編輯局選

はがき文

特別第二賞

○希望にみちた時

本郷 照子

部屋の内外の掃除も濟し含嗽手水に身を清め、清々した心で文机の前に額き、今日一日の上に祝福を乞ひ併せて、故郷の親兄弟の靈肉共に無恙守らるゝ樣祈り終りて、扨筆取て廿分間御習字をする、噫此時が私の一番希望にみちた時である。

永久に此信仰あれ。

特別第三賞

○いばら

埼玉 江森しげ子

或る麗かな日野邊に出て見ると、一匹の蝶が茨の茂つた上を彼方此方とさまようて居る、見て居ると、しまいに其の茨の中へヤット飛び込んだ、見れば根本にスミレの花一輪これ程に蝶はスミレを!。

獻身的。

天

○紫

淡路 伊藤綾子

私は紫が一番すき、私の袴は紫である。菫の紫は濃艶である。藤の紫は清浄である。山を取巻く霞の紫は雄大である。神殿の紫の幕は崇高である。ア丶紫よい哉、只悲しい紫は學校より不出來の通知の状袋の紫。

桔梗の紫、筑波の紫。

地

○返辭のさまぐ

岩代國信夫郡平田小學校内 丹治はるみ子

『ヘエッ』といふのは店屋の番頭連。『ハイ』といふのは學校の生徒達。『ヘーイ』といふのは料理屋の女中方。『エッ』といふのは坊ちやん達。『ハッ』といふのは軍人方。『アーイ』といふのは田舎の娘さん達。『オイ』といふのは土百姓連。

女學生は『ヘア』。

人

○すみれの花

本鄕　城子きせ子

昨日摘草に行つて取つて來たすみれの花、御庭の御池の側へ植ゑて置いて朝起きて見ると、皆枯れてしまつて居た、あら父樣すみれは家の御庭が、きらひなのでしやうか、まあ困つた。

枯れし菫は君が胸に活く。

秀逸

○ポスト

京都　山下なほ子

萬物皆眠るの時、獨り路傍に依然として立てるものあり、即ちポストなり、世の人の數知れぬ運命は彼れの廣くもあらぬ懐によりて秘せらる、而かも其色黑く形四角なる彼が戀の媒をなすとは不思議ならずや。

此文は舊式のポストの如く四角張りたり、願はくば新式ポストの圓う角を取りて再び來れ。

○顏

德島　齋藤菊子

幾度見ても見飽かぬ顏は、女子文壇の孃樣の顏、見る度氣持の惡るきは癩病の顏、何時も笑顏に見ゆるが、凱旋した兄の顏、見る度に有難く感ずるは、父母の笑顏、鏡に向ふ度び、氣になるのが、自分の顏のあざ。

區別すれば四千餘萬の顏。

○ひばりと菫

讃岐　玉舍女史

高くいと高く空遥かに舞揚る雲雀の、いつとても落來る所は、菫花咲く其上なり、如何に雲雀の菫を好むかをみるべし、菫の如何に雲雀を呼戻す力の强きかをみるべし、奇しき縁のいつの頃よりか定められけむ。

詩にもなるべし。

○妾の身分

芝區　川島芳湖

文明開化の今の世に、私は女學校へも入る事の、出來ない身で、たゞ毎日母樣のお傍で御話し、しながら針仕事を習つて其で結構滿足して居ます。なぜかと申せば、墮落する女學生には增しだらうと思つて。

滿足は何處にも在り。

○村の光

橫濱　井上久子

村中でお人好と評判されて居る三太と、村中で容貌美のお花とが、昨晚目出度く婚禮した。未だ一日も經ぬに三太殿には今朝も相變ずヨイサ〳〵と荷車を引く。後推しは花嫁樣。三太喜悦して曰く持べき者は女房な

りと。

人間の光（但し此文稍小説めきたり）

○お蠶　下総　川奈部孝子

お蠶がよくできれば、いゝ着物をこしらいて下さるとの母様の仰せに、妹は一生懸命、桑をきざんてそれ〳〵忙しい事。

桑の葉にも霜降らされ。

○朝夕の音　大阪　杉田孤泉

鷄の高く鳴く聲と、牛乳配達の車の通る響と、勇しい汽笛の音と、これは朝の音て、茶碗のかち合ふ音と、勢のない車の響と、ゆつたりとした紡績の笛の音と、此は夕の音である。一は勇壮てあり一は沈痛てある。

光の車と闇の車も響の一つ。

○大淀川の夕景　宮崎　澤田水蝶

昔、伊册諾、伊册弉の降り給ひし霧島山は西の雲表に聳え、そが麓より流れる大淀川の流は清く。遙かに沖行く白帆は、牧場の羊の戯むるがごとき日向灘沖より歸る漁船數艘。漁歌響けば霧島はうすれ行く。

二神、闇にかくろ。

○兄様　札幌　姫菊子

今朝昇別温泉へ御保養にと御出發なさつた兄様のお室へ屋に一人寂しく、お羽織をたゝんて居りますと袂からヒラリ出たのは美しい女文字。吁兄様の御病氣は必とこの爲てあらう。



梅日和（選外）　本所　江原登利子

家庭小説の第一回。

○直接談判　下谷　近藤かれ子

お姉様妾久しぶりで、昨日麻布のお兄様を訪れてよ、その時ねえ、お兄様のお側にいらしつた一人の青年士官が、カイゼル式のお鬚をひねりながら妾に向つて、君、僕の妻にならんかつて。

妻になつてよ。

○蒲公英　岡山　中野波子

社會の風潮は何故てしよう、可弱いひよろひよろとした色彩で飾た菫を悦んで、一寸無骨でも白髪は生へても倒れないと云ふ古武士の面影が忍ばれる蒲公英の花が好かれないのてしよう。

蒲公英も時代の風潮を論ず。

○親自慢　山口　松江女史

二人の少女頻に話すのを聞きしに、一人の少女、私のお父さんが通ると皆が恐れてよけて通るよ、他の一人、私のお父さんだつてそーなのよ、前の少女、あなたのお父さん何に、私のお父さん水まきよ。

家庭笑話なら一等賞。

○海上の蝶　岡山松浦重子

或日曜日の事父上と妹と私と三人神島へ花見に行ふと茂平の濱から舟に乘つた今は早や我家もぼんやりと見え兼ねる頃妹は大きな聲であら蝶が黄色の蝶が……

須磨の蝶、淡路に渡る。

○若粧　神田大澤隆子

先達歯醫者で逢つた奥樣（九つの女兒と六つの男兒のお母樣）は、小豆色紋附のお羽織を召して庇髪にオリーブ色元祿のリボンを挿して居らしつた。是では私は紅リボンの附た改良服着てオカッパさんにしてもをかしくないかしら。

時代は若くなれり。

○命のくひ　兵庫柳田清子

何んだか大そうな事云ふようですが、これは實に妾の事で七ッの時あやまつて運堀へ落ちましたが、いゝあんばいに袖がくひに引かゝつて、やつとくひにつかまつて助てもらひましたの、今思ひ出してもぞつとしますのよ。

人は一生の間に幾度か命を拾ふ。

○桐　青森嵐が香

私が久しぶりて故郷へ歸つて、お安さんのお家の前を通つて、ふと庭を見ますと先に澤山あつた桐がなくなつて居りました、それはお安さんがお嫁に行く時、簞笥を作るのだと、私共の少さい折に云つた桐です。

怪む勿れ、桐を賣つて晴衣を買ふ。

○不景氣の往來　秋田黒丸登美子

當地は東北の地ですから、矢張り凶作地なる事は諸君の知る所です、然るに其れに反して繁昌なるは、各家の乞食の往來と、夜は盗人の往來と、其盗人の行く警察の往來と、質屋の門の風呂敷包の往來のみ。

歳凶にして人盗す。

○春の一日　赤阪森ふま子

暖かい南椽で幼い妹は細い竹の枝に山椿の花を通して居る、弟は手にミットをはめたまゝ芝生に寢て唱歌を歌ひ、姉は長い髮を櫛けづッて、妾は洗濯物から滴れるしづく見て居たが何だか眠くなつて來ました。

永き日やフト雨滴を數へけり——絲雨。

○人の子　福島住友時子

其氣性は父の如く、其情は母の樣なれ。

髮は父に、眼は母に。

○四季の雲　北越　越川さき子

あゝ四季の雲よ、汝は春は開きて美しき花となり、夏になりぬれば散りてぞ霧となる、秋は流れて雨となる、冬は凍りて雪となる。

言ひ廻しの妙。

○夕　下野　蘆花女史

日が暮れてカラヽーコロロ！と蛙が泣き出すと隣の作平爺は「蛙ア泣きだーす田植は來るし百姓ア幾程でも忙しくなるばーかーりーてらさア」トントンと藁を打ち出す、妾の家では夕飯を食べやうとお膳を出す。

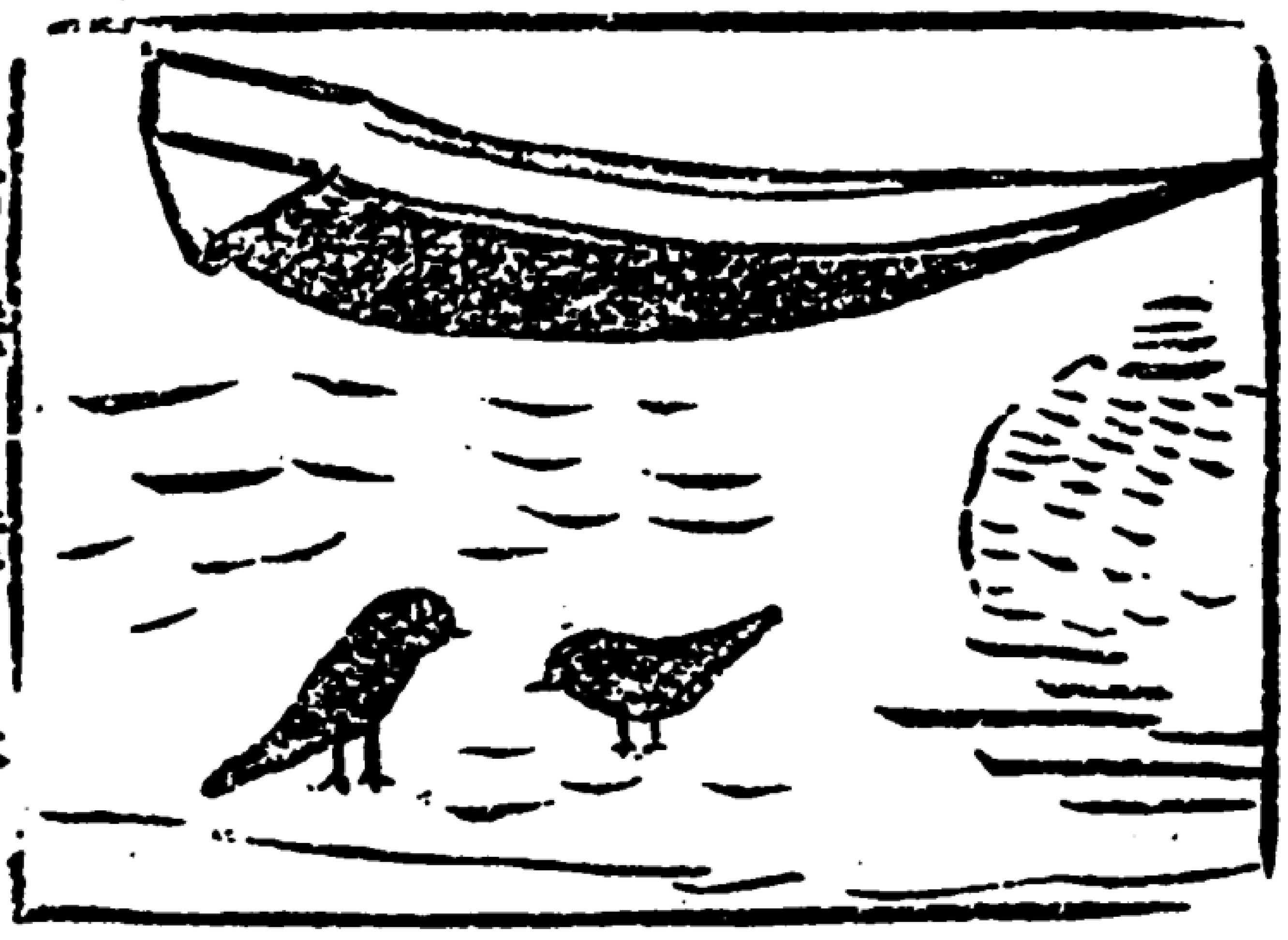
斯う言ふ家にも詩神は宿る。

○稻刈　福岡　林まつゑ

山田のお孃樣達が庇髮で茸刈に入つしやる頃、私は紺の筒袖に元祿の手拭かぶつて母樣と、姉樣と稻刈に三人揃ふて刈始めた……千代村製鐵所の十二時の笛が微に聞える、不圖向ふを見れば母樣は畦へ姉樣は次へ私眞中へ。

製鐵所はあれど停車場はなし。

汐干狩り　（選外）



常陸　紫水

○靜な晩　上總　田村瀧子

春の夜の月はうつすりと朧に山の端に昇つた。岸の柳はうなだれて角ぐむだ蘆に寄る波もない。白鬚の森のあたり遠く〳〵笛の音が聞へる。あゝ靜な晩だこと。

花神逍遙。

○女學生氣質　麴町　山下宮子

「貴女棘を立てたの？ぬいてあげませうか」「えゝ有難う」聲はやゝ震へて眼は既に涙ぐんでゐる。聞けば指へ小さい棘を立てた女學生は、その翌日欠席して、その翌日は美しく繃帶をして出校したさうだ。

繪は和田英作氏に賴まむ。

○目白　西多摩　坂風濱子

私が去年親類から戴いた目白少さい時から籠で育てた故か外の鳥は面白う飛び廻るのに籠の口を開けても外へは出ません幼い時から住む所は戀しいものよ。

軈て去るべき時は來らん。

○紀三井寺山に登る　和歌山　峯子女史

同遊四人、小川君子、吉田春江、天野お花、榎本峯子、

同じく登る、時に三月十五日なり。

價に二行、終生、日記より消滅せず。

○目がさめました　本郷　川島千枝子

今朝ねむい目をこすり／＼井戸で水を汲でゐると風と共に櫻の花びら繽紛と散りて妾のあたまへも肩へもそれから水をくんだ手桶の中へも一ぱい散つて美しかつたのですつかり目がさめましたわ。

春眠不覺曉。

○みにくいもの　大阪　しろつばき

着物の着様、後上りの前さがり。十五六にもなつて、おかあちやんと、あまへる女の子。高島田に海老茶袴洋服に下駄をはくのと、大人のこけたのと、裸躰詣程見にくいものはない。

惜い哉、線の美を解せず。

○故郷　美濃　山田はぎ子

櫻ももう咲いたで有ふ善光寺は大賑でしよう蕈を摘に行つた倉知野も蝶がひら／＼と舞ふてゐるでしよう御母さんは桃の木の下で妹や弟の袴等を洗ふに困つて御出でしよう。

○お茶の水橋　東京　藤野むれ子

今日も出校と云つて、本郷の御母様を訪ふて、色々お慰め申した歸途、これから明朝まで亦お義母様の苦ひ顔を見るのかと思ひながら、お茶の水橋に懸りました、折しも吹き渡る一陣の風に堤の櫻花はハラ／＼と散りました。

○うたがるた　佐渡　小野まつ子

けふは三月の節句とて母姉妹うちそろひ歌がるたに餘念なし、姉は勝利のほまれをとらんと、けしくもあやしき手段に出て、陰然とかるたのわけまへを少くした、妹はみて姉さんをれて賢母良妻となれるのかれ。

○失望　熊本　白水

貯金の七圓三十八錢でショールとクツとリボンを買ふと樂しんで母樣に預けておいたら皆遣つておしまいなされたと、私が丹精の菫を私が知らん間に兄樣が人にやられたと、も一つは最愛の犬ラツが殺された時。

○武雄の帽子　山形　月香女

武雄は昨年は祖父樣のお葬式をお見送りするために帽子を買ふて頂きましたが、今年は父樣の凱旋のお出迎ひに行くために一層いゝのを買ふて頂きました。

○薔薇　芝　須川よし子

何うして甘く出來無いのだらう腹が立つて机のはしをポンと叩いて立上ると、今半開の薔薇の鉢は搖れて、ハラ／＼と原稿紙の上に紅の花瓣二つ三つ。

○心地のよい事　羽前　久代

朝早く起き雨戸あけ今あけ掛かる空を見るのと朝の御掃除して家内一同きれいになつて座しきて食事するのと、寒い時御湯にはいるのと湯上りに冷たいものたべるのと。人よりさきにものゝ出來るのが私は一番心地がよいわ。

○風のいたづら　靜岡　紅百合子

或る夜風が大變吹いて木戸などは翌朝までがたついた私は朝早く起て庭へ出て見るとあゝ無慘兄樣の秘藏の夏菊のはちを落して隣との境の山吹まで大方散らしてしまつた。

○煙　麹町　熊田ふみ子

時々は輪をなして緩かに長閑なるは煙草の煙、宵薬を薫り微風に細く亂れて心地よきは温泉の湯煙、胸苦しく嫌らしきは蚊遣の煙、淋しく哀なるは枯木をはい上る夕の竈の煙。

○日記の一節　韓國　比留間ふさ子

三月十一日、牛角洞まで散歩しました少しても水のある所は韓人の婦が集て洗濯して居ます、男も女も手て鼻をかみます道の眞中に大便などがしてあるので、何を見てもいやな氣がしますよ。

○いやな人　　香川　松永　あやめ子

道を通つて居るのを障子の穴からのぞく人、いやらしい目つきをしてにらむ人、直に怒る人、媚びへつらふ人、何事ても他にたのむ人、精神のゆがんだ人、

○停車場の五分間　　常陸　今泉　貞子

今し滊車は黑煙を揚げつゝプラツトホームに着きたり、扉を開く人、降りる人、乘る人、洋服のハイカラ紳士、庇髮の女學生、紋附の力士、商人體の男、印袢天の職人、カーキーの軍人、百姓、さすがに茲は活社會の一面を現出した。

○春の夜　　福岡　古屋　ちか子

緋桃、白桃、咲きみだれて、朧にかすむ宵月夜、そと窓の扉を開かせ玉ひ、美しき、花の露に飾うるほして姫君、何想ひます。

○蓑　蟲　　麴町　清　子

嗚呼妾はなぜこんな人知れぬ苦勞をするてしよう、人間はなぜ苦勞といふ重荷を負ふて生れたのてしよう、と思はず庭を見れば松が枝にぶらり下つた蓑蟲彼も相應の苦痛があるか知らん。

○曉の河　　大阪　登　秀　子

紅の雲が東の空に現れると、鳥一羽曉を告る神のみ使の如くに飛て行、見ると繁た森の間から、きら〳〵と旭が昇た、世は恰も黄金世界と成て、旭をうつした足下の小川は希望の聲高う歌ましう、夜と共に西へ〳〵と流れて行。

○別　れ　　豐橋　鈴木　かれ子

私は去る日、東の都へ上らうとなさる姉樣を送るべく急ぎ停車場へ參りました。程なく滊車はプラツトホームへ入つて來ました、姉樣はおのりなすつた私は御機嫌宜數、と唯一言、後は涙て何事もいへなかつた。

○僻村の夕　　越後　た　き　子

今や暮なんとする夕空を眺ふて、黑々と雲の樣面白く、輝ける星の二ツ三ツなるも興ありて、消殘る雪に老樹五六株の茂みもおかしく、いづこともなく聞ゆる薬うつ音。

○古日記簿　　下野　梅　月　子

本箱の底から出た古日記見ると去年五月廿日の晩方お隣の美代ちやんと前の矢場川傍りに螢狩を催した時過て川中におち其時母が驚て來て脊におはれて泣き〳〵歸た、あゝそんな事もあつた。

○卒業の前夜　　下野　入江　靜　子

卒業はモー一月モー二十日モー十日と中々待遠かつたが、いざ卒業式が明日となつた今夜は嬉しくもあり又親しく四年間供に遊び供に學んだ御友逹と西に東に北に南に別れねばならぬかと思へば又悲くて眠られぬ。

○燕の家庭　　下野　波多野　まさご

軒に巢を作つたので追放ちた燕、或日春雨の降るのに五六羽電線に止まり、姿の通學する途て樂しい歌を聞せてくれた、小鳥てさい斯圓滿な家庭を作り、姿等を慰るかと眞に哀になつた、其後は悅んて巢ぐはさせた。

○御料林　　尾張　渡邊　啓　子

大黑柱の與七が病附いて今日て四日目、お冬は昨日から、與三坊は今朝から何も食われぬというので、惡い事と知り乍ら、與三坊め、今御料林の木を伐りに來た、あゝ叱られればならぬのか、御料林の巡査の役目。

○春の日　　埼玉　中村　紫　香

鞠突に厭た妹は柳の枝に鞠結び付お手玉み取てゐる。ふく風にユラ〳〵搖ると枝の結目解て鞠はコロ〳〵池中に!!金魚は驚いて藻の蔭へ。猫は眼を見張て怪奇の顏。鞠の邊には花瓣が散てる。

○妾の願ひ　　備後　し　げ　子

一女子文壇一生愛讀致たい二他人の作を自作の如くなさらないて明白な玉の樣な淸いお心になつて頂きたい三常に病氣勝な妾早く丈夫に成て御母樣に悅んて頂きたいこれが妾の願ひなのてす。

○一日の我生涯　　甲府　野　ば　ら

鷄の聲に目を覺し、先、床中に今日の仕事を思ひ床を揚げ、炊事委員兼割

素長となりて、朝晝夕の食事の用事をなす、晝は師の君に敎え草摘み取りに、夕暮は野遊の訪問、夜は復習及び餘習九時半臥床床中に今日の日を反省し學を自問しつゝ夢路に入る。

○春宵　　島取　上山千重子

月おぼろ花また朧や春の宵、下男の茂助さへ御様一句出ませんかとさわぐを、耳にもとめず、わさと悠に粟箏取り出し、月を音にしめて歌うたへば、恥しや隣の兄様そと袖垣に息こらし給ふ。

○朝の五分間　　神戸　和田信子

一同朝食がすむと、六になる妹は父母に挨拶して下女と幼稚園に行た、門口から川島君と呼ぶ聲に應じて「おう」と出ていつたのは九と十三とになる二人の弟、兄は今靴紐を結んで居るのに妾はまだ袴をはきかけ。

○小蝶の舞　　備後　まつ子

こゝは佐保姫君の御庭、大和錦の御席。あげは『鶯殿何れの曲を謡ひますぞや、雲雀殿御調べ今少しゆるやかにしませ妾の袖ふりかねはべれば……。小蝶『姉さんよ明けゆく世の舞踏とはこんなものですよ。

○をかしかつた事　　淺草　朴　蝶子

夏の夕ぐれでした。用事がありましたから、しきりと小僧をさがしましたがどうしてもわかりませんでしたから名を高く呼びましたら、まあ屋根の上で涼んで居たと見へて屋根からおうと答へたので大笑ひでした。

○人の命　　南總　關　よし女

隣寺の安婆はや齢八十なるに。未だ健にて此所彼所を歩るき居る。さるに妾の妹栞子は八歳となりしに。歸らぬ人の數となりぬ。あはれ長きは人の命なり。短きは人の命なり。

○徒然の友　　對馬　重宮文子

戀しき古郷を後に海山越へて遥々と兄様に伴はれ竹敷に來て日も猶ほ淺し未だ友達とてもなく淋き島の片陰にわび住兄様の御上陸でない時は平生も妾が獨徒然を慰めて呉る者は故からの朋友で好きな女子文壇のみ。

○清江さんへ　　四谷　しらぎく

清江様、むらさきの色深きすみれの押花有難う、お手紙諸共あの夕月夜の中へ、はさんで置きました、其お禮には土筆貴女のお好きな土筆の三杯酢をと思つて、之れから野の土手へ……。

○少さいお多福　　麹町　小林きく子

六ツの榮坊、下婢が外出に伴なはざりしとて、なんだいお夏のお多福面。下女益々訪れ出せば、榮坊泣きそーな顔して、お夏さん堪辨してお呉れ、あたいもちつちやいお多福面だから。

○衣食住　　栃木　喜代子

食は上に住は中に衣は下として食を上とはチゴりと云のではなく營養に注意する事。住を中とは餘りせまからざる空氣の流通よき所。衣を下にするは綿にても清潔を旨とする事。或長命者の説私も同感なり。

○嬉しきこと　　讃岐　秀成

春の日和と姑の笑顔と、故郷の母より手紙を送られたのと、自分の投書した文章が活字大きく誌上の高位に見えた時と、鶏の巣に雛の初聲がしたのと。

○兄さん　　廣島　森川道子

人や馬に踏み千切られて一度死んだ草も陽春がくると又青い芽を出して去年と同じ様な花をさかせるのに兄さんはなぜ春が來ても前の様に男ましい御姿で宅へかへらないのでせう。

○スケッチ　　信濃　佐久眞子

雜木林につらなる小松原、殘んの雪を右左に小徑一つ三人の少女睦しう辿りゆく。西にそゝれる峯や轡や、鹿の子斑の衣を着けたるに似たり、淺黄色の空には白きちぎれ雲のひろごりて。梢斜に二月の風ふく。

○妾の望　　美作　性全榮史

人生運命の五十路を東奔西走汲々として空しく一貫幕を築くよりは、清く生れて清く終る蝶々の身となつて見たい。

○弟の眞心　　石川　山岸靜江

今年七歳の茂ちやん一番仲よしの、駒鳥を惜しげも無く、籠より放しましたので、私しは、驚いてなぜそんな事したのッて尋れますと、鈴の様

な眼に、玉を浮べ……だつて、兄さんが御病氣だもの……

○戀　志摩　小林敏江

戀は生命なり生命は戀なり戀なければ生命なし生命なければ戀なし、人をして夭死せしむるも顯榮ならしむるも零落せしむるも、天使の如くならしむるも悪魔の如くならしむるも凡て皆戀なり。

○八重子さんの夢　肥前　ひさ子

昨夜夢を見たから今日はきつと八重子さんからお文が來るだらふと思つていたに待てども〱來ない落膽して居つたら突然、郵便ツ私は嬉しいので走つて行つた見れば闇生敬太郎君、靜雄拜、ふーいな、それは兄樣の机上に投げた。

○雨と人　上毛　五十貝末子

春の雨は柔にして艷麗舞姫の如く、夏の雨は剛にして壯觀軍人の如く、秋の雨は蕭として悲歌慷慨の志士の如く、冬の雨は淡にして清淨擧僧の如し。

○人情　神戸　石井愛子

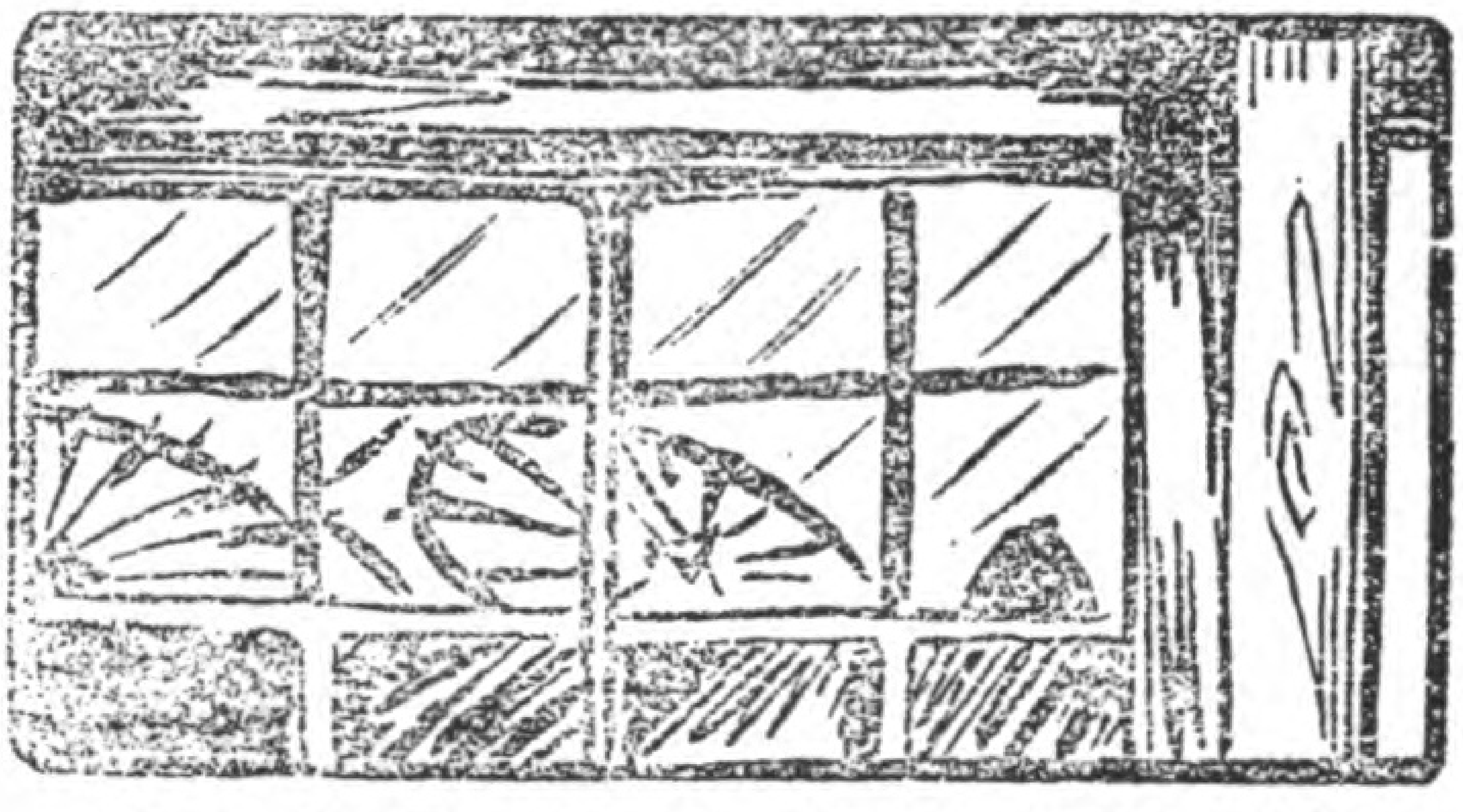
或人が「私に財產が少してもあつたなら東北地方で飢に泣く人等に皆ても惠むのに」と云つて居たのを聞て感心しました而し此人が將來若し財產家となつた時惠むか否やがうたがはれます。

○甘いお茶　本郷　朝井松子

僕は嫌だ姉樣のお茶の湯はにがくて〱ていつも攻擊仕升から今日は新發明のお茶を御馳走仕ました、處が此度は「母樣姉樣は大層お茶の湯が上手に成りましたね今日のは大變甘いの僕大好きよ。」

○妾の家　千葉　花月樓　さき子

何處が宜しいつたつて妾の家位眺望の可なる家が二つと有りましやうか、前は九十九里濱て青々たる大海にはいさり舟のかず知れざる程、後は富士筑波及び小山の數知れず、左は乾草沼、右は栗山川きしには櫻の幾千株今花は盛り



障子越（選外）靜岡　淺井浪子

○紅梅　早來　たみ子

姉樣私れ大きく成ると御隣の美ちやんの御母樣に成るのよ姉樣は何所い御嫁に行くの「しらないわ」あら姉樣うそ私知つてるわ平日來なさる栗山樣の所でしようするると姉樣の御顏は御庭の紅梅の樣に成つてよ。

○檜笠　南豐村　の女

西は追分東は關所…せめて關所の茶屋までも…節面白く、鈴の音と共に霞の中をくゞつて黃昏の空に響て居る、見よ十里の平野綠の波を漂はし、菜の花疎に其の間を色取る畑續、見へ隱れ行く檜笠。

○桃月夜　羽前　鈴木花汀

薄絹を隔てゝ望む樣な桃月夜、家内揃ふての桃酒の宴。『オヤ姉さん、蝙蝠が家にツ』…頓狂な弟の聲、サア大騒ぎ、家內總勢蝙蝠征伐、弟の風呂敷振つての突貫、妹のお振り袖の追擊はおかしくつて溜らなかつたのよ。

○つまらない事　麹町　八代みよ子

折角投書しても出ない時、來る〱と思ツて停車場へ迎に行ツても來ない時、郵便配達夫がよらずに通る時お友達の御便が葉書の時。

○感化　安藝　いさみ女

お隣りの玄關は鏡の樣に光りますのに我家のは何故光らないのでせうとお母樣に聞くとお掃除が足りないのだとの事、其後私は毎日二三度づゝ丁寧に雜巾を掛けましたら此の頃ではお隣りのよりか餘程ツヤ〱して居ます。

○弟の及第　滋賀　西村悦子

追々暖かく成まして白紅梅の眞盛りて鶯も御庭の梅の木の邊てほーほけきよーと泣いて誠に愉快てす其上一等賞を受けて三年生に及第しました大愉快〱と弟の知らせ私御ほう美に何上げ樣。

○我が家の夏　上總　小川國子

我家は小山の中にある一軒家であります、前の小川に魚躍りまして後の森は背葉となります。鳥は樂しき歌を森に唱ひます。

○熱田神宮

尾張　白つばき

尾張の國の熱田神宮は毎月一日と十五日には朝暗い中から參りにくる人があります、境内は櫻が只今滿開であります、鏡を敷いた樣な池の中の鮒や緋鯉は人々がふをやりますとよろこんでおどりあがつてたべます。

○夢

信濃　延川としえ

天より降たか地より湧たか、一人の小娘が櫻樹の下で胡蝶を追ひまわして居る、見れば見る程死だ妹によく似て居る、思はず節ちやんと呼んで、ふと見れば櫻の木影に張たハンモツクの中、噫今のは夢で有つた。

○批評錄

越後　松谷とき子

樂天的に見えるさうだ、お喋舌ださうだ、大福が大好きださうだ、結髮が厭般ださうだ、聲があまり高いさうだ、鴉も云ふ樣に見えるさうだ、これがそも〳〵多くの人の私を見る批評ださうだ。

○朝顏

島根原　溪流女史

亡き姉さんが植付けて置た庭の朝顏も、今朝は立派な三色の花が咲いた。白は豪氣な父を、赤は人交際な母を、紫は可愛な妹を意味して其香を競うて居る。彼處に一輪露を含んだ花は、亡き姉が聖い魂が宿つて居る。

○柔い頰と剛い頰

名古屋　さとし子

今朝一歲になる姪が姉にだかれて遊びに來て、我を見てニツコと笑つた可愛さに姪の柔い頰に接吻してすぐ我が頰をつめつて見て思はず太息した、あゝ我頰の皮の剛いのは之だけ浮世の風に晒らされた證據と思つて。

○歸らぬ人

下關　山本花子

お孃樣有難う御座いました今しも道を敎へし老母の停車場に急ぎつ會釋しぬ誰を迎ゆるぞ彼が背に負ひし子の父なるべし今老母は妾を孃樣と呼びきされど妾はあゝ良人はなど歸り給はぬ。

○彼岸

神戶　田中ふく子

お母さまはお墓へ、お祖母さまは今二階でお灸を、門の方では巡禮の詠歌がのどかに〳〵。私の身は、ほか〳〵と暖つて居る。こんな日に櫻が咲くのでしよう。

○大臣の前へ

備後　高杉深雪女

十七の時から妾の家に養はれて居る正助老爺澁紙色に光つて居る腕を出して若いものは戰爭に行つたが此腕も隨分お國のために働らいたものて色は黑いが大臣の前へ出しても少しも羞かしくはないと得意なものです。

○我が家の夕ぐれ

豊後　後藤花枝

畑より歸りし父と母、馬曳きて歸りし兄、子守を終へし妹……妾は夕飯炊き終へて……御酒の用意。

▲家庭娯樂
一ト口噺
（可成野卑にならぬもの）
▲懸賞募集

當撰賞與左の如し

一等　金五拾錢
二等　金三拾錢
三等　金貳拾錢
（凡て正金にて呈す）

毎月十五五日〆切の事

六月　女子文壇編輯局

mountain-tops?"

"Snow and cold are there; I fear them."

"Then I will build you a crystal palace in the clear depths of the lake."

"In abysses of water there move serpents and other monsters; I fear them."

"Do you wish the endless plains?"

"Storms and tempests trample the plains like wild herds."

"Do you wish, then, to dwell far away from the world in a cave?"

"It is dark there, Lard."

Krishna seated himself on a stone and leaned his head upon his hand; the maiden stood before him, trembling and afraid.

(to be continued.)

か。」

「雪や寒氣が其處に住居してゐまして，怖ふ御座います。」

「其れじや，池の澄んだ深所に水晶の宮殿を造らへて遣らふ」。

「深淵には大蛇や其他の怪物が居りまして，私は怖ふ御座います。」

「其方は極のなき曠原は好かぬか。」

「暴風雨が恰も野の如に原野を蹂躙致します。」

「そーすると，世間から遠く離れた洞中に住むは嫌いか。」

「如何も暗う御座います。」

クリシナ神は石上に坐して頭を手で支へになるし，花娘はブル々々戰慄しながら神前に立つて居た。

（續く）

*　*　*　*

Time

Too slow for those who Wait,
Too swift for those who Fear,
Too long for those who Grieve,
Too short for those who Rejoice,
But for those who Love
Time is
Eternity.

時間

待つ者には遲々にして
恐るゝ者には迅速なり．
悲む者には永きに過ぎ
喜ぶ者には短きに過ぐ．
然れども愛する者には
時は
無窮無限なり。

of a swallow, the moon beamed brighter, stronger trilled the note of the nightingale, followed by a deep silence, and the miracle was done.

There before the god Krishna, stood the lotus in human form.

The god himself was astonished.

"You were a flower of the lake," he said, "be now a flower of my thought and speak."

And the maiden began to whisper as softly as the rustling of the white petals of the lotus.

"Lord, you have changed me into a being endowed with life; where will you command me to abide? Remember, Lord, that when I was a flower, I trembled and folded my leaves before every breath of wind. I feared the rain and tempest, the thunder and lightening, and even the scorching rays of the sun. I have preserved my former nature, and now I fear the earth and all there is thereon. Where will you command me to abide?"

Krishna lifted his eyes to the stars, and said:

"Do you wish to dwell on the

月は益光を添へ，杜鵑の聲は愈々強く響き渡ると思へば，あとは夜氣沈々として音がないが，見る中に奇蹟が行なはれた。

蓮花が本當に人間の形を取つて，クリシナ神の前に立つたのである。

其れて神も自分ながら，御喫驚。

「御前は池の花であつたが，是から乃公の心の花とおなり，サー御喏し。」

娘は恰も白蓮花の花瓣が，微風で少しく動かされた樣な，靜かな細い音調で物言ひ初めた。

「神樣，あなたは私を生命のある人間と御變化らせに成りました．是から何處へ私を御宿し下さいますので御座いますか。私が花で御座いました時は風の吹く毎に恐ろしく存じまして震へながら，葉を疊みました事を御記臆下さいまし．又風のみならず，雨も嵐も，雷も電も，太陽の炎熱さへも恐怖がりましたので御座います．私は形こそ變りましたが，矢張以前の性質を持つて居りますから，私は世界も，世界に在る何んでもが恐ろしくてなりません．何處へ御住まはせ下さいますか。」

クリシナ神は目を擧げ星を御覽になりて云はるゝには，

「御前は山頂に住ひ度くはない

Thy fate is the common fate of all,
Into each life some rain must fall,
Some days must be dark and dreary.

Longfellow.

宿世の定　　皆同じ
誰人身にも雨は　降る慣ひ,
あるべきものよ　晴れぬ日も。

A Lotus Maiden.

Once, on a bright moonlight **night, wise and great** Krishna **meditating deeply,** said: **"I thought that** man was the **most beautiful** creature on earth. **I was mistaken.** Here I see a lotus flower. How much more **beautiful it is** than any living **being! Its petals are** now opened **to the silvery** light of the moon, **and I cannot take** my eyes from **it.**

"Yes, there is nothing like it among men," repeated he, with a sigh; but after a while he thought: "Why could not I, being a god, by the power of a word create a being that would be the same among men as is the lotus among flowers? Lotus, transform thyself into a living maiden, and stand before me."

Then the water vibrated tenderly, as if touched by the wing

蓮花處女

曾て或る月光鮮かなる夜，英靈俊秀なるクリシナ神か沈思默考されて居つたが，云はるゝ事には,「乃公は地上に於て人間が最美の者と思ひゐたが，間違つて居つた。爰に一寸蓮花が見えるが，此れは，何の有生物より美い事幾倍だらう。あの花瓣が月の銀光に顏向けて居るが實に視線を他へ移す事が出來ぬ程恍惚る。

人類間に之に匹敵するものは何もない,」と太息しつゝ繰返して云はれたが，稍ありて又,「乃公は神であれば，何故一言の下に，蓮花の如き者を人間中に造られない事があるものか。
蓮花！直ちに活ける娘に變化して我前に立て!」と御下命があつた。

すると，水は丁度小鳥の羽子で觸られたかの樣に緩かに震へ,

女子文壇第二卷

英文

津田梅子閲　河井道子述

The Rainy Day.　雨降

The day is cold, and dark, and dreary;	晴れず物憂き　寒空に
It rains, and the wind is never weary;	雨降り頻きり　風止まず.
The vine still clings to the mouldering wall,	朽ちたる墻壁(カキ)に　縁はれど
But at every gust the dead leaves fall,	葉は風に飛ぶ　蔦葛,
And the day is dark and dreary.	曇りて物憂き　此日かな。
My life is cold, and dark, and dreary;	氣晹無き身の　我が命,
It rains, and the wind is never weary;	雨降り頻きり　風止まず.
My thoughts still cling to the mouldering Past,	過ぎ越し方のみ　繰返し
But the hopes of youth fall thick in the flast,	青年(ハヤキ)希望も　風に散る,
And the days are dark and dreary.	曇りて物憂き　日頃かな。
Be still, sad heart! and cease repining;	歎くを靜めよ　憂き心,
Behind the clouds is the sun still shining;	雲の奥には　日は照りぞ.

誌友おもかげ（其六）


越後 上野志摩子君

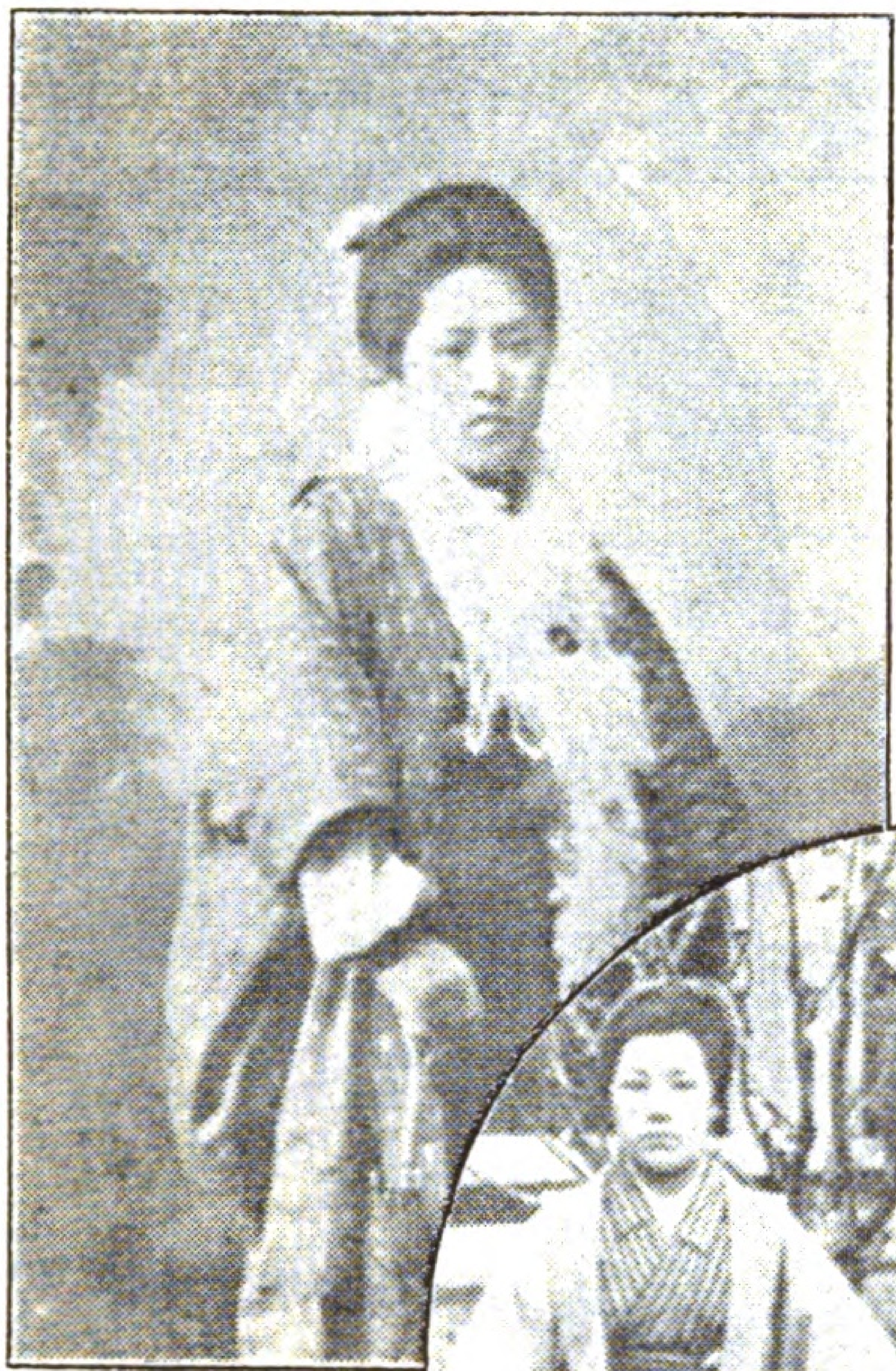

横濱 藤井満壽子君


三重縣 大里とし子君 外弟妹


上海 樋口まし子君


岩代 穴澤さま子君

誌友おもかげ（其七）



富山　島崎きく江君

千葉縣　石井まさ子君



陸前　神山さとし君　八崎りん子君

小倉　河内美代子君







陸前（右）神山すみえ君（前）熊谷はるの君
（左）横澤さつ子君　（前）關山もとじ君

誌友倶樂部

○お國自慢（課題）

○　陸前　八崎　りん子

景色としては、芭蕉のあゝ松島や松島や、と云ふた三景の一つがあるのよ。町の内には新明崎と云ふとこがありまして月のよい夜などは、景色がよう御座います、不思議なのは、大きなながあつて、それが氣仙郡までつゞいてると古人の傳へてあります。名高い人としては諸姉上樣のおこのみの孝女白菊の歌を作つた、落合先生のお生れになつた土地は、隣村であります。

○　三河　鈴木　兼子

豐橋の南の高師原に長葉の石持草と云ふがあります是は名の如く葉は誠に長くそして是へ小さな蟲でもとまりますと直ちに葉て以て包み而して之を殺して常食と致します花は桃色て秋に咲きます是は日本中に二ヶ所しかなく而して其一ヶ所は此の高師原です。

○　松前　おたゝ

どげな金持家でも十一二から六十位までの年の女は皆ごろびつゝい魚を入れて是を頭いいただいて三里もある城下迄うりにいく、又毎日どうかして大喧嘩のない事がないがいつでも女がをらび勝にしてやるんじや女の喧嘩の上手なんは中中名高いわい、これがうらの村の女の自慢、男よりやがいに役に立つじやらう。

○　大阪　清　子

私の所は大阪の關門と云てよい川口てすから人や荷物が陸より川より海より集り來り人の聲人力車、荷車の音共に滊船の發着それは〳〵耳がつんぼになる程賑しい所です。

○　安藝　莵木　つろ子

お國自慢と云つても別にはありません子供が一家内に多い内は十二三人、一國を平均して七八人、お芋の澤山と、町の名産てはおまんぢゆう浦宗勝の城跡黑瀧山の景色そこから四國地が見えます。

○　若狹　長谷川　英尾

昔の大津繪ぶしにある通りてそれはこーなのてす、「他國て名高い八白びく尼、恐れながらいさざの御献上、遠敷の瑪瑙、若狹ぬり、桑村万金丹、山岸町の燒餅に、愛宕の松明もどりのにぎやかさ、沖の石大門小門の二見岩、祇園祭のどんどこ船は、外のお國にあらせまい、」と。

○　静岡　福井貞水女史

おらが國さの自慢話、遠慮なく申上ます、エー東海道筋ては見付粟餅袋井入て、頸に掛川堀の内、日坂越して金谷の峠で一ぷくやります。南御前崎より魚はドシ〳〵來ろ、佐倉、池新田より西瓜もまくわも、かぼちやもへちまも、北山からは材木椎たけ、西からは牛蒡人參蓮根里芋、併して國の名産は、製茶、蠶、米でも麥でも澤山穫れてほんとに遠州はよい所てござんすわ。

○　因幡　三橋　春代

諸孃知つて居らるゝてしよー於岐の島から鰐の脊を數へながら欺いて渡つた白兎あれは妾の村の鎭守神よ、今一つ村の衆に聞けば川下神社かあれはの彥火々出見尊樣が龍宮の乙姫樣と御夫婦になられて歸りに鵜草不合葺尊樣を產ましやつたて其の產家の跡を祀つて居るだのー、之れが妾の國自慢の一つ二つ。

○　山口　倉重　梅子

山口町の自慢を俳句て申し上げませう、「山口は西京に似て柳かな」「若葉して五つ並びし銅像かな」「龜山公園」「祇園會や三萬人に袖の彩」「凉しさや椹野の川の魚の數」「葉櫻や豐國神社三の宮」「溫泉に田植踊りを行きにけり」

○　長門　國　子

私は生れた此萩の里が一番好き、當今の名門を多く出せし地にて、淸き山あり美しき水あり、海あり島あり、東に田園廣く西に漁村の夕暮靜かなり、而して名産の夏密柑は我が一家の主宰者にて、今日此頃は靑葉の蔭に黃金を綴りたらんやう。

○　足利の少女

私の土地は下野足利町て織物の產地として世に知られて居ります機業が盛りてすからどうしても女に權利がありまして嬶天下に空つ風は全く名物て御座います。

○　奈良　星耕女史

相棒や新酒の醉に國自慢

川柳子は駕かきは己が在所の花をほめと所自慢は、やがて愛國心の卵とや聞き及ぶ靑丹よし奈良の都の八重櫻水が三分の魚七分まさずへらさず出ず入らずの猿澤池、春日の杜に群れ遊ぶ鹿

は愛らしき限りにこそ、亭には春日の火打燒きては大佛のわらび餅、通りは一條より九條まで大路は登、京極、今小路、町に御門の七つあり。

○　駿河　河井靜子

大宮は大そー水がきれいな上に澤山あります、町の兩側の軒下と裏とはたへず水晶の樣な水が流れて居ります、されば工業は最も盛んてす富士三大製紙會社を始め十餘の製糸會社は皆當地の水力によるのてす、町內には製糸工女多き故風俗わるし、茶は水があらき故風味なし。

○　遠江　川合ゆき子

遠州の七不思議として人々に知らるゝは京丸牡丹のいまだ見たる人なくして谷川に流るゝ壯六なる花瓣、遠州灘の波音遠ざかるに從ひ高くさざんざの松の八ッ根、軌道、櫻ゲ池の御はちめぐり、濱の砂岳の一晝夜五六度其の高さを異にし名代の夜泣石とて子供の藥など言ひつたへて近き土など持ち歸るとぞいふ。

○　兵庫　ゑみ子

妾は酒に名高い西宮の者でおます、當地にお越しになつた御方は知つてなはるやろうけれども、それは〳〵なか〳〵大したものだつせ、大きな酒藏がなんぼともわからん程おます、何處がよい彼所がよいと云ふたて、西宮よりよいとこはおまへん、又戎さんも外にはなんぼさがしても此の樣なよい宮さんはおまへん。

○　陸奥　すみれ

妾の町から三里の山奥恐山に地獄があります、妾の行つた時はお祭でした、お寺近くなると硫黃のいやな匂がします、三途の橋と申して惡性の人は糸の樣に見えて渡れないと申します妾は性が善いのでせう輕く渡れました、地獄は賽塚、合戰地獄、金剛地獄、血の池、女郎屋地獄、極樂濱、劍の山など種々あります。

○　堺市　みつ子

町の名では綾あり綿あり櫻あり神明あり大路小路の名も殘り歷史的には由緒ある港てあるが現在は餘り盛んてない但し小說家に浪六、新體詩に河井醉茗、西藏探險に河口慧海、短詩に與謝野晶子を出したのは大いなる名譽です。

○　磐城　佐久間ちよ子

私のお國は山も有り海もありますが產物では一名三春駒と云ふのが一番てす、山では移ゲ岳て、えらい人は皆此山の麓から出ます。故壁谷次郎太郎先生は數學の博士でした、現今のは河野廣中、伊東工學士の御兩先生です。

○　鹿兒島　松永きく子

東郷さんも出ていらつしやいますわ。それから大山さんも黑木さんもよ、雲か星かの樣に、むらがつていらつしやるから一々云ふ事が出來ません、西郷さんの誕生碑は、一ぱい櫻が咲いて、美しいてすよ、鐵砲を傳へた種子島もあります、月照上人の墓もあります。

○　茂子

松山より二里ばかり離れし松前と云ふ漁村から毎日賢魚女が桶の中へ魚を入れ頭に頂きて、鯛お買ひんかー○○お買ひんかーと、勇ましく市へ鬻ぎにまいります、地方てはこれを、おたゝと稱へます。

○　茨城　よし子

妾が里に土浦八景あり川口歸帆、霞が浦秋月、鷲宮夜雨、櫻橋晴嵐、錢龜夕照、西寺晚鐘、下田落雁、北門暮雪、以上てす此外に霞浦八景もあります。

○　小石川　佐川貞子

妾の里には靑年十八人あります、皆心掛がよくて何でも善い事には發起となつております月々の休日には一同て道路修繕、ほり掃除或は村長の許に集つて手紙や人道の話を聞くのてすそして貯金も今ては何百圓とあるそうです。

○　尾張　寺本須惠子

織田信長公、英雄豪傑と言はれし、豐臣秀吉公三蹟の一人とまてあがめられし、小野道風是等の名高い人々は、皆尾張から出てをられます。

○　長崎　高濱里女

新もぢき魚もちきに取れる金は端島高島の炭坑から搶ぎだすものは、朝の六時から辨當箱さげて坑內さがるも親の爲ヨイシヨ〳〵コラとは今まで滯納處分なんか受けた事のない高濱村の稼ぎ謠なんてす。

○　阿波　仁木花汀女史

妾の國に奇な物が三つある、其の一つは鳴門て今一つは五百羅漢てある、最一つは此の國に生れた人間で何の國の方言でも操る俗に阿波猿と綽名されている者、此三つは恐らくは他の國にあるまい。

○　上毛　河內汀柳子

上毛の新田といへば、誰も知つて居るでせう。昔南朝の忠臣新田義貞の出た處てす。寬政の三奇士の一人てある高山正之も新田の人てす。あ

の長く天下を治めて居た徳川氏ももとは新田の人てした。大光院は日本有數の寺院て、呑龍上人の德を慕はない者はないてせう。

○　千曲川畔　山崎　美きよ

誌友の皆樣上田の小縣早種蠶業學校は全國中一の校て毎年國中から四十名を募るのてす其から小縣蠶種檢査所は役員十二名檢査員六十名助手か百二十名、是て小縣が如何程蠶業が進んで居るか知らるゝてせう。

○　津市　坂　ふみ子

私の御國は伊勢よ、伊勢には大津宮樣が有る志名所て名高い二見が浦も有る、孝子阿濟平治の古蹟も有る、海は海軍の演習に適す。

○　小石川　松田　せい子

妾が故郷は羽後の角間川町といふ處てすが當地の附近から田村ネッコと稱し一種の泥炭がてます奇體なことには一旦採掘した跡に又其の泥炭がてきて何年掘つても盡きないのてすそしてこれは妾の町の附近に限るのてすてこの無盡藏の田村ネッコなる泥炭を弘法大師のお授けだとかつて言ひ傳へてゐます皆樣不思議てせう。

○　備後　白　露　子

備後の片隅なる我が三次!!　眞に美の集合地てある、中にも吉淨院の夜櫻比叡尾山の霧の海は最も秀なる物て如何なる詩人！畫人！歌人も筆を投げるホヽヽヽ大變な自慢てすれ、もうよしましよう！

○　徳島　齋藤　菊子

市から東北へ三里にして、板野郡撫養町と、云ふがある其の海岸に、大毛山と云ふ有名な、山がある此山の頂きに、姥が懐と云ふ處がある、此頂きから見降すと、鳴門海峡が一と目、此眺望は秀たもの、渦が起つてる有樣、夫れから漁船から漁船へ綱を引いて、鯛魚を漁してる有樣。

○　濱町　こばやし

私は大阪者だすわ、「住吉の處むる野田の天狗芋之が浪花の里のはな高」てお芋が名物、堺には一休和尚「門松やめいどの旅の一里塚」の古蹟あり、堺を三里隔てゝ信田の森あり昔旅人此所を通りしに竹林中にゴッ／＼音す狐に非ずやと竹林中を伺へばこは如何に「ごそつくなのぞけば竹の皮拾ひ」と和泉名所記に見ゆ。

○　秋田　黑丸　登美子

金澤町、昔八幡太郎義家の家衡武衡を攻めたる金澤柵の跡あり其所には武衡の潜めし蛭沼あり、花館町、戊辰の役薩州惣大將として來りし島津新八郎の墓あり、田根森村。田村野あり此野より泥炭を產し（此地にてはネッコと云ふ）近村にて炭に代用す臭氣あり、當町物產は魚類のみ、秋田縣中最も有名なるは鰰、鰊、秋田款冬、春慶塗、黃八丈、畝織、木綿類。

○　明石　植木　初江

妾の郡は風景の絕佳なる舞子ヶ濱、當明石城の離宮、人丸の盲杖櫻、明石鯛、赤坂の煙草、一代て二百萬圓程の資產を造つた多額議員、一郡から代議士が二人、明石の農學校女子師範農事試驗場等の興農敎育の發達、郡民の一致して勤儉貯蓄の美風ある、妾の村は日本の三清水の一流れを汲つて居る等。

○　大阪　白　梅　女

大阪の商業の盛な事は申すに及ばず景色のよい事は又格別てす中ても天神橋上から東を見た時又生駒山の朝ぼらけときたらどーして他のお國にありましようか其證據に旅行に行た人が歸阪後天神橋から東をむひて大阪城を見た時「なぜ此結構な地に住て旅行に行つたのてあらふ」と云ひます。

○　岐阜　渡邊　露子

遊覽地しとては、有名な長良川の鵜飼、鏡ヶ谿公園、篠ゲ溪の梅林、伊奈波神社、等、古蹟は先づ金華山の城趾を始め織田塚、御手洗池、崇福寺信長公の墳墓、等、名產には岐阜提灯、團扇、縮緬、鮎、うるか、ナフキン、美濃紙、日本傘、等が重なものてす、殊に角岐阜は夏向きの所てすから皆樣夏期休みには是非御遊びに被入しやい。

○　花園　植木　きく子

一とすじの糸引きたらむやう皇統連綿と永久にきわまりなき天帝を上にいただいたのは世界の中て小さいながらも吾國ばかりそんな國に生れた妾しらの幸福はいかばかりてせう。

○　播磨　惠子　女史

高砂相生の松別府手枕松古の歷史に明い尾上鐘等亦た工業には毛織會社製紙會社燐酸肥料等何れも其種の大發展を加へ年に內外へ賣出金高は千百萬圓の多額に上る。

○　信濃　す　ゞ　子

「吾信の地は秀靈の地ぞ」とは私の國の者の口から出る自慢てす、てすから產物としても生絲の樣な清ひ物を出します。

○　下野　濵　子

妾の國は下野なのよ澤山あつて書きゝれないわ第一に世界にも名の響いてゐる壯嚴な日光と足尾の銅山織物で名高い足利木綿に名を得た眞岡それからお隣の慾張りお寅といふお婆さんてすよ。

○　茨城　小泉　はま子

洋々たる太平洋東岸を洸ひ利根川は漫々として西域を流る、紫の筑波山は美しく雲外に聳え清き霞が浦はほんのりと霞んで鏡の上に紫の煙を漂はした樣てある、こんな美しい國だから昔から英い人が澤山あります、德川光圀を初めとして藤田東湖、今の下田歌子女史、小泉少將、佐藤軍醫總監、力士の常陸山など數ふれば無限てす。

○　豐後　後藤　光子

妾が住む竹田には皇國三險城の第一たる臥牛城あり賤が嶽て戰死を遂げ太閤を安眠させた藩の大祖中川淸秀公、南畫の大家竹田翁勤王家として小河一敏先生、世界に軍神と叫ばしめし廣瀨中佐恐らく日本て誰一人之を知らぬものはあるまい。

○　岩手　三　光　女　史

名前は申されませんが、妾の村に年頃五十許の親爺ががんす、邊幅を飾らず、髮髯茫々、眼光異樣、春夏秋は大麥稈帽子を首にかけ、冬は雪合羽を離さず、一見變人としか受取れない、そして大言壯語豫言らしい事をいふから、皆楞内の氣象臺と綽名してる、昨夏なども後の酒屋の腰掛て、「ヤア〳〵今年飢饉だ、米飯食やない困つたもんだ」と。

○　越後　水野　りそ子

妾の國は雪が名物よ雪が降ると枯木に花がさきどろ途が銀道とかはり藁屋が銀殿となりますそれが東京等と違ひ五ヶ月も六ヶ月も白銀世界になつて居ります。

○　岡山　長門　正子

名物ては日本一の吉備團子名所ては日本三公園の一たる後樂園佛閣ては五百羅漢人物ては花蓮輸出先導者たる磯崎眠亀氏人命救護者たる孤兒院主石井十次氏なり現孤兒千を以て數ふべし之が岡山の自慢。

○　美濃　木村　竹雨子

妾の國て名のあるものは揖斐川長良川木曾川の三大川ありて水害と養老の瀧と昔酒となつた菊水と長良川の鵜飼と關ヶ原の古戰場と西國三十三番の觀音谷汲山とてす誌友諸孃樣御遊びに被入しやい。

○　土佐　弘　光　芳　樹

私の國は三面に山を負ひ、南は廣い〳〵太平洋に面し一大灣をなしてゐる昔は黑田郡とて五十萬石の陸地が續いたが白鳳年間の地震に沈んだのである、けれども天下の第一品たる鰹節となる鰹も、珊瑚樹もこの灣内より産するのである、陸には木材、半紙、土佐馬は有名なる産物てある土佐のや—〳〵これも言葉自慢の一つてある。

○　山口　村　田　節　子

私の居村は安岡と申しまして六連島を前にひかへ實に平和なる村てす漁民が多う御座いまして夫は大抵八月頃から翌年二月頃迄對馬國に漁業の出稼ぎをします女は十七八才頃から魚を木製の「ハンギリ」といふものにいれ重量凡七八貫乃至十貫もあるものを頭に戴き早朝から下の關などに賣りに行くこれを「カネリ」といひ升そして賣方は關買へ請買へなど命令的に觸れ歩きます の之に一つの傳説がある昔平家長門壇浦に滅亡の時其の落ち人が我安岡にきて此「カネリ」を初めたと言傳へて居升偶然にも極少き鯛を當地に限つて小平家といひます。

○　埼玉　柴　田　妙　花

私の方の町には別に變つたものもないの、けど、昔忍城のあつたあとにれ公園があるの、そこに忍神社や東照宮があるの又春は櫻夏はあやめ本當に四季それ〳〵よ名産は御存じ?、足袋よ本當に足袋屋が多いの記者さんも皆樣も入らつしやいな御案内するわ。

○　豐後　白　菊

私の國には有名な温泉が澤山あります其内ても別府は、後に名にしおう豐後富士の峯高くそびえ前にはさゝ波靜なる別府灣の眺ありまして生魚の美味が得られます。

○　紀伊　中　西　花　子

妾の地方は有田密柑の本場てす御庭の植木迄も蜜柑の樹許りなのよ、秋になると目の及ぶ限りの畑は實に黄金世界の樣てありまして、赤いたすきを十字に、籠を左手に、ハサミを右手に、蜜柑を收る程、面白い事樂しい事はありません。

○　三重　山田　ひさ子

神風の吹く伊勢の國にしあれば、海の靜かなる山の秀てたるは言はずもがな、氣候の温和なる

五穀の豐けき、げにかゝる國の又とあるべくもなし、見よや一度此の國に住馴れたる人々の去り難なの思ひ、戀ひ慕ふの樣を。

○　越後　上野　志爾子

冬季の深雪、冬季各市街の軒下通行人の多き事、夏向きの、絹布、上布、織り方に上手なのと產額の多きこと、男女競爭して働く事、他方へ出稼する事、數揃へたる上等の諸道具準備する事、これだけが妾のお國自慢です。

○　北見　高橋　專子

ほんの田舍、村民は大抵漁夫、そして村長樣はたいへんお人好しの方です、世界三大漁場の一つになつてある北海道で私の所は鰊鱒昆布など一番主なる海產物に富んで、其の內鱒は最も多く獲れます、昨年は軍用鑵などを製して澤山戰地に送りました。

○　讚岐　松永　茂子

妾の國の名高い事を申し上げましやうなら、景色の佳い所では恐れ多くも東宮殿下の御宿泊なされし栗林公園、今上天皇陛下の御幸あらせられし寒霞溪以下十二景あります、神社では琴比羅宮、豪い人では弘法大師、平賀源內、向山周慶等があり、名產では讚岐砂糖があります、そして氣候は夏は暑からず、冬は寒からず。

○新課題

▲好きな人嫌いな人（六月五日限）

▲詳しくは六號を見よ。

▲詩文を作る時（七月五日締切）

▲詩歌や文章を作る時に皆さんは何うして作りますか、それを承はりたい▲考へを凝らすには何う云ふ風にしますか▲次では朝が作りよいとか、夜に限るとか詩文を作る時▲或は寢て考へるとか、或は道を歩きながらとか、庭へ出てとか、忙しい時とか、人さま〴〵に癖があるものです其れを承はりたい▲机の上でお書きになるか、それとも外に書く時の樣子▲半紙がよいとか洋紙がよいとか書く紙、用ゆる筆にも好みがあるでせう▲要するに皆さんが詩歌文章を御作りになる時の心持と、周圍の樣子とを成るべく正直に書いて下されば結構です▲半紙に七行以內長いのは取りません。

○諸孃と記者

○記者先生樣一寸御伺ひ申しますがあの懸賞文集の讚書と云ふところに（一葉女史著通俗書簡文と三輪田眞佐子著女子の本分）これはどこで發行し定價はなにほどですか次の誌上で御しらせ下さいませ（西多摩粕谷ぬひ子）（記者曰、通俗書簡文は二十五錢博文館發行、女子の本分は國光社の發行で確か三四十錢の價です）○記者樣私は高等女學校の二年生で誠にふつゝかな者ですが文藝をいたく好みまして、女子文壇を愛します、未だ投書なんか出來ませんから、只、ひろく書を讀んで、見やうと思ひます、これから氣候もかはりますから何分御體を御大切に、さよなら（鹿兒島市、松永きく子）（記者曰、「愛讀者たれ」の味方として孃の如きは賴母しき一人、幸ひに健在なれ）○記者樣先日は御丁寧に賞品をお送り下さいまして誠に難有たう御座います實は御銘々に御禮狀を差上げますのですが略儀ながら當欄にてお禮を申上げます不惡（淺野梅子）（記者曰、拜承）○記者樣、私、之で最早五回程投書致しますが每號皿の樣な目をして見付けてもつひ影も形も有ませんほんとにがつかりする事が幾度だか知れません、然し之からはなれましたから決して氣を落しません（くれがし）（記者曰、決して氣を落してはいけません、其うち何か出ます）○御伺ひ申します、多數の原稿を一度に投書する時皆まるめて帶封にして出しては惡いでせうかお手數をかけまして濟みませんが次號にお答へを願ひます（神戶市楠町三町目二四ノ一石井愛子）（記者曰、宜しいが成るべく叮嚀に捲いて下さい）○記者さんに一寸お伺ひ致します私は水彩畫が大好きで土地の風景など寫生したのを持つて居ます貴社の女子文壇に挿んでくださるでしよふか出來ますれば一枚おはづかしいものですが送ります（小梁の里とれ子）（記者曰、折角ながら水彩畫は紙上に載せません）○記者樣私はじめて投書致しましたのが案外にも入撰いたしましたので（第四號消息文欄しらゆき）おどろきました。此の上とも勉强するつもりです（弘前市馬屋町二二澁川信子）（記者曰、初めて投じて當選するなどは珍しい方でせう勝つて兜の緒を締めよて此上とも初めに得た名譽を墮さ

ないやうに）○妾は少し考へる事がありましたから、世ノ皆様と御文通の交際も致しませんのです、其かわり記者様と妾とは最も親しく親子のようにして戴きたいものです、妾は記者様を作陰師の君と仰いで居りまする妾は號を貞水と致しました（靜岡縣小笠郡みち子）（記者曰、御考へのある事なら、それも宜しいでせう、記者は申すまでもなく、誌友の皆様とおつきあひ致して居るつもりです、）

○諸孃の交際

○學校卒業以來獨身で誠に寂しき故諸孃の御方と交際が致しと―御座りますから繪はがき及栞の交換を願ひます御禮として有名なる白鷺城の繪はがきを御返送致しますよ（姫路市外玉平村菅野ふさ子）○願くば繪葉書寫眞手紙交換等致し度永久に望御交際、諸姉よ栞や編物等御送付おめぐみ被下御方には先着五十名を限りはづかしき乍ら妾の寫眞と書籍とを御答迄に御禮致す（群馬縣伊勢崎町大山いせ子）○みな樣私今度こちらへ參りましたから御手紙は、どうぞ下のところへ御れがひ致します（札幌區南一條西五女子職業學校内小鹽清子）○皆樣四月の誌上へ私の名を以て御交際を願つた者がありましてお手紙をたくさんいたゞきましたが私は未だ高等小學三年生で今年十三歳になつたのですまだ御交際出來ませんので御返事出しませんからあしからず（神奈川縣愛甲郡下川入村佐野衣子）○とこしへに趣味の交換致したふ存じますから、お手紙に、繪はがきに、お寫眞に、何づれなりとも、よろしいから、御惠みして頂戴な。すぐ樣、お返し致しますよ。又食道樂夏の卷よりますから、お望みの方に上げてもよろしふ御座います。（常陸國多賀郡高萩町江尻滿砂子）○片田舍のもんで此度初めて御目にかゝる者ですが何卒以後末ながく御交際を願ひます（富山縣射水郡下村字三十三ヶ村館萩枝）○氣仙沼のてる子さん私も愛讀者ですが貴孃とは同縣でおなつかしう御座います以後何卒御交際下さい（陸前登米郡佐沼町三四四、七十七銀行出張所内牧貴美子）○富山縣上新川太郎丸金森庚子石川の高等女學校を本年漸く卒へし田舍者とはに交際を望む○私は田舍生れの極つまらない薄學の者ですがどうか今後玉章や繪はがきの取かへを御願ひいたしますまた書物や編物なんかと何卒して頂だい（奈良縣奥宇陀神末鈴木内愛子）○御交際下さい又玉章御寫眞雜誌の交換をお願ひ申ます（岐阜縣大垣郡菅原醫院内愛子）○末永く御見捨なく御交際を願ます（横濱市長島町二ノ十一、石井勇吉樣方鈴木愛子）○本誌愛讀諸孃妾に御寫眞や編物栞を送つて下さいませんか御禮には美しい繪葉書に寫眞畫報とを上げますそして繪葉書や地方新聞の交換をして下さいませんか（山形縣山形市下條町齋藤醫院内白百合）○本誌愛讀者の姉樣方、私はまだ滿十五歳になりませんけれど、愛讀者の一人で御座います、御交際下さる方は、どーぞお玉章頂戴、（北海道松前郡福山四十三石塚方もと子）○妾當年とつて十四歳よそして第六號からの愛讀者となりましたから以後御見捨なく御交際をれがひます（神戸榮町五山崎きた子）○皆さん私病氣て〻醫師の仰で今では戀しい學校へも行事出來ないでねブラ〳〵してるのよ諸孃の中で私をあはれと思す方は編物栞繪はがき等送つて頂戴御寫繪送つて下されば尙有難う。御禮には紀念繪はがき暗黑の東京、金色夜叉不如歸等其他書籍澤山有ますから先着二十五名迄に進じます（岡山縣勝田郡古吉野村出雲井龍子）○皆樣妾はお兄樣が東京へ行つてからは淋しくて仕樣がありませんからどうか面白い事な澤山書てお手紙を下さいな直に御返事は差上げますから（岐阜市今小町津之國屋方松浦文子）○記者先生男子の方から澤山送つて下さるのですが兄が餘り交換してはいかんと言れるのですが殿方でしたら返事せないでも宜しいでせう（郡山峰子）○麻布の八重さん貴女の御在所を一寸報せて給ふ！御芳名は文壇で伺て居ります：：：芝區の：：：難波田歌子さん、過日は失禮致しました：：：私の宅にも御手紙下されな：：：！（麻布區網代町二十番地香蘭女學校本科生加藤廷子）○妾淺學ながら文學の趣味あるを信じいよ〳〵思想を高めてまだ多くの趣味を得んと希望致者にて候若し御同感の誌友あらば自作の文章また御交際のほどせつに願上候（東京牛込南榎町十六番地遠藤北舟）○私は昨年小學を卒業した田舍者ですが奉公致したく思ひます諸姉樣の中で御使ひ下さる方は御座いませんか何卒お知らせ下さいませなるならば岐阜か名古屋邊りがよいと思ひます（岐阜縣土岐郡釜戸四十三山田すみれ子）○外國の事とて何一つ樂みも御座いません皆樣御交際を願ひます書物、栞、玉章など御送り下さいますなら早速十人限り上海の繪へが

き、支那人の響を御返しいたします（上海文監師範樋口島子）○私一寸御願がございますそれは皆樣の内にて與謝をよんでゐられる方に御手紙で通信いたしたう思ひますのどうぞ宜しくとりはかろうて下さいな御願ですから（大坂北區曾根崎中一丁目一〇四九番地金戸信子）○昨今すみれの花盛りもしお望みの方が有りますなら繪葉書てお知らせ下さい押花になしてお送り致しましよう（肥前北松浦郡小佐々村松永幾己子）○諸孃樣妾も文壇愛讀者の一人てす宜しく御交際下さいまし（福岡縣筑前嘉穗郡足白村繩田松子）○北海道の本郷直枝子さん先日は御玉章ありがたふ何卒御交際を願ひます早速御返禮申し上げよふと思ふた處生憎轉宅の爲め混雜中貴孃の玉章を失つたので……遂住所が分らないので許して下さいよ（弘前市品川町十六番戸高橋方佐野みどり子）○皆さん妾も愛讀者の一人てすから御文通を願ひます地方新聞繪葉書の交換もして頂戴妾も屹度返信しますから（下總印旛郡臼井町角來繁坂重太郎方さく女）○親しき諸孃樣方よわたくしも愛讀者の一人てすからどうか御交際下さいませ（熊本縣下益城郡小川町稗方登美子）○親愛なる吾が壇友諸姉樣よ妾は牡丹咲丸咲其他數種の朝顏あり升望みの方は白紙の畫又は自筆の繪端書送りて下さい（千葉縣千葉郡富里村五百十二番地秋葉とよ子）○只今迄お便り下さつた方は追々御返事さし上げますから御承知下さい皆さんたんぢやくや色紙に御自詠一筆づゝかいて其うらに住所氏名年齢をなるべくかいて送つて下さい妾も必ず御返禮に自詠をさし上げますから（美濃關相生町加藤裁縫舍內傍島美遊喜）○御寫眞繪葉書新聞雜誌シオリ等の交換もして下さい御送の御方には必御禮申上ます（讃岐大川郡三本松本町堤しず江）○陸中の篠かつ子樣貴に御同情致します私は兩親はありますが病氣のため學校を退學する事となり只今樂みは女子文壇誌上て皆樣に御目にかゝる事のみ（諏訪きよ子）○誌友の御中て、今年十六歲ぐらひで女學校二年で親切て、品行方正で末長く御交際下さる方はありませんか？。只御一人、そんな方があつてほしい（鹿兒島一女學生）○皆さん長々御無沙汰いたしまして濟みません何卒宥したまひてよ扨妾朝顏の種が是非欲しいのよお持のお方は少々送つてよ妾屹度相應の品かまた妾の所持してをる草花のたれを送りますよ（常陸高濱町東大橋川並義八かたにてはくえ子）○皆樣の中て福島縣のお方はありませんか妾の里は白河の少し北てすが今は此地に修業して居ります皆さんお暇の時玉章を下さいれ妾必とあげますから（小石川原町一〇ヤナイ方佐川貞子）○諸孃樣の內に手なし朝顏の種子を持てゐる方はありませぬか、たゞは乞ひません與れて下さい、そして、妾のうちにぶちめ一切の妙家傳藥があります、御用の場合は遠慮なく御例しあそばせ（磐城國田村郡瀨川村新舘佐久間ちよ子）○神戸の津村ひろ子樣へ貴女も私等と御同意の由玉水樣から伺ひ嬉しく存じましたそれからよろしく御交際して下さいませ（東京市四谷區永住町一岡部みゆき）○皆さん文通なして下さい直ちに御返しいたしますよ（石見那賀郡濱田町石本鶴子）○よろしく御交際下さいな（秋田縣橫手町平田なみ子）○田舍のことゝて新しい風もなか〱吹いて參りません不束ものですけれどだうぞおしたしみ下すつて新智識をあたへて下さいまし（岩手縣下閉伊郡鍬ヶ崎郡港口まろ子）○大阪田中靜子樣貴女小夜千鳥と申し上げるそうですれ、私等二人を知つて居らつしやいますか私等は第一盈進て貴女と同窓の友でしたの、靜子樣誰だかあてゝ御覧遊せきつと御存じで居らつしやろウ、（大阪白露白梅）○私はいなかの者ですが、これからは、どうぞすへながく御交際を御願申ます（福岡縣嘉穗郡大谷村字鹽頭西部古河鑛業所內田靜子、塚本ふく子）○秋田の高橋はつ子樣若林きつ子樣おなつかしく存じます、どうか御住所お洩らし下さい、誌友諸姉樣も相變らず御交り下さい（美濃國大垣郡郵便局區內牧村木村あさ子）○毎々皆樣のお話を承つてばかり居まして、妾から皆樣に申上ますのは是れが始めてゞすよ新しく學期を迎へたのですから、十分勉强をしやうてはありませんか、尚亦妾もお手紙を差上ますから、皆樣も御寸暇には何か面白いお便りを願ひます、（兵庫縣加古郡東二見村三百拾番屋敷內佐藤惠子女史）○私は都合があつて盛岡の地から北海道に參ろをとなりましたから以前に倍して御いつくしみ下さいませ（北海道後志國岩內郡御鋪內町本庄方江刺家つや子）○誌友の皆樣私は淋しげき山里に樂み無く暮して居る淺學なものてありますがどうか御交際を願ひます（千葉縣印旛郡富里村中澤篠原信子）○皆樣の內に琴の新年の川と云ふ

歟御存じてしたらうつして御送り下さい相當の御禮いたします（攝津武庫郡西宮町中西ゑみ子）○愛讀者の皆樣御無事御勉強の程希望致します（福岡縣筑前國嘉穗郡足白村馬見細田靜子）○皆樣末永く御交際下さい（越後刈羽郡柏崎町中林信子）○私、本誌前號に皆樣に御交際願ひました處續々御手紙頂きまして誠に嬉しく存じました然し乍ら父に通學中けと意見されましたので誠に失禮ながら以後只誌上で御交際いたしますまだ返事を差上げない方も或はあるかも知れません右の事情故御許し下さい（日本橋區元大工町十五松井病院內靜代）○誌友の皆樣何卒英文て御交際をねがいます私もきつと御返事さし上げます（茨城縣久慈郡天下野村滑川千代子）○御諸孃樣方私は不束な者てすが今年裁縫女學校を卒業しましたから毎日女子文壇ばかり指折り數へて待つて居ります諸孃樣御交際をねがひます（兵庫縣丹波國多紀郡古市村之內雁山三四藤原かれ子）○皆さんお久しぶり又相變らず講義書などの御交際を願ますもし廣島高等女學校の鐵衛女史樣と仰しやる御名簸なお方御存じなら妾のところまで本名を知らして頂きたう存じます（秋田縣角館川町うら町松田勢以子）○韓國林しま子さん先日は奇麗な繪はがき御送り下さいまして有り難う妾は返書にあります通り兄弟一人もないほんの一人娘てありますから永久御交はり下さいなれ願ひますよ廣島の林菊子さん御許は上流川町廣島女學校に御在學てはありませぬか失禮ながら御たづねいつします（越前今立郡北川野村矢放佐野よし雄）○不幸にも去る三月十二日夜桑名町千歳座より出火いたし私宅は母と二人ぎり故何物も出さず丸燒と相成衣類は申すに及ばずすつかり燒きましたが思へば衣類は又てきる物なれど又と出來ぬは此文壇何卒いたしたとへ一冊なり共手に入れ度思へど交換願うべき書もなく思へば悲しく夜の目もあはざりしがとてもかくべきにあられば一度皆樣にお願ひ申して見んかといくたびか筆とりしが私がかくほしく思ふも皆樣の大切に思召めすも皆同じなるに鐵面皮にも其樣な事の御願ひはてきず思ひ止まらんと心に定めど扨てもうあの本は手に入らぬかと思へば悲しく皆樣に笑はれる迄も一度思ひ切りて御願ひ申して見んとあつがましくもかくお願ひ申ます何卒情ある御姉樣方どのやうにやれている共有難く存じます故お惠み下され度お惠み下されました方にはつまらぬ繪葉書て只（御禮）と記し差上ます其內いかなる本なり共私手に入りましたら御返禮申ます何卒お聞入れ下され度お願ひ申上ます（伊勢桑名南伏見町二丁目山本淺三方森部蝶子）○尾道市佐々木ますよ樣二卷六號の御通信有難ふ石莲丸の歌送つてもらひましたから此度は……惡からず思召し下さいな（富山小林芳枝子）○諸孃よ一重に御交際あらん事を（上野新田郡藪塚本町伏島筆子）○此頃暇が出來ましたから御文通を願ひます（下關市田中町樋方杉岡方菅谷みどり）

○寫眞交換

○繪葉書や寫眞の御交換を願ひます此春凱旋した兄が持て參りました清國の縫取や風景風俗の寫眞が澤山ありますから御のぞみのお方は御遠慮なく御申越あれ（千葉縣千葉郡津田沼村大字大久保石井喜太郎方大村すみ子）○なつかしい皆樣と顏を合すのは妾の何より樂しみなのです願はくば何卒寫眞やヱハガキの御交換をぜひぜひ御願ひします御返しはたしかに致します（秋田縣山本郡能代大町渡部醫院內都美幽香子）○皆樣私も壇友ですから御寫眞や御玉章繪葉書の御交換を願ひますきつと御返しは致しますから（福岡縣糸島郡前原町山木龍子）○諸姉樣方の內て自分の寫眞御持合の方は裏に御住所姓名年齡を書いて御送り下さい先着の順序に新らしい諸雜誌を皆々樣御一同に美麗なる繪端書を添へて一冊づゝ御返送致します（信濃下伊那郡龍江村四○島岡新子）○妾交換をお望のお方お二人に寫眞を送りましたが一枚しかお返しがありませんかゝるはらのくさつた者には何も申しませんだめてすから、何卒皆樣よ妾はきつと御返しいたします（愛知縣中島郡豐田村字友松濱口平野春子）○親愛なる諸孃樣、御寫眞ヱハガキ及雜誌の交換を願ひます（紀伊動木町北原芳郎方つゆ子）○皆樣御寫眞を送つて下さいませんかそして御交換して頂戴な（東京麴町區三番町六十入番地古川方多田みの子）○誌友諸孃樣よどうぞ御うつしゑ送りて下さい美濃名所養ォ瀧寫眞差し上げます、以後宜しく御交際御文通をお願致します（美濃國大垣郵便局區內牧村木村淺子）○何とぞ御交際御願ひいたします御寫眞送つて頂戴女學世界シナリなどお望みの物御禮いたしますよ（廣島縣雙三郡三次町背原醫院內背原くみ子）○地方名所寫眞の御交換を望む、御贊成

の方はどし〳〵送りて下さい（美濃國大垣局區內牧村木村あさ子）○本誌愛讀の諸孃よ妾は飛井山の傍に住する者てすが以後何卒御交際を給らん事を、猶寫眞の交換も、必ず御禮申ますから、繪葉書もねえ、（東京府下王子村千三百五拾四番地柳下則靜方にて三輪はる子）○どうぞ皆皆樣御寫眞を送つて頂戴な、妾は御禮として「言海」一部、「夏子」四冊、鳥居君子著「上總のやどり」六冊、薄田泣菫作「行く春」二冊、與謝野晶子著「みだれ髮」三冊、中村春雨著「無花果」一冊、柳川春葉著「綠の糸」二冊を抽籤もて差上ます、（芝區新錢座町八鶴崗かつ子）○文壇愛讀の姉君たち其やさしき御寫眞を此山里の一少女に送つて頂戴な、どうか裏面へお姓名と年齡とを書いてね。此月十五日迄にお送り下さつた方へは伊勢大廟の神符か又は伊勢名所の寫眞をさし上ます但十五日に取纏めて發送します（伊勢國相可驛間宮雅子）○妾はさま〴〵の雜誌の口繪を持つて居りますがね、寫眞と栞送つて下さる御方に五枚宛上げますが、交換して下さいよ御文通の方へも御禮申しますからどーぞ御交際して下さいな、それから寫眞と栞送つて下さる御方は十五日限りてすからね、前着後着とも口繪を送ります必ず〳〵（越後中蒲原郡早通村大字泥濁、村山芳子）○何卒文通をねがひます又レッターに御寫眞をそへて下すつた御方には寫眞ヘサミ栞、花センシキ各一品づゝ差上ます（上野新田郡藪塚本町伏島肇子）○皆樣御寫眞送て下さい、まづいてすが私の寫眞ておかへしいたします、私の寫眞がたりませぬときは神戸繪葉書と新聞ておかへしいたします、御寫眞下された方が神戸に御出下さらば寄て下さいきたない家てすが（神戸市加納町三丁目谷山輝子）○皆樣よ御玉章や寫眞繪葉書の交換をしてくださいな寫眞は申込の方先着十名にかぎり妾しの姿繪に美麗なる刺繍のある支那緞子か縮珍でも一尺だけ差上ます繪葉書を下すつた方には紀念日の捺印ある繪葉書て御返し致します（千葉縣千葉郡津田沼町大久保熱田方石井まさ子）○誌友の諸姉樣よ、繪はがき交換をなして下さい又寫眞の地方亦は御自分の物をも、返信は手前の寫眞を（上總國長生郡新治村桂小川くに子）○誌友の皆樣お寫眞お送り下さいな御禮には二十錢以上の書籍差し上げますなほ上等繪はがき下さらば雜誌類を（長野縣北安曇郡大町八日町櫻井みさを）○姉樣何ぞお寫眞送て下さいな私も早速御返し致します男子の方はおことはり申ます（神戸加納町三町目谷山内輝日女）○妾し勅題新年河の紀念彫刻メタルを持て居りますから寫眞編物御送り下さいました方へ壹個宛差上ます（福島市中町二花野芳江）

○編物と造花交換

○愛讀者の皆樣の內絹のシチリお持ちの方がございましたら繪葉書と交換して下さいませんか先着九名の方には特に美しいのをさし上げます（神戸諏訪町大島さち子）○妾も栞珍らしき「ハンカチフ」などを作て居り升から繪葉書寫眞にて御注文を願ひ升又色々書籍も以て居升（橫濱市若水町十一坂野庄兵衛方水口那與子）○皆樣私すみれの押花致しました御入用の方に差上ますから美しい繪葉書て申込て下さい二十名に差上ます男子の方はおことわり（越後柏崎下町橋本とふ子）○妾も女子文壇愛讀者てすよ以後宜しく御交際を賴みます。又栞編物を送つて下さいきつと美麗な繪はがきて御返しいたします（山口縣阿武郡紫福村岡千代子）○妾におもしろき小說や繪はがきたくさんありますからあみものを送つた方へ先着五十八名だけに送て上げ升（秋田縣仙北郡大曲町高島豐吉方村井花枝）○栞を送つて下さつた人には相當のリボンを差上ます、文通もして下さい、以上くれぐれも御願致しますよ（廣島縣安藝郡牛田村平川和一樣方研野敏子）○諸孃の中て押花御持ちの方何のでもよう御ざいますから（花の名を明記して）御惠み下さい御禮には下手てすが自製の栞差し上ます高山植物及臺灣などのは（高山植物ならその由を書いて下さい臺灣などのもその通り）栞の他にリボン呈します。（陸奥弘前市本町横島方村林やす子）○諸姉樣方御願ひてすからどうぞ編物御惠み下さい（陸奥弘前市本町橫島方村林やす子）○栃木縣上都賀郡足尾町間藤暢和館關塚繁子何卒皆樣寫眞の交換を願ひ上ます○快活賢明なる諸姉樣よ妾も本年から愛讀者となりましたから宜敷御交際を願ひます妾栞を少々持て居ます御入用の御方には差上ますよ（下關市田中町本一杉山愛子）○皆樣編物のひい形おもちの方はどし〳〵おかし下さい（岐阜市上大久和町野田浪子）

○圖書換讀

○私の手許に俳諧寂栞及染色法不用に成て居り

ますが諸孃様のうちで歐學書か料理書で御不用のが有たら御交換を願ひます（岩代國須賀川矢吹しう子）○皆様の中に木下尙江著の小說火の柱及び懺悔、舞姬、金帆、悲歎戀歎、二十五絃、藤村詩集、黄菊白菊、等御不要のがあれば、武家時代女學叢書、女學生訓、馬琴旅行文集、其他の圖書と交換して下さいませんか（廣島縣備後國府中町字東町後藤いわ子）○音樂書「クラーク氏リード、オーガン、メソード」「コレマン、エナソン氏ットーア、フチーア、ジ、マンドリン」「ア一、ソングス」「ルビンスタインソングス」「ヘルマン、ヴアイオリン、メトード」其の他内外の音樂唱歌書澤山あり宗教文藝哲學等の書と交換若しくは相當代價にて御讓り致してもよし望の方は葉書にて御申込下さい直に返事します（横濱市長者町九丁目百番地秋葉かく方里の子）○妾に芭蕉俳句評釋、百人一首通解、ムラサキ一冊、家庭雜誌二部、女學世界定期增刊女重寶記、等不用なのがありますが誰方か小扇、みだれ髮、片われ月、外歌集と御交換を願ひます（羽前米澤市下矢來町釜屋政子）○王子大谷みどり様、先日は花紅葉御送り下さいまして有難う存じました厚く誌上で御禮申します（東京本郷伊東文代）○草村北星著「澄子」御望みの方に差上げますから繪葉書で御申込の事（大和五條町保田方美鈴々子）○誌友令孃諸君妾は女子文壇はかき文學、中學文壇、等其他色々の雜誌を持て居りますから御入用の方は上等の繪葉書にて御申込くださいー冊づゝ送り申します（新潟縣新潟市本町通八番町長谷川喜作方小原孝子）○東陽堂發行の風俗畫報增刊「鎌倉名所圖繪」「東都歲時記」上下「江島名所圖繪」相當代價にて御ゆづり被下又は繪ハガキと交換いたしたし（周防德山三〇四藤井方紅影女）○妾方に左の書物不用になつてゐますから御入用のお方は繪はがきて申して下さい着順に贈呈致し升但女子文壇誌友でなければいけません大絃小絃溪韻松聲みだれ髮花ざくろ深山櫻暗香疎影天地有情女子衛生學家庭の栞麗句類纂女學世界二十六册等（紀州日高郡藤田村吉田阪本春松様方太田佐代子）○私は今泉定介著の平家物語讀本及同平治同讀本及保元物語讀本がありますが誌友の皆様小說なり詩集かと御交換して下さいませんか（茨城縣久慈郡天下野村滑川千代子）○誌友倶樂部の姉上様、妾は武部美千代の妹で御座いますが姉は此度一身上の都合て歸國致しまして妾が代て女子文壇を愛讀する事になりましたから何卒宜しく御導き下さいませ、就きまして紀念の爲妾及姉の愛讀して居た小說、詩集雜誌等を皆様方に差上度いてすから、繪葉書に御寫眞を御副へ下さいまして御申込を願ひます（伊勢國度會郡宇治山田町字中之切町西村いしの様方武部栗[illegible]女）○誌友の皆様へお願が御座います皆様の中に離小島の山御不用のお方あらば妾の和洋草花培養法と御換へ下さいな又黑百合女二人孃姉上篇等ありますが何かの小說と御交換下さい（岩內町堅台町米田方にて大島春江）○私の手元に小說戀ゝ戀女男星心中くらべとがあいて居りますどなたか伯爵夫人又は魔風戀風と御交換下さいませんか（陸前登米町秀月子）○皆様妾「孝女白菊」「汐干狩」「憧兵」などの唱歌もつてゐますからまだごぞんじない方にはお敎へ申しませう（富山市總曲輪四〇〇小林芳枝子）○妾し拙き畫二十五枚程描きましたどうぞ皆様も御自畫御送り下さいまし必ず妾も御送り致し升（福島市中町二花野芳江）○私の手許に春陽堂發兌尾崎紅葉著多情多恨。魔風戀風（上、中、）あります何卒諸姉様に博文館發行島田豐君仝弟丸君合著、袖珍學生用英和字典あらば換讀さして下さい妾に、俳諧道しるべ（上、下、）共添へて差上升、御承知なら葉書にて下名へ（秋田縣角間川町黑丸忠四郎方仝登美子）○諸孃様見事な繪端書難有御約束の二十五名には直に送りました他の方には一一御返禮致兼ますから誌上で御禮申上ます。（群馬縣碓氷郡九十九村大字小日向村第六十九番地横田廣次郎方横田よれ子）○俳句かきわらひ集末長く交際下さる方へ上升三十部申込順（埼玉縣北埼玉郡大塚村江森茂十二方紫花子）○皆様繪葉書の交換をして下さい、又左の書籍不用ですから美くしい繪葉書で申込下されば先着者十名へ送ります、洋行奇談、圖畫速寫法、一年有半、文藝倶樂部等（大阪北區富島町四六六きよ子）○塔影小詩國春駒亂れ髮草わかば七つ星夕潮山上潮上春くさ天地有情の中四册か五册と二十五絃か舞姬と交換して下さいます御方は大至急お知らせ下さい（大阪市靱上通二丁目七八三宅方櫻井）○妾の手許に小說（次郎島）と日本歷史遊戲とが有りますから女子文壇一卷二號と十號とに御交換下さるお方は有りませむか、いづれか一册御送り下すつた方にはお好みの物一册差上

ます（仁川港風月堂奥田愛子）○皆様の中に自然と人生と小公子と御もちの方はございませんか古くても宜しいのですもつて入らつしやる方は私に送つて下さいまし夫相應な御禮をします（牛込區新小川町三ノ三二市來こと子）○皆様の中で物理學化學の能い參考書を御持ちの方は私の所持品雜誌及び物品と交換をねがひます（山梨縣甲府市穴切町加賀美ちよ子）○諸姉様方に女子文壇懸賞文集お持ちの方は女學世界と御交換を願います又御交際も願ひます（下毛足利郡足利町五丁目清水りやう子）○誌友諸姉の内で歴史讀本花の白雲をお讓り下さる方がありましたら先づ下名へ御一報下さいましな、尤も相當のお禮は致しますから（大阪南區南桃谷一丁目十五番地六車よしを）○私はゲエテの本を持て居るのよ若し幻影をおもちの御方がありましたら交換を願ひます（神奈川縣高座郡相原村橋本柚木とよ子）○下記の書不用繪葉書にて申込まれよ但くぢにて。乳姉妹、かぐや姫、不如歸、舞姫、二人孤兒、雲がくれ。（埼玉縣熊谷櫻町小林彦次郎方しげ子）

○繪端書交換

○諸友の御姉上様繪葉書の交換して下さいれ！成るべく風景ならば尚更いゝのよ（神戸市多聞通二丁目三十一番地書籍商笠井秋子）○私郡山の峰子さんと親友ですが以後繪葉書の交換願ます（大阪市東區上本町二丁目五六印藤政子）○諸姉さま何卒繪ハガキの交換を願ひます又私の許に小説己が罪春の一夜不如歸等がありますさし上げても宜しいですから繪葉書で知らして下さい（福岡縣遠賀郡底井野坂田とよ子）○本誌の愛讀生たる皆さん何卒繪葉書なり御肉筆の文を是非送りて下さいな私きつと相當に御禮致ますから又御望みの方には外國の郵便切手を差上げます（石川縣鳳至郡輪島町字横町中島美代子）○御茶の水、跡見、日本、三輪田、女學館、府立、其他の方にて末長く繪ハガキ交換して下さる方は御座いませんか、私は或學問の學校へ參る者（府下豐多摩郡戸塚村六五五田中光子）○妾は小い時から繪葉書を集めましたの今では五百枚もあるのよ諸嬢さん奮て御交換を願ひます（相摸國横須賀町汐入四六八宮城方阿部もつじ子）○御交際を兼ねて繪葉がき交換願ひます（下野鹿沼郡下横町一〇九太田しぐれ）○御親はしき諸姉様方よ以後宜しくエハガキ御交換をして下さいな（熊本縣八代縣八代町字鷹匠小路井山たき子）○靜岡縣の愛讀者諸君よ、繪葉書交換を致して下さい、妾きつと御返事致しますかられ（靜岡縣志太郡朝比奈村字新船山下芳枝）○皆々様妾は今度都合て當地に轉居致しましたが以後は相變らず寫眞と繪葉書交換を願ひます尚肉筆は最も歡迎致します（茨城縣猿島郡岩井町藤沼作子）○繪はがきの鑿紙御送り被下た御方には御禮に私の寫眞や當地の寫眞を上ます棄てもかまいませんどうか御惠み下さい（高知縣高岡郡越知町和田豊龜）○當文壇を愛讀しておるものですが何卒御交際繪端書交換をねがひます（神戸榮五有年絹子）○繪ハガキ交換を望みます短文て申入れます（秋田縣能代大町渡部醫院内都美山幽香子）○名所繪ハガキ又は肉筆繪ハガキを送つて下さい當地八景繪ハガキを送ります（栃木縣芳賀郡山前村大字南高岡仁平常松方仙山すみれ子）○諸嬢様方よりの繪端書到着數九十七枚の多きに至りました内先着者三名は神田の小林櫻花様、北海道の山本よし子様、羽前の池上こと子様でした中には男子の方と思はれる方が御座いました其方々には一切御返し致しませんでした一寸諸嬢様の御親切を謝します（芝區新錢座町八鶴岡かつ子）○詩友諸嬢様、妾は轉地療養としてこの至つてさびしい片山里に、ひれもすさびしくあそびくらして居るのよ、あはれとおぼしめしたら繪葉書とか又は、書籍の交換を願ひます（千葉縣長生郡新治村桂白井よし子）○記者様、うるはしき褒狀に添へてかく迄の御賞品を賜はり何とも御禮の申し様もありませむ。只將來大に勉めまする。其から皆様へ、何卒中等位の繪はがき交換を切望します、先着者には栞を差上げます（津市西新町三九、松尾花子）○私は御友達が少いので困つて居ります繪葉書の御交際をねがいます、（津市藏町二八坂ふみ子）○今回知己兩三名申合せ各々書籍雜誌を集め（其數五十册）全國誌友皆々様に繪葉書一葉を乞ふて秀逸の御方には「女子衞生學價參拾錢」及「婦女家庭訓參拾五錢」の二部を送呈し一等には「近體文教科書」一部を送呈し以下送呈致しますから何卒贊成して下さい決して瞞着手段は取りませんから御安心して送つて下さい（愛知縣中島郡起町吉村幽翠子）○皆様私は女子文壇へ今度御仲間入りをしましたから何卒繪はがきの交換や御文通を願ひます（千葉縣香取郡

中村南中柴田澤子）○誌友の諸孃繪ハガキ寫眞編物の御交換を願ます何れにても先着の方には特別に御禮します（仙臺東四ノ番丁二ノ四泉田方孤蝶女史）○皆様繪葉書交換して下さい先着十五名に左の品を呈します一シャツのひな形、二黄菊白菊、三秋の寫眞、四大砲の種、五しをり六七八はズボンのひな方、九十十一はすみれの押花十二十三十四十五は、ムラサキ等あります、それから孝女白菊乳姉妹夏子不如歸等お送り下さる方はシャツズボン及び小說白百合の三種を送ります殊に乳姉妹をくれる人には秋の寫眞少女界等送ります それから 編物の 交換もれ（神戸市中山手通り七丁目三十一ノ五十六、加藤よし子）○賢明なる諸孃様よ妾は薄學な者てすが以後は宜敷文通御交際を願ひます（下關市田中町本通一丁目杉山愛子）○諸孃がたは皆繁華の地に居らつしやるから色々樂み事が澤山あるでしようが妾のような田舎者は何も樂み事がないから誠に寂しくてこまりますて希くは滿天下の諸孃方誌友の好を以て繪端書の交換をして下さいませむか（越後西頸城郡根知村山本あつ子）○諸孃様繪葉書、編物、栞等の交換をして頂戴れ、私も好い物を御禮致します（京都府向日町字井ノ内重松敏子）○誌友の諸姉様美しき繪はがき御送り下さいまして誠に有りがたうぞんじましたすぐ御返事致さればならなかつたが妾都合ありなつかしき故郷にかへり本日かへりました次第てすから惡しからず御承知を願升これからはかならず御返事致しますから以前の如く繪はがきの交換や文通して下さい（秋田縣仙北郡大曲町高島豐吉方村井花枝）

○剽窃詩文の注意

▲二卷六號の分

○八王子、志茂紫。小說秀逸八王子志茂紫の「なさぬ中」は三十四年十一月發刊女學世界増刊磯千鳥中の茨城縣新治郡土浦山口すみ子君の地賞「産まぬ中」の下の剽窃なり。

○秋田、白菊。和歌欄秀逸秋田白菊の「友去ると――」の歌は秀才文壇五ノ十五天賞神奈川縣中村清吉君の作を剽窃せしものなり。

○上總、雪枝子。和歌欄秀逸上總雪枝子の「讃經やみて――」の歌は三十八年三月「中學世界」第二賞木村深城君の作其儘の剽窃なり。

○石川、白菊ゆき子。はがき文特別第三賞石川縣鶴來町白菊ゆき子の「脊蛙」は大日本國民中學會講義錄第一回懸賞百字文甲賞伊豆雨宮顯正君作と一字一句も相違なし剽窃とす。

▲二卷五號の分

○尾張、犬飼雨園。叙事文特別第三賞尾張福田犬飼雨園子君の「おぼろ月夜」は秀才文壇五ノ十一美文欄天賞晁陽隨天子君の「笛の主」を剽窃せしものなり。

○常陸、今泉艮子。抒情文天賞常陸石岡町今泉艮子の「花の別れ」は學生倶樂部一ノ五文藝室吉野翠南君の「われ今都を去らん」の燒直しなり。

○磐城、佐藤榮子。新體詩欄三の頁磐城佐藤榮子の「乙女の化粧」は新體詩界山高水長の中なる太田玉茗氏の「化粧」を剽窃せしものなり。

○茨城、小泉濱子。新體詩秀逸茨城小泉濱子の「雲の歌」は中段二節だけ秀才文壇三ノ十一遠江大橋天龍君作「雲の歌」の中の數節と違ひなし。

○品川、星子。はがき文一〇六頁品川星子の「花の色」は中學世界八ノ六名古屋渡邊政勝君の「紫の梅」と始め五六字の相違のみ。

○千葉、高橋芳子。俳句秀逸千葉高橋芳子の「黄昏や醉ふて――」の句は萬朝報六百四十五回内藤鳴雪選當選の 横濱 佐藤 外天君 の作と同一。

○埼玉、小林きやう子。圖畫地賞埼玉縣大里郡吉岡村小林きやう子の「ろくぶ」は新古文林一ノ二、二七三頁小杉未醒氏の繪を剽窃せしものとす。

締切までに分つたのは以上の通り、未だ有つたら次號て發表します、實にけしからぬ人達てすが今に記者は剽窃家の名簿を調製し世間に顏向けのならぬやう大痛棒を加へるつもりてす、偖て例の通り右注意して下さつた諸君の芳名を左に掲げて謝辭に代へます。

○芝、仙桃逸人○横濱、星戸菫子、稲澤秀子○茨城、ハイカラ女史○能登、千田美英子○横濱、千代子○德島、しげ子○德島、住友時子○磐城、時子○淺野撫子○安房、忍足笛音子○讃岐、松永茂子○大阪、中村山蘇○丹後、

K、T生。

募集課目

選評大家（文學士沼波瓊音先生、廣津柳浪先生、河井醉茗先生、佐々木信綱先生、巖谷小波先生、山中古洞先生）

○論文　○抒情文　○叙事文（各半紙廿四字詰三十行以內）

○消息文（半紙廿四字詰二十行以內）　○はがき文（半紙かな付廿四字四行）

○短編小說（半紙總かな付廿四字六十行內）　○新躰詩（半紙十句以內）

○和歌（半紙一首）　○新歌謠（上仝）　○圖畫（一寸の二寸判風俗景色）

○新俳句（端書又は半紙一句）

○一口噺

▲各欄「題」隨意一人佳作一章宛の事　但着色無用日本紙の薄きもの

賞與品

（賞與金、一等五拾錢二等參拾錢三等貳拾錢正金にて呈す）

○論文○抒情文○叙事文○消息文○小說○圖畫の當選者へは左記の相當價格品選定の上贈與すべし

▲天賞　金壹圓五拾錢　▲地賞　金壹圓　▲人賞　金五拾錢

▲特別賞▼（正金を呈す）一等金三圓、二等金貳圓、三等金壹圓五拾錢

○新體詩○はがき文○和歌○俳句○新歌謠の當選者へ贈與品左の如し

▲天賞本誌三ヶ月分　▲地賞同二ヶ月分　▲人賞同一ヶ月分

▲特別賞▼（正金を呈す）一等金壹圓、二等金七拾錢、三等金五拾錢

右當選者は贈品に差支へざる樣前以て住所氏名を通知あれ○賞品は發表二ヶ月の後に故障なき者へ美麗なる名譽褒狀を添へ贈呈すべし

【投稿〆切＝每月十五日】

▲嚴守すべき投書規定必一讀を要す

○投書は各欄とも決して政治的時事論に涉るべからず、○用紙は規定の紙に限る○投書は一行廿四字詰に認むべし、但し句點も一字に數ふべし○投書には題の下には必らず本誌に倣ひ住所姓名を明記し、書體は楷書にて假名は平假名を用ひ明瞭なるを要す○各種の投書は必ず別に認むべし○封筒には『原稿在中』の文字を記すべし○投書の中には他の用事の文句を記すべからず○投書には各自句點を施すべし、圈點は一切施すを禁ず○投書は他人の作物を剽竊するを禁ず之を犯したる當選文は無効たるべし○投書は一切返附せず○此規定に背く原稿は一切沒收す○投書は不足、未納稅は一切受取らざるべし○各種の原稿（仝封）取纏郵送するときは開封にして差出せば卅匁迄二錢にて事足れり

最寄書店になくば直接發行所へ注文を乞ふ

定價

女子文壇（每號水彩畫繪端書寫眞口繪數葉挿入）　每月一日發行

一冊（大判百二十頁以上）	前金拾錢
六冊……	前金五拾七錢
十二冊……	前金壹圓八錢
十六冊（增刊トモ）……	前金壹圓四拾四錢

直接申込に限り　郵稅全廢無料

定期增刊四回　二月五月八月十一月

注文心得

○本誌は前金の外送本不致候○領收書は一切差出さず候○御注文每に何號より何册及御住所氏名等は詳細に御認め可被下候○郵券（收入印紙謝絕）代用は必す定價の壹割增に願上候○御問合は返信料付に願上候▲御申越の號數賣切の時は近刊の分を代送可仕候

▲缺本にならぬ法▼……郵稅不要なれば前金拂込むに限る

廣告料金

改正

特等	一等	普通
一頁三十圓	一頁廿五圓	一頁廿三圓
半頁……	半頁十三圓	半頁十二圓
一行……	一行……	一行四拾錢

〆切每月十五日也

【備考】特等場所は表紙二、四の面なり○壹等場所は表紙三の面、色紙刷各區別の始終の頁、本文第一頁の對面、石版と寫眞口繪の對面なり○普通場所は本社が適宜に刷込むものなり▲廣告面一行は五號活字廿四字のもと半頁は（一段）卅二行分、一頁は（二段）六十四行分也

無比廉價　金拾錢

明治三十九年五月廿九日印刷
明治三十九年六月一日發行

（二卷第八號）

不許轉載

編輯兼發行者　東京市京橋區大鋸町十一番地　野口竹次郎

印刷者　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　石川金太郎

印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地　株式會社秀英舍

發行所　東京市京橋區大鋸町十、十一番地　電話【本局六〇七番】　女子文壇社

特約發賣元

東京市神田區表神保町三番地　東京堂書店
東京市京橋區尾張町二丁目廿　東海堂
東京市日本橋區吳服町六番地　北隆館合資會社
東京市神田區裏神保町一番地　上田屋書店
東京市京橋區鎗屋町九番地　良明堂

第貳卷第八號　女子文壇　明治三十九年六月一日發行
（毎月一回一日）

【明治三十七年十二月十九日第三種郵便物認可】



女子文壇　最廉無比
定價金拾錢
郵税壹錢
本社支辨

（東京秀英舍印刷）